

(平成16・17年度)

外来種（動物）の現状等に関する報告書

平成19年3月

千葉県外来種対策（動物）検討委員会
千葉県環境生活部自然保護課

千葉県外来種対策(動物)検討委員会. 2007. 外来種(動物)の現状等に関する報告書. 72 pp. 千葉県生活環境部自然保護課, 千葉県.

Scientific Committee on Problem of the Alien Animals in Chiba Prefecture. 2007. Report on the Present Status of Alien Animals in Chiba Prefecture. 72 pp. Nature Conservation Division of Chiba, Chiba Prefectural Government.

はじめに

近年、ブラックバス、アライグマ、マングース等人間によって海外や他地域から持ち込まれた生物種が増えており、これによって、在来生物の捕食や駆逐、在来種との交雑が進むなど、地域固有の生物や生態系にとって大きな脅威となっています。

このため、環境省は、平成17年6月に「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律（外来生物法）」を施行しました。この法律の目的は、在来の生態系、人の生命・身体又は農林水産業に対する被害を防止することであり、そのため、外来生物のうち、被害を及ぼし、又は及ぼすおそれがあるものを特定外来生物として指定し、飼育、栽培、輸入等を原則禁止し、防除等を行なうこととしています。

千葉県においては、アカゲザル、キョン、アライグマ、カミツキガメ等が地域の在来種の生態系に影響を与えていることから、特にアカゲザルとキョンについては個別に対策を講じることとして、外来生物法が公布される前の平成13年度から駆除の方針を決定して生息状況の調査、捕獲を行っており、またカミツキガメについても印旛沼水系における生息状況調査（平成16、17年度）や遺棄された個体を中心とした防除（平成18年度）を行なっています。

今後は、これまでの取り組みや調査結果等を踏まえて、総合的な外来種防除対策に取り組んでいくことが必要となります。

そこで、千葉県外来種対策（動物）検討委員会（委員長：望月賢二）は、県からの委託により、本県における外来種の状況を把握し、防除対策を総合的に展開するために、平成16年度から外来種リストの作成や個々の外来種対策について検討を進めてきました。

本報告書は、千葉県から知られている全外来種に関するリストを作成するほか、防除対策に対する取組体制等についてとりまとめを行なったものです。

千葉県外来種対策（動物）委員会 委員長 望月 賢二

目 次

はじめに

I	作成の経緯	1
II	外来動物概論	2
	1	はじめに
	2	外来動物による影響
	3	外来動物が入る経路
	4	これまでに取り組まれてきた対策
	5	今後の取組の基本的方向性
III	千葉県への提言	9
	1	従来の取組の継続・強化、外来種対策委員会（仮称）の設置等
	2	定着外来生物を増やさないために
	3	外来動物の状況の継続的把握と速やかな対策の実施
IV	外来種（動物）リスト	
	1	生態系又は人に対する影響度又は緊急度ランクがAのもの…… 1 2
	2	全外来種（動物） …… 4 0
	3	引用文献 …… 6 6
V	謝辞	7 1

I 作成の経緯

1 検討の経緯

平成16年度から2ヵ年をかけて、千葉県における外来種リスト及び外来種対策に関する基本的な考え方を取りまとめることとした。取りまとめに当たって、千葉県外来種対策（動物）検討委員会を設置して、県内における外来種（動物）の分類群、対象範囲、生態系等への影響度、防除の緊急度、予防対策等について検討を行なった。

2 検討の体制

本書の作成に当たっては、5名の専門家で構成する「千葉県外来種対策（動物）検討委員会」（委員長：望月賢二千葉県立中央博物館副館長）を設置した。

○千葉県外来種対策（動物）検討委員会委員

望月 賢二	（委員長・魚類）	千葉県立中央博物館副館長
落合 啓二	（哺乳類）	千葉県立中央博物館上席研究員
長谷川 雅美	（両生爬虫類）	東邦大学理学部助教授
斎藤 明子	（昆虫）	千葉県立中央博物館上席研究員
黒住 耐二	（軟体動物）	千葉県立中央博物館上席研究員

※所属と役職は平成16年度当時

3 検討状況

第1回外来種対策（動物）委員会の開催（平成16年11月15日）

第2回外来種対策（動物）委員会の開催（平成17年 3月 3日）

第3回外来種対策（動物）委員会の開催（平成17年 7月28日）

第4回外来種対策（動物）委員会の開催（平成18年 1月26日）

II 外来動物についての概論

1. はじめに

近年、しばしば外来動物に関するニュースに接するようになった。この内容には、生活や生産、さらには人に対する直接的被害(被害の危険性)などがある。さらに、自然生態系や希少生物などへの影響を伝えるものや、珍しいものとして紹介するトピックスまで、その内容は大変多様で幅広い。

これは、わが国(地域)に移入され、定着した外来動物の種数の増大、分布域や個体数の拡大などに伴い、人と外来動物の接点が増加するとともに、人の生命・財産・快適な生活などを脅かす問題が発生していることの現れであるといえる。さらには地域の自然に対する影響もあり、様々な波紋を投げかけている。

国では、外来生物問題の顕在化に対応し影響の大きい一部の種を主な対象に「外来生物法」を作り、対策をとり始めている。しかし、この外来動物の問題は、法律が出来ればそれで解決のめどがつくような簡単な問題ではないと思われる。それは、わが国や千葉県に定着した外来動物は判っているだけでも大変多数にのぼる。さらに、定着はしていないが継続的に持ち込まれている外来動物、すなわち近い将来定着するかもしれない「潜在的な外来動物」はさらに膨大であると推測される。そして、それぞれの種毎に生物学的特性が異なることから、一般的には対策も種ごとに異なると考えられることなどによる。さらに、外来動物を受け入れようとする社会的土壌もある。

このように、外来動物問題は大変複雑で困難な課題であるが、その解決に向けた十分な効果を期待するためには、各地域で継続的調査を行い、何よりも多面的で総合的な科学的な知見を出すことが不可欠である。そして、その成果に基づいた、国と地域の協力の下に、地道で粘り強い取り組みを実施することが何よりも必要であろう。

外来動物の問題は、このように多様で解決困難であるため、十分な情報を集めるとともに、それを分析・整理したうえで対策を考える必要がある。このため、ここでは外来動物問題の概要について整理を行い、外来動物各種の情報のよりよい理解の一助としたい。

なお、以下の用語については、環境省外来生物法の防除の公示に準じて、本報告の中では以下のように定義する。

完全排除：対象地域内に生存している個体数をゼロにすること。対象動物群によっては、(完全)駆除、根絶などを用いることがある。

軽減：対象地域内の外来生物による人、社会、自然などに対する否定的影響の程度を引き下げ、許容限度内に抑えること。対象動物群によっては、防衛、抑制などを用いることもある。手法としては、部分排除・繁殖を抑える・生息域の環境を変えるなど様々な手法で個体数を少なくする、人や社会への影響が出ないように対策するなどが考えられる。

2. 外来動物による影響

これまで報告されている外来生物による影響には以下のようなものがある。

(1) 人に対する影響

1) 身体被害等の直接的影響

(a)直接的危害

例：大型動物等の直接被害、アリ・クモ類などの刺毒、咬毒動物被害など。

(b)健康被害

例：外来種が持ち込む寄生虫・病気による被害など。

(c)精神的被害

例：鳥の糞などがひどく屋外に出にくいなど。

2) 生活上の被害・影響

(a)物をとる・壊す

例：家内の食べ物をあさるなど。

(b)生活環境悪化

例：建物周辺やベランダなどに糞をまき散らす、家の内部に巣を作るなど。

3) 経済的被害

(a)産物・物品等を取る・食べる・荒らす

例：果実や農産物の食害・踏み荒らし、シロアリ類による家屋被害、果実への寄生による減産被害。

(b)出荷できなくなる

例：寄生による被害拡大防止のための出荷禁止など。

(c)有用在来種の減産被害

例：有用在来種の資源量減少による減産など。

(d)客誘致上の障害

例：観光地での客の被害による来訪者減少など。

(2) 自然に対する影響

1) 在来他種に対する影響

(a) 捕食被害

例：ブラックバスによる在来水生動物捕食など。

(b) 競争的排除

例：タイリクバラタナゴによるミヤコタナゴとの置き換わりなど。

(c) 遺伝的汚染

例：ニホンザルとアカゲザル、オオマルハナバチとセイヨウオオマルハナバチ等の近縁種間の交雑など。

注：在来種であっても、人工繁殖個体群では遺伝子組成が野生群のものとは異なるため、遺伝子組成が異なる別亜種や地域外の同種個体群の導入と同質の問題がある。

(d) 病気・寄生生物等の持ち込みや伝播

例：ペット類による他生物の病気の持込など。

2) 生態系に対する影響

(a) 定着による生態系の構成や種間バランスの変化など

注： 外来動物は、それが入る経路の項に記した様に、(1)愛玩動物として身近で飼育する、野外に放して楽しむ、餌を与えて楽しむ、捕獲することを楽しむなどの生活上の様々な潤いを与える存在、(2) 生産対象種であったり生産を増進するなどの経済的有用性をもつなどの点で、社会的に必要な存在として認識されているものがあることについて、そのマイナスの影響とともに合わせて見ていく必要がある。

3. 外来動物が入ってくる経路

外来動物が持ち込まれ、その分布域を拡大する経路にはいくつもある。

(1) 産業上の需要による移入個体の逃げ出し（野外逸脱）、放出(放流)など

(a) その種自体の利用を目的にした導入からの逸出・放出など

(ア)飼育施設の管理不足・倒産等による管理中の逸出

例：キョン、スクミリンゴガイ、チャンネルキャットフィッシュ、タイリクスズキなどの多くの海産魚、セイヨウオオマルハナバチなど。

(イ)産業創出・維持や既存資源の増強を目的にした野外放出（放流）

例：アサリなど水産資源増殖、ブラックバスなどの釣り場作り、コウライキジなどの狩猟場の創出・改善など。

(b) 一時的導入からの逸出、放出

(ア) 輸入時の一時的蓄養からの分布拡大

例：アサリなど。

(イ) 導入や一時的蓄養に付随

例：サキグロタマツメタ、タイリクバラタナゴなど。

(ウ)「自然をよくする」意識からの入手・放出(放流)

例：購入した外国産シジミ類の放流、タナゴ類の生息地への購入イシガイ類の放流など。

(2) 愛玩動物としての持込

(a) 愛玩動物の飼育管理下からの逸出

例：多くのペット類など。

(b) 飼いきれない、興味がなくなるなどした愛玩動物の野外放出(殺すことはかわいそうという意識が背景)

例：アライグマ、カミツキガメ等の多くの愛玩動物としての小動物など。

(c) 「自然をよくするため」、「野外で見たい」などによる愛玩動物や入手した動物の野外放出

例：メダカ、養殖ゴイ、ホタル類など。

(3) 人の活動(移動)に付随した移動

(a) 船のバラスト水・船底付着などでの生き残りとしち寄り先での放出・逃亡

例：多くの内湾性動物など。

(b) 荷物、材木、その他の移動されるものに付随

例：セアカゴケグモなど。

(c) 航空機・船舶等の交通機関への紛れ込み

例：ネズミ類、カ類など。

注： 資源増殖、環境改善行事などを目的にした、野外個体群とは異なった遺伝子組成をもつ人工繁殖個体の野外放出は、地域の同種個体群の遺伝子汚染の可能性がある点で、外来動物となる危険性がある点に留意する必要がある。

注： (1) 地球温暖化などの気候変動、(2) 都市のヒートアイランド現象、(3) 河川・水域の環境改変、(4) 地域の自然の維持管理作業の放棄・放置などによる自然の変化などが、外来動物の定着や分布拡大などの背景として、密接に関与している可能性をあわせて見ておく必要がある。

4. これまで取り組まれてきた対策

外来生物については、様々な議論が行われてきたが、平成 17 年には国による外来生物法が施行され、その対策の第一歩が始まった。この法では、特定の有害な外来生物として指定された種については、移動や放出等、様々な規制がなされることになっている。

また、千葉県においては、同法に基づく対策の実施が始まっているが、それに先立ち人の生活や活動に対する影響が顕著である場合などに、被害の防除、軽減を目的に、対象動物の調査に基づく対策案の策定と実施がなされてきた。これらの例としては、在来のニホンザルの遺伝子汚染を防ぐためのアカゲザル対策、あるいは農業生産などに対するイノシシ対策などのため、それぞれに委員会が設置されている。さらに、そのもとでの調査の実施、計画立案が行われ、完全あるいは部分排除や被害防止・軽減のための電気柵設置など、様々な取り組みがすすめられてきた。また、咬傷被害の可能性のあるカミツキガメについても同様の対策が始まっている。

また、さらに種の保存法による国内希少野生動植物種であるミヤコタナゴ保全のため、侵入したタイリクバラタナゴの完全排除のための取り組みがなされた例もある。

さらに、そのほか農業における外来動物からの被害については個々の状況に応じた対策が取られてきている。

しかし、予防のための対策はほとんどなされていずおらず、実質的にこれからの課題である。

5. 今後の取り組みの基本的方向性

外来生物は、持ち込まれ野外に広がると、人や自然に対して様々な影響を与え、時に人的あるいは経済的被害の原因になる例も発生している。

このため、外来生物が野外で発見された場合は、原則的には早期の完全排除が必要である。

ただし、分布が広がるほど完全排除は困難となり、実行には人手や時間が大変か

かり、また経費も大変大きくなる傾向があり、完全排除を実施するための条件がそろわない場合が多い。

このため、人的な被害や経済的被害、あるいは自然に対する悪影響が明らかな場合などにおいて、被害や影響の「軽減」をはかることが主要な選択肢になることが多い。

また、これ以上外来動物の種数を増やさない「予防」の取り組みが重要になると考えられる。

これらの点から、外来動物に関する取り組みの基本的方向性は以下のように考えられる。

(1)これ以上の外来動物の導入・定着がないようにする

(a)持ち込まない・野外へ放出しないですむ社会構造への転換、自然に関する適切な教育と啓蒙、ペット産業の効果的規制、その他。

(b)持ち込んだ外来動物が野外に出ない管理の仕組みを作り出す。事故などでの逸出の防止策の実施。

(2)すでに持ち込まれ、定着している種への対応

(a)速やかな状況把握のための資料収集や調査の実施とそれによる完全排除・軽減方法の発見と方針の確立、およびそれを実施する組織の設置。

(b)完全排除あるいは軽減を明確にした対策の確立とそれを実行する取組組織の設置。

(c)完全排除あるいは軽減策の実施とその後のモニタリング調査の実施。

(3)中・長期的方針

外来種の状況を含む県内の自然の状況を判断する検討組織をつくり、常に状況を把握し、効果的な対策の速やかな実施を進める。このとき、地域内の自然についての「生物多様性管理」の一部として位置付けることも検討すべきである。

Ⅲ 千葉県への提言

千葉県内における外来動物の種数は、今回の検討／調査で分かっただけでも 24 3 種にのぼり、産業上あるいは愛玩動物として受け入れている外来動物の増加等を考えると、今後定着する外来動物の種数も増加することが予測される。また、小型の動物（特に無脊椎動物）では、研究者数が少ないために分類学的な検討も遅れており調査自体が困難なため、実際に何種定着しているのかほとんど知られていない。

近年、これらのことの反映として、人や社会、在来生物や自然に対する様々な影響が顕在化しつつある。そのため、影響の程度が深刻ないくつかの大型哺乳類等では対策のための組織が作られ、取り組みが実施されている。また、カミツキガメのように取り組みが始まった種もある。しかし、対策がとられている種数は極めて僅かである。

このような状況を踏まえ、千葉県の外来動物の現状をまとめた資料を作成できたことは、この問題を考える土台が出来た訳である。今後これをもとに、以下の取り組みを進めることが重要であると考えます。

1. 従来の取り組みの継続・強化、「外来生物対策委員会」（仮称）の設置、県組織の一本化

深刻な影響が顕在化している種に対して、これまで対策組織が作られ、取り組みが行われていることは評価できる。今後とも、これらの種については、継続的な調査に基づく適切な方針の堅持とその効果的な実施が強く望まれる。

同時に、これらの組織を包括し、外来生物全体の状況を把握し、対象種選定・緊急時を含めた調査と計画立案、実施対策の検証のためのモニタリング調査立案・結果の検討・改善等を行う組織として「外来生物対策委員会」（仮称）を設置することが強く望まれる。なお、この組織においては、完全公開を原則とすべきである。

また、外来生物問題は、多くの法律や規則に関わることから、これまで担当部署が個別に取り組んできたが、今後効果的な対策を速やかに進めるために、県庁内に一本化した担当部署を設置して取り組むことが望まれる。

2. 定着外来動物を増やさないために

外来動物の県内持込が高い頻度で続いていることなどから、これ以上の増加を防ぐことが重要である。このために、出来る限り外来種の持ち込みをしない、今まで以上に適切な管理の仕組みや技術の開発、自然の仕組みの理解促進と外来動物を野外に出さないことの重要性などについての教育・啓蒙が特に重要である。また、外来生物が定着しにくい環境への改善、輸入などの際における対象種以外の種の混入防止の推進など、多面的な取り組みを考えていく必要がある。

3. 外来動物の状況の継続的把握と速やかな対策の実施

新たな外来動物が確認された場合は、完全排除を目標に対応を検討し、速やかな対策の実施を原則とすべきである。とくに、個体数が少なく、分布範囲が狭い初期ほど、より短期間に、より少ない経費や人員で完全排除できる可能性が高いことから、すばやい計画立案と実施を心がけることが望まれる。

すでに分布を広げてしまった外来動物や完全排除が困難である動物の場合、可能な限り効果的な軽減を目標に、速やかな対応を実施すべきである。

また、産業上の必要性による継続的な外来動物の導入の場合、野外への逸出の防止のための取り扱いや管理の徹底、野外へ逸出した場合の軽減など、効果的な対策を開発・実施することが重要である。

外来種（動物）リスト

— 生態系又は人に対する影響度又は緊急度ランクがAのもの —

外来種の定義について

(1)	侵入した時期は、問わない。
(2)	侵入した経緯については、何らかの人の行為によって侵入したものに限る。 また、千葉県以外において人の行為によって侵入した種が、自力で移動してきた場合も含める。
(3)	定着しているかどうか野外での確認が得られていないものについては、注釈をつける。
(4)	品種改良種、遺伝子レベルでの外来種は、注釈をつける。
(5)	海域の範囲は、概ね200海里以内とする。
(6)	リストアップが困難な種として、分類が万全でないダニなどは〇〇類とする。
(7)	対象とする動物群は、原生動物を除く全種とする。

生態系又は人に対する影響度

A	生態系又は人に対し、回復が困難となる深刻な影響が認められる、あるいは予測される。 (※生態系の回復が困難となる深刻な影響は、捕食、競争、交雑等による在来種の絶滅)
B	生態系又は人に対し、深刻な影響が認められる、あるいは予測される。
C	生態系又は人に対し、明らかな影響が認められる、あるいは予測される。
D	生態系又は人に対し、明らかな影響はあまり認められない、あるいは予測されない。
情報不足	現時点では、上記A～Dの影響度ランクを判定する情報が得られていない。

防除の緊急度

A	非常に高い。
B	高い。
C	低い。

リストNo.	分類	和名	学名
1	哺乳類	アカゲザル	<i>Macaca mulatta</i>
2	哺乳類	アライグマ	<i>Procyon lotor</i>
3	哺乳類	イノシシ	<i>Sus scrofa</i>
4	哺乳類	キョン	<i>Muntiacus reevesi</i>
5	哺乳類	ハクビシン	<i>Paguma larvata</i>
6	爬虫類	カミツキガメ	<i>Chelydra serpentina</i>
7	爬虫類	ミシシッピアカミミガメ	<i>Trachemys scripta elegans</i>
8	両生類	アフリカツメガエル	<i>Xenopus laevis</i>
9	両生類	ウシガエル	<i>Rana (Aquarana) catesbeiana</i>
10	両生類	トノサマガエル	<i>Rana (Pelophylax) nigromaculata</i>
11	魚類	オオクチバス	<i>Micropterus salmoides</i>
12	魚類	タイリクバラタナゴ	<i>Rhodeus ocellatus ocellatus</i>
13	魚類	ブルーギル	<i>Lepomis macrochirus</i>
14	昆虫類	セイヨウオオマルハナバチ	<i>Bombus terrestris</i>
15	軟体動物	アサリ	<i>Ruditapes philippinarum</i>
16	軟体動物	イスパニアマイマイ	<i>Eobania vermiculata</i>
17	軟体動物	カネツケシジミ	<i>Corbicula fluminea form insularis</i>
18	軟体動物	カワヒバリガイ	<i>Limnoperna fortunei</i>
19	軟体動物	ゴマフダマ	<i>Natica tigrina</i>
20	軟体動物	サキグロタマツメタ	<i>Euspira fortunei</i>
21	軟体動物	シジミ属の一種	<i>Corbicula sp. cf. largillierti</i>
22	軟体動物	シナハマグリ	<i>Meretrix petechialis</i>
23	軟体動物	スクミリンゴガイ	<i>Pomacea canaliculata</i>
24	軟体動物	タイワンシジミ	<i>Corbicula fluminea</i>
25	軟体動物	ムラサキガイ	<i>Mytilus galloprovincialis</i>
26	線虫類	マツノザイセンチュウ	<i>Bursaphelenchus xylophilus</i>

千葉県の外来種整理表(生態系又は人に対する影響度または防除の緊急度ランクがAのもの)

No. Aランク: 1

分類	哺乳類	
和名	アカゲザル	
学名	<i>Macaca mulatta</i>	
分類群	霊長目オナガザル科	
土着生息地(原産地)	インド、中国、東南アジアなど	
生息情報	日本での分布状況	千葉県
	千葉県での分布状況	館山市、南房総市
	千葉県での生息状況	生息数・分布が増加拡大中。2005年度の調査で、3集団、350～380頭を確認。
移入経路	日本	-
	千葉県	観光施設又はペットの放逐・逸出
移入年代	日本	-
	千葉県	館山市・南房総市のアカゲザルは1956年に初めて生息確認された。移入時期は不明。これとは別に、1970～1980年代に君津市高岩山において外国産マカクの移入・交雑が生じ、交雑個体の除去が行われた。
体重等	体重5～8kg 頭胴長47～64cm 尾長19～30cm	
生息環境	陸域：森林	
生活史	昼行性。メンバーの決まった数10頭～100頭以上の群れで森林内を遊動する。	
繁殖	繁殖場所	森林
	時期	不明
	繁殖形態	1産1子
食性	主に植物の果実や葉	
生態系への影響	ニホンザルとの交雑	
人への被害	農林水産業への被害	農作物被害
	生活被害	現在のところ、なし
	生命身体への被害	現在のところ、なし
生態系又は人に対する影響度	A	
緊急防除度の	緊急度ランク	A
	緊急度の情報	ニホンザルとの間で交雑がすでに確認されており、危機的状況にある。
対策	予防対策	飼育管理の強化・外来種問題の普及啓発
	すでに定着している場合の対策	実態調査・全頭捕獲・食害の技術的防除
文献	全般	なし
	千葉県	房総のサル管理調査会(1999)、萩原・川本(2001)、萩原ほか(2003)、川本ほか(2004)、NPO法人房総の野生生物調査会(2005)
写真・標本の有無(保管先)	剥製標本(千葉県立中央博物館)、写真(相澤敬吾・池田文隆)	
備考		

千葉県の外来種整理表(生態系又は人に対する影響度または防除の緊急度ランクがAのもの)

No.	Aランク: 2	
	分類	哺乳類
	和名	アライグマ
	学名	<i>Procyon lotor</i>
	分類群	食肉目アライグマ科
	土着生息地(原産地)	北アメリカ
生息情報	日本での分布状況	日本各地
	千葉県での分布状況	夷隅地域、君津市、印西市などで繁殖が確認。県内広くに分布。
	千葉県での生息状況	生息数・分布が増加拡大中。2006年度の調査で、県内の生息数は約1000～7000頭と推定。
移入経路	日本	ペットの放逐・逸出
	千葉県	ペットの放逐・逸出
移入年代	日本	1960年代
	千葉県	1990年代(県内における繁殖の初記録は1996年ころ)
	体重等	体重4～10数kg 頭胴長41～60cm 尾長20～41cm
	生息環境	陸域: 森林、農村地域、住宅地など
	生活史	夜行性。木登りが得意で樹上をよく利用する。水辺を好む。
繁殖	繁殖場所	樹洞、人家の屋根裏など
	時期	主に春
	繁殖形態	3～6頭ほどの子を出産
	食性	雑食性(昆虫類、小型の脊椎動物、果実など)
	生態系への影響	在来生物の捕食、在来の中型雑食獣との競合、フクロウ類の繁殖樹洞の占拠
人への被害	農林水産業への被害	農作物被害
	生活被害	天井裏の糞尿・騒音、飼育魚の捕食
	生命身体への被害	現在のところ、なし(アライグマ回虫の危険性が指摘されている)
	生態系又は人に対する影響度	A
緊防除度の	緊急度ランク	A
	緊急度の情報	北海道や神奈川県等の状況から今後、農作物被害や生態系への影響が増大するものと予測される。定着初期における早急な対策が望まれる。
対策	予防対策	飼育管理の強化・外来種問題の普及啓発
	すでに定着している場合の対策	実態調査・捕獲駆除・食害の技術的防除
文献	全般	日本生態学会(2002)、鈴木(2005)
	千葉県	落合ほか(2002)
	写真・標本の有無(保管先)	剥製・骨格標本(千葉県立中央博物館)、写真(鎌田貢司郎)、映像(大木淳一)
	備考	尾に数本の黒い縞模様がある。

千葉県の外來種整理表(生態系又は人に対する影響度または防除の緊急度ランクがAのもの)

No. Aランク:3

分類		哺乳類
和名		イノシシ
学名		<i>Sus scrofa</i>
分類群		偶蹄目イノシシ科
土着生息地(原産地)		北アフリカの一部からユーラシア
生息情報	日本での分布状況	在来種として東北以南。国内外来種として日本各地。
	千葉県での分布状況	房総丘陵を中心とした地域。他に下総町、成田市など。
	千葉県での生息状況	生息数・分布が増加拡大中。2001年度の調査で、518km ² に生息と推定。
移入経路	日本	狩猟目的の放逐、飼育個体の逸出。
	千葉県	狩猟目的の放逐。一部に飼育個体の逸出。
移入年代	日本	不明
	千葉県	おそらく1980年代を中心に。
体重等		体重50～150kg 頭胴長120～150cm 尾長14～23cm
生息環境		陸域：森林、農村地域
生活史		夜に行動することが多いが、人間を警戒する必要のない場合には昼行性を示す。単独ないし母系的な小集団で暮らす。
繁殖	繁殖場所	森林
	時期	主に春
	繁殖形態	2～8頭(平均4～5頭)の子を出産
食性		雑食性(植物の根茎や堅果、ミミズなど)
生態系への影響		在来生物の捕食、タカサゴキララマダニの増加
人への被害	農林水産業への被害	農作物・タケノコ被害。水田の畦の掘りおこし。
	生活被害	現在のところ、なし
	生命身体への被害	現在のところ、なし
生態系又は人に対する影響度		A
緊防除度の	緊急度ランク	A
	緊急度の情報	近年、県内における農林作物被害金額が1億円を超えており、総合的な対策が必要である。
対策	予防対策	飼育管理の強化・外来種問題の普及啓発
	すでに定着している場合の対策	実態調査・捕獲駆除・食害の技術的防除・生息地管理
文献	全般	日本生態学会(2002)
	千葉県	千葉県生物学会(1999)、浅田ほか(2001)、房総のシカ調査会(2001、2002)
写真・標本の有無(保管先)		剥製・骨格標本(千葉県立中央博物館)、写真(大木淳一)
備考		国内外来種。イノブタを含む。在来個体群は昭和40年代ごろに絶滅した可能性が高いが、その遺伝子が一部残存している可能性も否定できない。

千葉県の外來種整理表(生態系又は人に対する影響度または防除の緊急度ランクがAのもの)

No.	Aランク: 4	
	分類	哺乳類
	和名	キョン
	学名	<i>Muntiacus reevesi</i>
	分類群	偶蹄目シカ科
	土着生息地(原産地)	中国南東部、台湾
生息情報	日本での分布状況	千葉県、東京都伊豆大島
	千葉県での分布状況	房総丘陵を中心とした地域(9市町)
	千葉県での生息状況	生息数・分布が増加拡大中。2006年度の調査で、570km ² に約1400-5400頭が生息していると推定。
移入経路	日本	観光施設からの逸出
	千葉県	観光施設からの逸出
移入年代	日本	1937-1980年代の間
	千葉県	1960-1980年代の間
	体重等	体重10kg 頭胴長70cm程度 尾長7-11cm
	生息環境	陸域: 森林
	生活史	昼夜を問わず、行動と休息を繰り返す。ほとんど単独で行動する。犬の吠え声のような大きな警戒声を発する。
繁殖	繁殖場所	森林
	時期	年間を通して出産が行われるが、5-10月が中心。
	繁殖形態	1産1子。生後半年前後の妊娠と、生後1年-1年2か月程度の初出産が可能。
	食性	植食性(木の葉や果実、草)
	生態系への影響	在来植物の採食。ニホンジカとの競合。
人への被害	農林水産業への被害	農作物被害
	生活被害	現在のところ、なし
	生命身体への被害	現在のところ、なし
	生態系又は人に対する影響度	A
緊急防除の	緊急度ランク	A
	緊急度の情報	生息数・分布が増加拡大しており、効果的な生息抑制が望まれる。
対策	予防対策	飼育管理の強化・外来種問題の普及啓発
	すでに定着している場合の対策	実態調査・捕獲駆除・食害の技術的防除
文献	全般	日本生態学会(2002)、鈴木(2005)
	千葉県	千葉県生物学会(1999)、浅田ほか(2000)、房総のシカ調査会(2001、2002、2007)
	写真・標本の有無(保管先)	剥製・骨格標本(千葉県立中央博物館)、写真(大木淳一)
	備考	勝浦市にあった観光施設が移入源と考えられる。

千葉県の外來種整理表(生態系又は人に対する影響度または防除の緊急度ランクがAのもの)

No. Aランク:5

分類		哺乳類
和名		ハクビシン
学名		<i>Paguma larvata</i>
分類群		食肉目ジャコウネコ科
土着生息地(原産地)		中国南東部、台湾、東南アジアなど
生息情報	日本での分布状況	本州以南
	千葉県での分布状況	ほぼ全域
	千葉県での生息状況	生息数・分布が増加拡大中。
移入経路	日本	毛皮用養殖個体の放逐・逸出
	千葉県	茨城県から分布拡大した可能性が高い。
移入年代	日本	太平洋戦争終戦前後ころ
	千葉県	1980年代(県内では1987年に死体が初記録)。
体重等		体重3~5kg 頭胴長48~60cm 尾長38~43cm
生息環境		陸域:森林、農村地域、住宅地など
生活史		夜行性。木登りが得意で樹上をよく利用する。
繁殖	繁殖場所	樹洞、人家(屋根裏)
	時期	春~秋
	繁殖形態	2~4頭の子を出産
食性		雑食性(昆虫類、陸生貝類、小型の脊椎動物、果実など)
生態系への影響		在来生物の捕食、在来の中型雑食獣との競合
人への被害	農林水産業への被害	農作物被害(果実を好む。安房郡のミカン、ピワ、夷隅郡のナシなどに被害)
	生活被害	天井裏の糞尿被害・騒音
	生命身体への被害	現在のところ、なし
生態系又は人に対する影響度		A
緊急防除の	緊急度ランク	A
	緊急度の情報	全県的に生息し、果樹等の食害が増大している。地域的に生息を抑制するなどの対策が望まれる。
対策	予防対策	飼育管理の強化・外来種問題の普及啓発
	すでに定着している場合の対策	実態調査・捕獲駆除・食害の技術的防除
文献	全般	日本生態学会(2002)、鈴木(2005)
	千葉県	落合(1998)、千葉県生物学会(1999)、落合・浅田(2002)
写真・標本の有無(保管先)		剥製・骨格標本(千葉県立中央博物館)、写真(大木淳一・田辺浩明)
備考		顔の中央の白線が目立つ。

千葉県の外来種整理表(生態系又は人に対する影響度または防除の緊急度ランクがAのもの)

No.		Aランク:6
分類		爬虫類
和名		カミツキガメ
学名		<i>Chelydra serpentina</i>
分類群		カメ目カミツキガメ科
土着生息地(原産地)		カナダ南部からアメリカ合衆国、中部アメリカを経てエクアドル
生息情報	日本での分布状況	日本では1970年頃にはペットとして流通し、日本各地の野外から放逐もしくは逃出したとみられる個体が発見されるようになり社会問題のひとつとして注目されるようになった。また、印旛沼以外では神奈川県大磯丘陵でまとまった数が捕獲されたほか、2003年には武蔵野市の保育園(産経新聞03.11.7)、2004年には都内の公園で孵化個体が確認(佐藤 私信)された。
	千葉県での分布状況	印旛沼周辺では1978年9月に高崎川で捕獲された記録(NHKニュース)が最も古く、鹿島川からも1986年に報告されている(産経新聞1986.6.12)。また、1990年代中頃からは、印旛沼の定置網で混獲されるようになった(千葉日報1998.9.12)。佐倉市の自然環境調査によれば1998年から1999年にかけて35個体が鹿島川、および高崎川で捕獲もしくは確認された(小林他 2000)。
	千葉県での生息状況	2002年には印旛沼周辺において野外での繁殖(産卵、孵化、交尾行動)が確認された(小林未発表)。
移入経路	日本	ペットの放逐・逸出
	千葉県	ペットの放逐・逸出
移入年代	日本	1970年代?
	千葉県	1978年の報告が最も古い記録
体重等		甲長45cm以上、体重30kg以上
生息環境		淡水域
生活史		極めて長寿命で飢餓耐性が強いので、一旦定着すると影響が長期化する恐れが高い。産卵数が多く、原産地におけるアライグマのような捕食者が存在しない場合には、個体群の増殖率が原産地よりも高くなる可能性がある。
繁殖	繁殖場所	生息地の河川堤防や周囲の水田畔で産卵が確認されている。
	時期	6月
	繁殖形態	卵生、メス1個体が1回の産卵で20~50個の卵を産む。
食性		基本的に水生動物を捕食する肉食性であるが、胃の内容物から水生植物が確認されることもある。
生態系への影響		在来水生生物への捕食圧
人への被害	農林水産業への被害	農作業中に咬傷被害が発生する可能性がある。
	生活被害	不明
	生命身体への被害	水辺で咬傷被害を受ける可能性がある。
生態系又は人に対する影響度		A
緊急度の防除	緊急度ランク	A
	緊急度の情報	定着個体群の総個体数および分布範囲が限られているうちに駆除を実施することが必要。時期が遅くなればなるほど、駆除は困難になる。
対策	予防対策	飼育個体の遺棄防止の普及啓発
	すでに定着している場合の対策	野生化した集団の生態に関する基礎的研究と、駆除方法の検討を目指した試験的駆除の実施
文献	全般	日本生態学会(2002)
	千葉県	
写真・標本の有無(保管先)		有り(東邦大学・千葉県立中央博物館)
備考		

千葉県外来種整理表(生態系又は人に対する影響度または防除の緊急度ランクがAのもの)

No. Aランク:7

分類		爬虫類
和名		ミシシippiaカミミガメ
学名		<i>Trachemys scripta elegans</i>
分類群		カメ目ヌマガメ科
土着生息地(原産地)		北アメリカ東部
生息情報	日本での分布状況	沖縄から北海道まで全国に定着
	千葉県での分布状況	都市近郊の河川や調節池
	千葉県での生息状況	定着し、繁殖していることはほぼ確実であるが、詳細な研究による実証はまだ行われていない。
移入経路	日本	ペットの放逐・逸出
	千葉県	ペットの放逐・逸出
移入年代	日本	
	千葉県	不明
体重等		雄、甲長20cm 雌、甲長28cm
生息環境		淡水域
生活史		オスよりもメスの方が大型になり、メスは背甲長が28cm、体重2.5kgに達する。
繁殖	繁殖場所	生息地の池や沼、河川周辺の地面に穴を掘って産卵する。
	時期	6～7月
	繁殖形態	繁殖能力が高く、1回に20個以上の卵を年に数回産卵する。
食性		雑食性
生態系への影響		雑食性で、水草の他、魚類、両生類、甲殻類、貝類、水生昆虫などを広く摂食する、在来種のカメ類とは、食物や日光浴場所、産卵場所、越冬場所が類似し、競合する
人への被害	農林水産業への被害	不明
	生活被害	不明
	生命身体への被害	成長した大型個体に噛みつかれた場合、咬傷被害が発生する恐れが大きい。
生態系又は人に対する影響度		AまたはB,時にC
緊急度の	緊急度ランク	B
	緊急度の情報	生息範囲の把握と駆除方法の確立が先決。
対策	予防対策	飼育用の販売を禁止する
	すでに定着している場合の対策	野生化した集団の生態に関する基礎的研究と、駆除方法の検討を目指した試験的駆除の実施
文献	全般	日本生態学会(2002)
	千葉県	
写真・標本の有無(保管先)		有り(東邦大学・千葉県立中央博物館)
備考		

千葉県の外来種整理表(生態系又は人に対する影響度または防除の緊急度ランクがAのもの)

No. Aランク: 8

分類		両生類
和名		アフリカツメガエル
学名		<i>Xenopus laevis</i>
分類群		無尾目ヒキバ科
土着生息地(原産地)		アフリカ大陸南部
生息情報	日本での分布状況	関東地方で確認されているが、定着については不明。
	千葉県での分布状況	利根川・印旛沼水系で記録有り(大利根博物館)
	千葉県での生息状況	利根川下流域では1998年頃から本種の記録が報告されるようになった。複数の個体が複数年に渡って捕獲されていることから、定着している可能性がある。繁殖しているかどうかは不明。
移入経路	日本	実験動物として輸入されたものが逸出
	千葉県	不明
移入年代	日本	1954年から実験動物として輸入されている。野外への逸出年代は不明。
	千葉県	1990年代
体重等		体長 50~130mm
生息環境		淡水域
生活史		変態後もほとんど水中で生活し、河川、湖沼から塩性湿地まで、あらゆる水域に生息している
繁殖	繁殖場所	河川、湖沼から塩性湿地
	時期	不明
	繁殖形態	卵生
食性		在来のカエル類など水生生物を好んで捕食する性質を示す(飼育下での実験データ)。
生態系への影響		皮膚に寄生するツボカビが在来種の病原微生物として猛威をふるおそれが指摘されている。
人への被害	農林水産業への被害	不明
	生活被害	不明
	生命身体への被害	不明
生態系又は人に対する影響度		A
緊急度の	緊急度ランク	A
	緊急度の情報	繁殖力が高く、定着個体が長生きすることから、発見されしだい駆除を実施すべき。
対策	予防対策	効果的な捕獲方法の検索・開発による駆除、野外放逐の禁止
	すでに定着している場合の対策	野生化した集団の生態に関する基礎的研究と、駆除方法の検討を旨とした試験的駆除の実施
文献	全般	日本生態学会(2002)
	千葉県	小林・長谷川(2005b)
写真・標本の有無(保管先)		なし
備考		養殖業者が野外に放逐しようとして現場で差し止められた事件あり(千葉県立中央博物館、尾崎主任研究員のメモがある)。野外での越冬が可能なほど耐寒性を備えている(千葉大学構内の池での越冬記録あり)。

千葉県の外来種整理表(生態系又は人に対する影響度または防除の緊急度ランクがAのもの)

No. Aランク: 9

分類		両生類
和名		ウシガエル
学名		<i>Rana (Aquarana) catesbeiana</i>
分類群		無尾目アカガエル科
土着生息地(原産地)		北アメリカのロッキー山脈以東
生息情報	日本での分布状況	北海道、本州、四国、九州、小笠原諸島、南西諸島
	千葉県での分布状況	全域
	千葉県での生息状況	県内ほぼ全域の池、ため池、湖沼、流のゆるい河川に生息している。
移入経路	日本	食用として導入
	千葉県	農家の副業として養殖を奨励するため、国家事業として日本各地に配布された。
移入年代	日本	1918年に日本に導入された。
	千葉県	昭和の初期
体重等		体長110～185mm
生息環境		淡水域: 沼、用水路、河川
生活史		6月以降に産卵されたものはオタマジャクシで越冬し、翌年の6月に変態。秋に変態するオタマジャクシは体長が7cm、幼カエルが3.3cm、春に変態するものはオタマジャクシ11～12cm、幼カエルが4.5cm。10月下旬～11月上旬に冬眠に入る。
繁殖	繁殖場所	湖沼、池、河川の下流など、広い水面を持ち、かつ水深のある静水域
	時期	5月～9月
	繁殖形態	卵は一週間で孵化してオタマジャクシとなる。普通はそのまま越冬し、翌年の5～10月にかけて変態し、体長40mmの幼カエルになる。
食性		オタマジャクシ期は植物を中心とした雑食。変態後は動物食に変わる。
生態系への影響		日本で最大のカエルであり、極めて捕食性が強く、口に入る大きさであれば、ほとんどの動物が餌となる。昆虫の他、小型の哺乳類や鳥類、爬虫類、他のカエル類を含む両生類、魚類までも捕食の被害を受ける。
人への被害	農林水産業への被害	不明
	生活被害	住宅地周辺の沼地で騒音被害の届けが出されることがある。
	生命身体への被害	不明
生態系又は人に対する影響度		A
緊急度の防除	緊急度ランク	B
	緊急度の情報	個体群制御の手段として、商業的な利用を促進させる。
対策	予防対策	野生個体を実験材料、科学的研究の材料として利用し、制御につなげる。
	すでに定着している場合の対策	野生化した集団の生態に関する基礎的研究と、駆除方法の検討を旨とした試験的駆除の実施
文献	全般	日本生態学会(2002)
	千葉県	
写真・標本の有無(保管先)		有り(千葉県立中央博物館)
備考		国内外来種

千葉県の外来種整理表(生態系又は人に対する影響度または防除の緊急度ランクがAのもの)

No.		Aランク : 10	
分類		両生類	
和名		トノサマガエル	
学名		<i>Rana (Pelophylax) nigromaculata</i>	
分類群		無尾目アマガエル科	
土着生息地(原産地)		本州、四国、九州	
生息情報	日本での分布状況	北海道にも移入され、定着している。	
	千葉県での分布状況	一箇所のみで生息が確認されている。	
	千葉県での生息状況	谷津干潟のビジターセンター内の池に定着	
移入経路	日本	国内移入種	
	千葉県	不明	
移入年代	日本	国内移入種	
	千葉県	1990年代	
体重等		体長40～90mm	
生息環境		淡水域	
生活史		主に水田と用水路に生息する	
繁殖	繁殖場所	水田、池	
	時期	4～6月	
	繁殖形態		
食性		昆虫類に加え、小型の両生類も補食する	
生態系への影響		在来水生生物の捕食	
人への被害	農林水産業への被害	不明	
	生活被害	不明	
	生命身体への被害	不明	
生態系又は人に対する影響度		情報不足	
緊急度の防除	緊急度ランク	A	
	緊急度の情報	小規模な集団であるので、早急に駆除を実現するべきである。	
対策	予防対策	現在定着している地域からの根絶	
	すでに定着している場合の対策	野生化した集団の生態に関する基礎的研究と、駆除方法の検討を旨とした試験的駆除の実施	
文献	全般		
	千葉県		
写真・標本の有無(保管先)		有り(千葉県立中央博物館)	
備考		国内外来種	

千葉県の外来種整理表(生態系又は人に対する影響度または防除の緊急度ランクがAのもの)

No.		Aランク:11
分類		魚類
和名		オオクチバス
学名		<i>Micropterus salmoides</i>
分類群		スズキ目サンフィッシュ科
土着生息地(原産地)		北米大陸南東部
生息情報	日本での分布状況	全国の河川緩流域、湖沼、ダム湖、溜池など
	千葉県での分布状況	県内全域の主に湖沼・一部の河川 養老川、小櫃川、湊川、夷隅川、栗山川、手賀沼、印旛沼、与田浦、利根川、小糸川、江戸川、長尾川、丸山川、一宮川、南白亀川、手練川
	千葉県での生息状況	溜池など孤立した止水域や河川緩流域などに広く生息している。
移入経路	日本	神奈川県芦ノ湖への釣目的の放流が初。その後複数回の移植放流の可能性はある。
	千葉県	不明であるが、釣り対象魚としての放流が主と推測される。
移入年代	日本	1925年
	千葉県	1965年頃に手賀沼で記録 1983年に印旛沼で記録
体重等		全長50cm
生息環境		淡水域。汽水域の可能性もあり。止水域や河川緩流域を好む。
生活史		春から秋は止水域や緩流域の浅所に生息。初夏にオスが営巣し、繁殖。冬季に深場に移り、集団で越冬。寿命は10数年～20年。稚魚期まではオスが保護するが、5cm位で単独生活に入る。メスは4～5年、オスは3～4年で成熟する。
繁殖	繁殖場所	湖沼等の止水域・緩流域の岸辺の水深1.5mくらいまでの砂底や砂礫底
	時期	5月上旬～7月上旬
	繁殖形態	オスが岸辺の水深1.5m位までの水底に、掃鉢状の巣を作り、メスを次々に誘って産卵させ、孵化後体長5cmになるまで保護する。
食性		体長5cmくらいまでは動物プランクトン、その後魚食性が強まり、多くの魚類を中心にさまざまな動物を食べる。
生態系への影響		魚類を中心に、様々な動物を捕食することから、生物組成に与える影響が強いといわれ、特に溜池や小規模水域においてこの影響は強いと考えられている。
人への被害	農林水産業への被害	強度の捕食による在来の漁業対象種の減少があるとされる。
	生活被害	なし
	生命身体への被害	なし
生態系又は人に対する影響度		AまたはB,時にC
緊急度の防除	緊急度ランク	AまたはB
	緊急度の情報	在来魚種や多くの水生生物への捕食圧による漁業資源減少や生態系悪化のため緊急に防除が必要とされる。
対策	予防対策	特定外来生物への指定。県条例で移植放流禁止
	すでに定着している場合の対策	なし
文献	全般	環境省(2004)、川那部・水野(1989)、中坊(1993)、日本生態学会(2002)、丸山ほか(1987)
	千葉県	千葉県生物学会(1999)、千葉県史料研究財団(2002)、永野・梶山(2000)、梶山(1996a)田中・新島(2000)
写真・標本の有無(保管先)		
備考		本種と同様の問題があるとされるブルーギルと一緒にいる場合、両種の競合関係があるのではないかとの指摘あり。

千葉県の外來種整理表(生態系又は人に対する影響度または防除の緊急度ランクがAのもの)

No.	Aランク: 12	
	分類	魚類
	和名	タイリクバラタナゴ
	学名	<i>Rhodeus ocellatus ocellatus</i>
	分類群	コイ目コイ科
	土着生息地(原産地)	アジア大陸東部、台湾
生息情報	日本での分布状況	日本全国
	千葉県での分布状況	南部の一部を除き県内各地 記録: 印旛沼、手賀沼、利根川、栗山川、一宮川、夷隅川、与田浦、南白亀川、手繰川
	千葉県での生息状況	河川改修、圃場整備などに伴う水域環境の変化により、本種およびイシガイ科二枚貝類の生息可能な環境が減少、本種も急激に減少中である。
移入経路	日本	ハクレンやソウギョの移入に伴い入ったと推測されている。
	千葉県	ハクレンやソウギョの移入に伴い入ったり、それが拡大したと推測されている。
移入年代	日本	1940年代
	千葉県	1940年代、あるいはそれ以降
	体重等	全長8cm
	生息環境	平野部の池沼、細流、溜池、小河川、灌漑用水路など
	生活史	流れの弱い場所や止水域などで生息。寿命は1~2年。
繁殖	繁殖場所	流れの弱い場所や止水域などで、産卵床となるイシガイ科二枚貝類が生息する場所
	時期	地域によって4月~10月
	繁殖形態	イシガイ科二枚貝類の鰓葉内に産卵、卵は貝の鰓葉内で孵化。発生し、稚魚として浮出。単独生活を始める。
	食性	稚魚期は動物プランクトン食、その後附着藻類を中心とした植物食
	生態系への影響	同一種内の別亜種であるニッポンバラタナゴとの交雑が報告されている。また、千葉県ではミヤコタナゴとの競争関係による駆逐が知られている。
人への被害	農林水産業への被害	なし
	生活被害	なし
	生命身体への被害	なし
	生態系又は人に対する影響度	条件によりA~D
緊急度の	緊急度ランク	条件によりA~C
	緊急度の情報	比較的規模の大きい水系ではタイリクバラタナゴとミヤコタナゴが共存しているが、ミヤコタナゴが生息する止水域あるいは緩流域などに侵入した場合には短期間でタイリクバラタナゴに置き換わった例が知られている。
対策	予防対策	啓蒙による移動や飼育個体の放流の防止
	すでに定着している場合の対策	ミヤコタナゴ生息域での駆除の試みがなされた例がある。
文献	全般	日本生態学会(2002)、環境省野生生物保護対策検討会移入種問題分科会(移入種検討会)(2002)、川那部・水野(1989)、中坊(2000)、奥田ほか(1996)
	千葉県	千葉県生物学会(1999)、千葉県史料研究財団(2002)、千葉県内水面水産研究センター(2004)、田中・新島(2000)
	写真・標本の有無(保管先)	
	備考	

千葉県の外來種整理表(生態系又は人に対する影響度または防除の緊急度ランクがAのもの)

No. Aランク: 13

分類		魚類
和名		ブルーギル
学名		<i>Lepomis macrochirus</i>
分類群		スズキ目サンフィッシュ科
土着生息地(原産地)		カナダセントローレンス川水系と五大湖以南、ミシシッピー川を中心とする北米大陸中央平原
生息情報	日本での分布状況	北海道函館周辺以南、ほぼ全国
	千葉県での分布状況	県内のほぼ全域の河川、湖沼、溜池など
	千葉県での生息状況	釣り目的の放流と考えられ、大河川や湖沼から、孤立した溜池や部分的にしか生息可能箇所のない小河川などまで、広く生息している。 記録: 養老川、小櫃川、湊川、夷隅川、栗山川、手賀沼、印旛沼、与田浦、利根川、小糸川、江戸川、一宮川、南白亀川
移入経路	日本	アメリカから記念に寄贈 ミシシッピー川の採集個体を伊豆半島の一碧湖に放流
	千葉県	主に釣り目的の放流?
移入年代	日本	1960年
	千葉県	1960年
体重等		全長20cm
生息環境		湖沼などの止水域、河川中・下流域の流れの穏やかな場所、小河川の溜りなどで、水草のある場所を好む。
生活史		流れの緩やかな場所か止水域で、通常は水底近くで索餌行動をとっていることが多い。水草帯を好み、隙間のある人工護岸や魚礁などにもよく集まる。全長25mmくらいまでは水草帯の中で群れ行動をとっているが、その後は自由行動に移行する。
繁殖	繁殖場所	岸近くの浅所の砂泥底や砂礫底
	時期	主に6月～7月
	繁殖形態	オスが水底に挿鉢状の産卵床をつくり、メスを呼び入れ産卵させ、仔魚期まで保護する。巢は近接して多数作られ、コロニー状になる。
食性		昆虫類、植物、エビ類、魚類、動物プランクトンなど幅広い雑食性
生態系への影響		本種の捕食により在来魚などに大きな影響を与えるとされているが、県内の例で見ると場所の条件で影響の出方が異なるようである。より詳細な調査が必要であろう
人への被害	農林水産業への被害	捕食による在来種への影響が指摘されている。また、網漁具への入網による作業効率の低下なども考えられる。
	生活被害	なし
	生命身体への被害	なし
生態系又は人に対する影響度		AまたはB, 時にC (情報不足)
緊急防除度の	緊急度ランク	AまたはB, 時にC (情報不足)
	緊急度の情報	影響について水域ごとの調査が必用
対策	予防対策	県条例で移植放流禁止
	すでに定着している場合の対策	
文献	全般	環境省編(2004)、川那部・水野(1989)、中坊(1993)、日本生態学会(2002)、丸山ほか(1987)
	千葉県	千葉県生物学会(1999)、千葉県史料研究財団(2002)、尾崎真澄(1996a)
写真・標本の有無(保管先)		
備考		

千葉県の外来種整理表(生態系又は人に対する影響度または防除の緊急度ランクがAのもの)

No. Aランク: 14

分類		昆虫類
和名		セイヨウオオマルハナバチ
学名		<i>Bombus terrestris</i>
分類群		ハチ目ミツバチ科
土着生息地(原産地)		ヨーロッパ
生息情報	日本での分布状況	1996年秋に北海道日高地方門別町で自然巢が発見。2001年には静岡県で記録。
	千葉県での分布状況	下総台地、房総丘陵
	千葉県での生息状況	営巣は確認されていない。
移入経路	日本	温室トマトの受粉昆虫として1992年頃からベルギーやオランダから輸入されている。
	千葉県	
移入年代	日本	
	千葉県	
体重等		
生息環境		陸域
生活史		
繁殖	繁殖場所	土中で営巣して大きなコロニーを作る。新女王が越冬施設野菜(トマト)
	時期	
	繁殖形態	
食性		植物の花粉や蜜など
生態系への影響		植生などへの影響、在来近縁種と競合・駆逐の可能性、交雑による遺伝的攪乱。北海道日高地方では広範な野生植物・栽培植物を利用し、盗蜜を高頻度で行う。
人への被害	農林水産業への被害	なし
	生活被害	なし
	生命身体への被害	
生態系又は人に対する影響度		A
緊防除の	緊急度ランク	A
	緊急度の情報	現状では千葉県では定着が確認されていないが、影響が大きいため、野外で確認された場合はすぐに排除するとともに、逸出防止策を取り続けるべき。
対策	予防対策	逸出防除ネットの展張、使用済み巣箱の適正処理の普及を図る。
	すでに定着している場合の対策	
文献	全般	日本生態学会(2002)、鷲谷ほか(1997)
	千葉県	須田(1999)、信太(2000)
写真・標本の有無(保管先)		写真: http://bluelist.hokkaido-ies.go.jp/
備考		

千葉県の外来種整理表(生態系又は人に対する影響度または防除の緊急度ランクがAのもの)

No. Aランク: 15

	分類	軟体動物
	和名	アサリ
	学名	<i>Ruditapes philippinarum</i>
	分類群	マルスダレガイ目/マルスダレガイ科
	土着生息地(原産地)	有明海/黄海
生息情報	日本での分布状況	土着群は北海道・およそ本州から九州。移入と考えられる群は東京湾等
	千葉県での分布状況	東京湾
	千葉県での生息状況	確実な繁殖は報告されていないが、繁殖の可能性が高い。
移入経路	日本	潮干狩り用アサリ
	千葉県	潮干狩り用アサリ
移入年代	日本	
	千葉県	平成時代
	体重等	殻長3 cm程度
	生息環境	海域: 潮間帯から上部浅海帯の砂/砂泥底
	生活史	プランクトン幼生が着底し、幼貝から成貝へ成長する。
繁殖	繁殖場所	受精は水中で、定着場所は成体と同じ
	時期	主に春と秋に産卵
	繁殖形態	体外受精(放卵放精)
	食性	懸濁物食
	生態系への影響	在来のアサリとの交雑の可能性等
人への被害	農林水産業への被害	混入による在地個体群の価格の低下等
	生活被害	不明
	生命身体への被害	なし?
	生態系又は人に対する影響度	B
緊急防除度の	緊急度ランク	A
	緊急度の情報	外来個体群が増加すると、水産上在来のブランドが下がる可能性が高い。
対策	予防対策	移入アサリのチェック; 食用移入の遺棄禁止; 養殖・蓄養の制限
	すでに定着している場合の対策	特になし; [産地表示の明確化]
文献	全般	
	千葉県	
	写真・標本の有無(保管先)	(標本: 千葉県立中央博物館)
	備考	国外及び国内外来種

千葉県の外来種整理表(生態系又は人に対する影響度または防除の緊急度ランクがAのもの)

No. Aランク: 16

分類		軟体動物
和名		イスパニアマイマイ
学名		<i>Eobania vermiculata</i>
分類群		有肺目リンゴマイマイ科
土着生息地(原産地)		南ヨーロッパ
生息情報	日本での分布状況	千葉県
	千葉県での分布状況	浦安市
	千葉県での生息状況	浦安市内の2ヶ所で繁殖
移入経路	日本	植木に付着?
	千葉県	植木に付着?
移入年代	日本	平成時代
	千葉県	平成時代
体重等		殻径3 cm程度
生息環境		陸域: 開放地
生活史		受精後、産卵し、孵化後、幼貝から成貝に成長
繁殖	繁殖場所	成体と同じ
	時期	不明
	繁殖形態	体内受精(卵生/直達発生)
食性		生きた植物体や落葉等
生態系への影響		不明
人への被害	農林水産業への被害	農作物の食害の可能性
	生活被害	家庭菜園での食害の可能性
	生命身体への被害	広東住血線虫の中間宿主の可能性
生態系又は人に対する影響度		C
緊防除度の	緊急度ランク	A
	緊急度の情報	被害は出ていないが、生息地が限定されており、定着初期なので、根絶できる可能性もある。
対策	予防対策	苗木等の移動時のチェック
	すでに定着している場合の対策	薬剤散布や生息環境の改悪
文献	全般	上島ほか(2004)
	千葉県	上島ほか(2004)
写真・標本の有無(保管先)		標本: 千葉県立中央博物館
備考		

千葉県外来種整理表(生態系又は人に対する影響度または防除の緊急度ランクがAのもの)

No. Aランク:17

	分類	軟体動物
	和名	カネツケシジミ
	学名	<i>Corbicula fluminea form insularis</i>
	分類群	マルスダレガイ目シジミ科
	土着生息地(原産地)	東アジア
生息情報	日本での分布状況	およそ本州から九州・沖縄
	千葉県での分布状況	各地
	千葉県での生息状況	1990年代には多かったが、近年はやや減少傾向。
移入経路	日本	食用シジミの遺棄
	千葉県	食用シジミの遺棄
移入年代	日本	昭和時代(太平洋戦争以降)
	千葉県	平成時代
	体重等	殻長2 cm程度
	生息環境	淡水域:人里周辺の流れの弱い流水域や止水域
	生活史	体内で稚貝となり、体外へ放出され、幼貝から成貝へ成長する。
繁殖	繁殖場所	受精は体内で、定着場所は成体と同じ
	時期	不明(冬季には行わない?)
	繁殖形態	体内受精(放精:雄性発生)
	食性	懸濁物食
	生態系への影響	在来のマシジミとの置き換わり
人への被害	農林水産業への被害	不明
	生活被害	不明
	生命身体への被害	なし?
	生態系又は人に対する影響度	B
緊急防除の	緊急度ランク	A
	緊急度の情報	着実に分布を広げており、在来種のマシジミを駆逐する可能性がある。
対策	予防対策	移入シジミのチェック;食用移入の遺棄禁止;養殖・蓄養の制限
	すでに定着している場合の対策	特になし;[産地表示の明確化]
文献	全般	諸喜田(1984)、増田ほか(1998)、日本生態学会(2002)
	千葉県	黒住ほか(2004)
	写真・標本の有無(保管先)	標本:千葉県立中央博物館
	備考	

千葉県の外來種整理表(生態系又は人に対する影響度または防除の緊急度ランクがAのもの)

No. Aランク: 18

分類	軟体動物	
和名	カワヒバリガイ	
学名	<i>Limnoperna fortunei</i>	
分類群	イガイ目イガイ科	
土着生息地(原産地)	中国	
生息情報	日本での分布状況	およそ本州から九州(琵琶湖・長良川・群馬等)
	千葉県での分布状況	常陸利根川
	千葉県での生息状況	2006年度に初めて確認された。今後、個体数増加・分散の可能性が高い。
移入経路	日本	食用シジミ/真珠養殖母貝の輸入
	千葉県	定着地からの幼生分散
移入年代	日本	平成時代
	千葉県	平成時代
体重等	殻長2 cm程度	
生息環境	淡水域: 流水域や止水域	
生活史	プランクトン幼生が着底し、幼貝から成貝へ成長する。	
繁殖	繁殖場所	受精は水中で、定着場所は成体と同じ
	時期	不明(夏中心?)
	繁殖形態	体外受精(放卵受精)
食性	懸濁物食	
生態系への影響	不明(微細空間の創出)	
人への被害	農林水産業への被害	不明
	生活被害	導水管等への付着による効率悪化
	生命身体への被害	なし?
生態系又は人に対する影響度	B	
緊防除の	緊急度ランク	A
	緊急度の情報	日本各地で確認され始め、駆除は困難であり、早めに対策をとるべきである。
対策	予防対策	最侵入に対しては移入シジミのチェック
	すでに定着している場合の対策	繁殖期前の大規模な見つけ採り
文献	全般	松田・上西(1992)、中井・松田(2000)、日本生態学会(2002)
	千葉県	
写真・標本の有無(保管先)	標本: 千葉県立中央博物館	
備考		

千葉県の外來種整理表(生態系又は人に対する影響度または防除の緊急度ランクがAのもの)

No. Aランク: 19

分類	軟体動物	
和名	ゴマフダマ	
学名	<i>Natica tigrina</i>	
分類群	吸腔目タマガイ科	
土着生息地(原産地)	有明海/黄海	
生息情報	日本での分布状況	東京湾等
	千葉県での分布状況	小櫃川河口干潟
	千葉県での生息状況	現在までのところ定着は確認できていないが、今後定着の可能性は高い。
移入経路	日本	
	千葉県	潮干狩り用アサリに混入
移入年代	日本	
	千葉県	平成時代
体重等	殻高2.5 cm程度	
生息環境	海域: 潮間帯から上部浅海帯の砂/砂泥底	
生活史	プランクトン幼生が着底し、幼貝から成貝へ成長する。	
繁殖	繁殖場所	成体と同じ
	時期	不明(冬季には行わない?)
	繁殖形態	体内受精(卵囊[砂茶碗]形成)
食性	二枚貝等の貝類	
生態系への影響	貝類を捕食	
人への被害	農林水産業への被害	有用二枚貝類の捕食
	生活被害	不明
	生命身体への被害	なし?
生態系又は人に対する影響度	A	
緊防除度の	緊急度ランク	A
	緊急度の情報	未だ野外での繁殖は確認されていないが、個体が増加すると影響がでそうなので、早めの対策が必要。
対策	予防対策	移入アサリのチェック
	すでに定着している場合の対策	特になし; [産地表示の明確化]
文献	全般	
	千葉県	黒住・岡本(1996)
写真・標本の有無(保管先)	標本: 千葉県立中央博物館	
備考	野外逸脱的、国内外来種	

千葉県の外來種整理表(生態系又は人に対する影響度または防除の緊急度ランクがAのもの)

No. Aランク: 20

分類	軟体動物	
和名	サキグロタマツメタ	
学名	<i>Euspira fortunei</i>	
分類群	吸腔目タマガイ科	
土着生息地(原産地)	有明海/黄海	
生息情報	日本での分布状況	東京湾等
	千葉県での分布状況	小櫃川河口干潟
	千葉県での生息状況	着実に個体数が増加している。
移入経路	日本	
	千葉県	潮干狩り用アサリ
移入年代	日本	
	千葉県	平成時代
体重等	殻高5 cm程度	
生息環境	海域: 潮間帯から上部浅海帯の砂/砂泥底	
生活史	プランクトン幼生が着底し、幼貝から成貝へ成長する。	
繁殖	繁殖場所	成体と同じ
	時期	不明(冬季には行わない?)
	繁殖形態	体内受精(卵囊[砂茶碗]形成)
食性	二枚貝等の貝類	
生態系への影響	貝類を捕食	
人への被害	農林水産業への被害	有用二枚貝類の捕食
	生活被害	不明
	生命身体への被害	なし?
生態系又は人に対する影響度		A
緊防除度の	緊急度ランク	B
	緊急度の情報	有用貝類への捕食が認められるが、個体数が増加しており、駆除等は困難。
対策	予防対策	移入アサリのチェック
	すでに定着している場合の対策	一部、見つけ採り; [産地表示の明確化]
文献	全般	酒井(2000)、大越(2003)
	千葉県	
写真・標本の有無(保管先)		標本: 千葉県立中央博物館; 写真: 水産研究センター富津研究所
備考		国内外来種

千葉県外来種整理表(生態系又は人に対する影響度または防除の緊急度ランクがAのもの)

No. Aランク：21

分類		軟体動物
和名		シジミ属の一種
学名		<i>Corbicula sp. cf. largillierti</i>
分類群		マルスダレガイ目シジミ科
土着生息地(原産地)		東アジア
生息情報	日本での分布状況	千葉県
	千葉県での分布状況	県北西部
	千葉県での生息状況	多少不確実であるが、台湾シジミとは異なるものが市原市等で確認されている。
移入経路	日本	食用シジミの遺棄
	千葉県	食用シジミの遺棄
移入年代	日本	平成時代
	千葉県	平成時代
体重等		殻長2.5 cm程度
生息環境		淡水域：人里周辺の流れの弱い流水域や止水域
生活史		幼貝から成貝へ成長する。
繁殖	繁殖場所	受精は体内で、定着場所は成体と同じ
	時期	不明(冬季には行わない?)
	繁殖形態	体内受精(放精)
食性		懸濁物食
生態系への影響		在来のマシジミとの置き換わりの可能性
人への被害	農林水産業への被害	不明
	生活被害	不明
	生命身体への被害	なし?
生態系又は人に対する影響度		C
緊防除の緊急度の	緊急度ランク	A
	緊急度の情報	着実に分布を広げており、在来種のマシジミを駆逐する可能性がある。まだ定着地は少ないようである。
対策	予防対策	移入シジミのチェック；食用移入の遺棄禁止；養殖・蓄養の制限
	すでに定着している場合の対策	特になし；[産地表示の明確化]
文献	全般	根本ほか(2003)
	千葉県	
写真・標本の有無(保管先)		標本：千葉県立中央博物館
備考		

千葉県の外來種整理表(生態系又は人に対する影響度または防除の緊急度ランクがAのもの)

No. Aランク：22

分類	軟体動物	
和名	シナハマグリ	
学名	<i>Meretrix petechialis</i>	
分類群	マルスダレガイ目マルスダレガイ科	
土着生息地(原産地)	朝鮮半島南岸・中国	
生息情報	日本での分布状況	およそ本州から九州
	千葉県での分布状況	東京湾
	千葉県での生息状況	東京湾で確認されるが、未定着と思われる。
移入経路	日本	潮干狩り用アサリ/養殖
	千葉県	潮干狩り用アサリ/養殖
移入年代	日本	昭和時代(太平洋戦争以降)
	千葉県	平成時代
体重等	殻長8 cm程度	
生息環境	海域：潮間帯から上部浅海帯の砂/砂泥底	
生活史	プランクトン幼生が着底し、幼貝から成貝へ成長する。	
繁殖	繁殖場所	受精は水中で、定着場所は成体と同じ
	時期	不明(冬季には行わない?)
	繁殖形態	体外受精(放卵放精)
食性	懸濁物食	
生態系への影響	不明	
人への被害	農林水産業への被害	不明
	生活被害	不明
	生命身体への被害	なし?
生態系又は人に対する影響度	C	
緊防除度の	緊急度ランク	A
	緊急度の情報	定着する可能性は低いが、逆に定着等が認められれば、初期の根絶等が可能かもしれない。
対策	予防対策	移入ハマグリ・アサリのチェック；食用移入の遺棄禁止；養殖・蓄養の制限
	すでに定着している場合の対策	特になし；[産地表示の明確化]
文献	全般	日本生態学会(2002)
	千葉県	岡本・黒住(1996)
写真・標本の有無(保管先)	標本：千葉県立中央博物館	
備考		

千葉県の外來種整理表(生態系又は人に対する影響度または防除の緊急度ランクがAのもの)

No. Aランク：23

分類	軟体動物	
和名	スクミリンゴガイ	
学名	<i>Pomacea canaliculata</i>	
分類群	原始紐舌目タニシモドキ(リンゴガイ)科	
土着生息地(原産地)	アルゼンチン	
生息情報	日本での分布状況	およそ本州から九州・沖縄
	千葉県での分布状況	主に九十九里平野
	千葉県での生息状況	東総地方から南に分布を拡大しており、各地で高密度。
移入経路	日本	養殖個体の逃亡
	千葉県	養殖個体の逃亡
移入年代	日本	昭和時代(太平洋戦争以降)
	千葉県	昭和時代(太平洋戦争以降)
体重等	殻長6 cm程度	
生息環境	淡水域：水田等の止水域や緩やかな流れの流水域	
生活史	卵から幼貝で孵化し、成貝に成長する。	
繁殖	繁殖場所	成体と同じ
	時期	冬季以外
	繁殖形態	体内受精(卵生/付着卵産卵/直達発生)
食性	生植物を含む植物体	
生態系への影響	植物の食害	
人への被害	農林水産業への被害	水田作物の食害
	生活被害	不明(大量死亡時の水質悪化等?)
	生命身体への被害	広東住血線虫の中間宿主
生態系又は人に対する影響度	A	
緊防除の	緊急度ランク	A
	緊急度の情報	現実的な農業被害が出ているので、早急な対策が必要。ただ全国でも根絶等はできていない。
対策	予防対策	植物防衛法の遵守；国内移動の制限
	すでに定着している場合の対策	取水口からの侵入防止/捕殺・厳寒期のロータリー耕・登録薬剤による防除/水位調節
文献	全般	宮崎(1985)、日本生態学会(2002)
	千葉県	入村・細川(1993)
写真・標本の有無(保管先)	標本：千葉県立中央博物館；写真(病害虫防除所)	
備考		

千葉県の外來種整理表(生態系又は人に対する影響度または防除の緊急度ランクがAのもの)

No. Aランク: 24

	分類	軟体動物
	和名	タイワンシジミ
	学名	<i>Corbicula fluminea</i>
	分類群	マルスダレガイ目シジミ科
	土着生息地(原産地)	東アジア
生息情報	日本での分布状況	およそ本州から九州・沖縄
	千葉県での分布状況	主に県北部
	千葉県での生息状況	着実に増加している。
移入経路	日本	食用シジミの遺棄
	千葉県	食用シジミの遺棄
移入年代	日本	昭和時代(太平洋戦争以降)
	千葉県	平成時代
	体重等	殻長2 cm程度
	生息環境	淡水域: 人里周辺の流れの弱い流水域や止水域
	生活史	体内で稚貝となり、体外へ放出され、幼貝から成貝へ成長する。
繁殖	繁殖場所	受精は体内で、定着場所は成体と同じ
	時期	不明(冬季には行わない?)
	繁殖形態	体内受精(放精: 雄性発生)
	食性	懸濁物食
	生態系への影響	在来のマシジミとの置き換わり
人への被害	農林水産業への被害	マシジミ選別の手間増加(マシジミとの競合等の可能性)
	生活被害	不明
	生命身体への被害	なし?
	生態系又は人に対する影響度	B
緊急度の防除	緊急度ランク	A
	緊急度の情報	着実に分布を広げており、在来種のマシジミを駆逐する可能性がある。
対策	予防対策	移入シジミのチェック; 食用移入の遺棄禁止; 養殖・蓄養の制限
	すでに定着している場合の対策	特になし; [産地表示の明確化]
文献	全般	増田ほか(1998)、日本生態学会(2002)
	千葉県	新島・田中(2000)、千葉県史料研究財団(2002)
	写真・標本の有無(保管先)	標本: 千葉県立中央博物館 写真・標本: 千葉県水産総合研究センター内水面水産研究所
	備考	

千葉県外来種整理表(生態系又は人に対する影響度または防除の緊急度ランクがAのもの)

No. Aランク: 25

分類	軟体動物	
和名	ムラサキイガイ	
学名	<i>Mytilus galloprovincialis</i>	
分類群	イガイ目イガイ科	
土着生息地(原産地)	地中海	
生息情報	日本での分布状況	北海道・およそ本州から九州・沖縄・小笠原
	千葉県での分布状況	各地
	千葉県での生息状況	各地で普通に生息している。
移入経路	日本	船底付着
	千葉県	船底付着
移入年代	日本	昭和時代(太平洋戦争以前)
	千葉県	昭和時代(太平洋戦争以前)
体重等	殻長6 cm程度	
生息環境	海域: 潮間帯から上部浅海帯の基質に足糸で付着	
生活史	プランクトン幼生が着底し、幼貝から成貝へ成長する。	
繁殖	繁殖場所	受精は水中で、定着場所は成体と同じ
	時期	産卵は春から秋
	繁殖形態	体外受精(放卵受精)
食性	懸濁物食	
生態系への影響	不明(在来種の定着場所被覆・海水の濾過)	
人への被害	農林水産業への被害	船底や養殖施設を含めた漁業関係資材への付着が認められる。
	生活被害	発電所の取・排水管への付着による効率悪化
	生命身体への被害	なし?
生態系又は人に対する影響度	A	
緊急度の防除	緊急度ランク	B
	緊急度の情報	IUCNワースト100; 個体数も多く、プランクトン幼生を出すので、駆除等が難しい。足糸で付着するので、他生物等への影響大?
対策	予防対策	バラストタンク水の「殺菌」や付着生物のチェック; 塗料等による付着面への定着阻害
	すでに定着している場合の対策	塗料等による付着面への定着阻害と人力による除去
文献	全般	金丸(1935)、梶原(1985)、日本生態学会(2002)
	千葉県	朝倉(1992)
写真・標本の有無(保管先)	標本: 千葉県立中央博物館	
備考		

千葉県の外來種整理表(生態系又は人に対する影響度または防除の緊急度ランクがAのもの)

No. Aランク : 26

分類	線虫類	
和名	マツノザイセンチュウ	
学名	<i>Bursaphelenchus xylophilus</i>	
分類群	ハリセンチュウ目アフェレンコイデス科	
土着生息地(原産地)	北アメリカ	
生息情報	日本での分布状況	北海道、青森県を除く全都府県
	千葉県での分布状況	全域
	千葉県での生息状況	全域
移入経路	日本	造船用輸入木材に寄生して侵入
	千葉県	枯損木の移動
移入年代	日本	1905年長崎県
	千葉県	1948年(君津市)
体重等	♀成虫体長0.7~1mm ♂成虫体長0.6~0.8mm	
生息環境	陸域	
生活史	マツノマダラカミキリによって媒介され、マツの木部に寄生し、全身的な衰弱、枯損を起こす。	
繁殖	繁殖場所	マツ木部
	時期	通年
	繁殖形態	卵生
食性	草食	
生態系への影響		
人への被害	農林水産業への被害	防風林のマツ枯損による被害が大きい
	生活被害	防風林等保全林の被害
	生命身体への被害	
生態系又は人に対する影響度	A	
緊急度の防除	緊急度ランク	A
	緊急度の情報	
対策	予防対策	薬剤防除 抵抗性マツ系統の導入
	すでに定着している場合の対策	薬剤防除
文献	全般	岸(1988)、全国森林病虫獣害防除協会(1997)
	千葉県	千葉県史料研究財団(2002)
写真・標本の有無(保管先)		
備考		

外来種（動物）リスト

— 全 外来種（動物）リスト —

外来種の定義について

(1)	侵入した時期は、問わない。
(2)	侵入した経緯については、何らかの人の行為によって侵入したものに限る。 また、千葉県以外において人の行為によって侵入した種が、自力で移動して
(3)	定着しているかどうか野外での確認が得られていないものについては、注釈をつける。
(4)	品種改良種、遺伝子レベルでの外来種は、注釈をつける。
(5)	海域の範囲は、概ね200海里以内とする。
(6)	リストアップが困難な種として、分類が万全でないダニなどは〇〇類とす
(7)	対象とする動物群は、原生動物を除く全種とする。

生態系又は人に対する影響度

A	生態系又は人に対し、回復が困難となる深刻な影響が認められる、あるいは予測される。 (※生態系の回復が困難となる深刻な影響は、捕食、競争、交雑等による在来種の絶滅)
B	生態系又は人に対し、深刻な影響が認められる、あるいは予測される。
C	生態系又は人に対し、明らかな影響が認められる、あるいは予測される。
D	生態系又は人に対し、明らかな影響はあまり認められない、あるいは予測されない。
情報不足	現時点では、上記A～Dの影響度ランクを判定する情報が得られていない。

防除の緊急度

A	非常に高い。
B	高い。
C	低い。

外来種リスト(全)

gairais

リストNo.	分類	和名	学名
1	哺乳類	アカゲザル	<i>Macaca mulatta</i>
2	哺乳類	アライグマ	<i>Procyon lotor</i>
3	哺乳類	イヌ	<i>Canis familiaris</i>
4	哺乳類	イノシシ	<i>Sus scrofa</i>
5	哺乳類	オグロプレーリードッグ	<i>Cynomys ludovicianus</i>
6	哺乳類	カイウサギ	<i>Oryctolagus cuniculus</i>
7	哺乳類	キョン	<i>Muntiacus reevesi</i>
8	哺乳類	クマネズミ	<i>Rattus rattus</i>
9	哺乳類	ドブネズミ	<i>Rattus norvegicus</i>
10	哺乳類	ネコ	<i>Felis catus</i>
11	哺乳類	ハクビシン	<i>Paguma larvata</i>
12	哺乳類	ハツカネズミ	<i>Mus musculus</i>
13	哺乳類	フェレット	<i>Mustela putorius furo</i>
14	哺乳類	マスカラット	<i>Ondatra zibethicus</i>
15	哺乳類	ワラビー類	<i>Macropodidae sp.</i>
16	鳥類	アヒル	
17	鳥類	コウライキジ	<i>Phasianus colchicus karpowi</i>
18	鳥類	コジュケイ	<i>Bambusicola thoracica thoracica</i>
19	鳥類	コブハクチョウ	<i>Cygnus olor</i>
20	鳥類	シジュウカラガン	<i>Branta canadensis</i>
21	鳥類	ドバト	<i>Columba livia</i>
22	鳥類	ワカケホンセイインコ	<i>Psittacula krameri manillensis</i>
23	爬虫類	カミツキガメ	<i>Chelydra serpentina</i>
24	爬虫類	グリーンアノール	<i>Anolis carolinensis</i>
25	爬虫類	ミシシッピーアカミミガメ	<i>Trachemys scripta elegans</i>
26	爬虫類	ミナミイシガメ	<i>Mauremys muticamutica</i>
27	両生類	アフリカツメガエル	<i>Xenopus laevis</i>
28	両生類	ウシガエル	<i>Rana (Aquarana) catesbeiana</i>
29	両生類	トノサマガエル	<i>Rana (Pelophylax) nigromaculata</i>
30	両生類	ヌマガエル	<i>Rana (Limnodynastes) limnodynastes</i>
31	魚類	アオウオ	<i>Mylopharyngodon piceus</i>
32	魚類	イサザ	<i>Chaenogobius isaza</i>
33	魚類	オオクチバス	<i>Micropterus salmoides</i>
34	魚類	カダヤシ	<i>Gambusia affinis</i>
35	魚類	カムルチー	<i>Channa argus</i>
36	魚類	カワヒガイ	<i>Sarcocheilichthys variegatus variegatus</i>
37	魚類	ギンザケ	<i>Oncorhynchus kisutch</i>
38	魚類	グッピー	<i>Poecilia reticulata</i>
39	魚類	ゲンゴロウプナ・ヘラブナ (ゲンゴロウプナの人工品種)	<i>Carassius cuvieri</i>
40	魚類	コウタイ	<i>Channa asiatica</i>
41	魚類	コクチバス	<i>Micropterus dolomieu</i>
42	魚類	コクレン	<i>Aristichthys nobilis</i>
43	魚類	シロヒレタビラ	<i>Acheilognathus tabira tabira</i>
44	魚類	スゴモロコ	<i>Squalidus chankaensis biwae</i>
45	魚類	ストライプトバス	<i>Morone saxatilis</i>
46	魚類	ズナガニゴイ	<i>Hemibarbus longirostris</i>
47	魚類	ゼゼラ	<i>Biwia zezera</i>
48	魚類	ソウギョ	<i>Ctenopharyngodon idellus</i>
49	魚類	タイリクスズキ	<i>Lateolabrax sp.</i>
50	魚類	タイリクバラタナゴ	<i>Rhodeus ocellatus ocellatus</i>
51	魚類	タイワンドジョウ	<i>Channa maculata</i>
52	魚類	タモロコ	<i>Gnathopogon elongatus elongatus</i>
53	魚類	チャカ属の一種	<i>Chaca sp.</i>
54	魚類	チャルキョウフィッシュ(アメリカマス)	<i>Ictalurus punctatus</i>
55	魚類	チョウセンブナ	<i>Macrophodus chinensis</i>
56	魚類	ツチフキ	<i>Abbottina rivularis</i>
57	魚類	ナイルテラピア(チカダイ)	<i>Oreochromis niloticus</i>
58	魚類	ニジマス	<i>Oncorhynchus mykiss</i>
59	魚類	ハクレン	<i>Hypophthalmichthys molitrix</i>
60	魚類	ハス	<i>Opsariichthys uncirostris uncirostris</i>
61	魚類	ヒメダカ(野生メダカの人工品種の総称)	<i>Oryzias latipes</i>
62	魚類	ビワヒガイ	<i>Sarcocheilichthys variegatus microoculus</i>
63	魚類	ブルーギル	<i>Lepomis macrochirus</i>

外来種リスト(全)

64	魚類	ペヘレイ	<i>Odonthestes bonariensis</i>
65	魚類	ホンモロコ	<i>Gnathopogon elongatus</i>
66	魚類	ムギツク	<i>Pungtungia herzi</i>
67	魚類	養殖コイ、ヒゴイ	<i>Cyprinus Carpio</i>
68	魚類	ワカサギ	<i>Hypomesus transpacificus nipponensis</i>
69	魚類	ワタカ	<i>Ischikauia steenackeri</i>
70	昆虫類	アオマツムシ	<i>Calyptotrypus hibinonis</i>
71	昆虫類	アカウキクサゾウムシ	<i>Stenopelmus rufinatus</i>
72	昆虫類	アカクビホシカムシ	<i>Necrobia ruficolis</i>
73	昆虫類	アカマダラカツオブシムシ	<i>Trogoderama varium</i>
74	昆虫類	アズキマメゾウムシ	<i>Callosobruchus chinensis</i>
75	昆虫類	アトグロホソアリモドキ	<i>Anthicus floralis</i>
76	昆虫類	アトラスオオカブト	<i>Chalcosoma atlas</i>
77	昆虫類	アメリカジガバチ	<i>Sceliphron caementarium</i>
78	昆虫類	アメリカシロヒトリ	<i>Hyphantria cunea</i>
79	昆虫類	アメリカミズアブ	<i>Hermetia illucens</i>
80	昆虫類	アルファルフアタコゾウムシ	<i>Hypera postica</i>
81	昆虫類	イセリアカイガラムシ	<i>Icerya purchasi</i>
82	昆虫類	イネミズゾウムシ	<i>Lissorhoptus oryzophilus</i>
83	昆虫類	イラガセイボウ	<i>Chrysis shanghaiensis</i>
84	昆虫類	ウスバキスイ	<i>Cyrtophagus cellaris</i>
85	昆虫類	オオタコゾウムシ	<i>Hypera punctatus</i>
86	昆虫類	オオタバコガ	<i>Helicoverpa armigera</i>
87	昆虫類	オナジショウジョウバエ	<i>Drosophila simulans</i>
88	昆虫類	オンシツコナジラミ	<i>Trialeurodes vaporariorum</i>
89	昆虫類	オンシツツヤコバチ	<i>Encarsia formosa</i>
90	昆虫類	ガイマイゴミムシダマシ	<i>Alphitobius diaperinus</i>
91	昆虫類	カキクダアザミウマ	<i>Ponticulothrips diospyrosi</i>
92	昆虫類	カシノシマメイガ	<i>Pyralis farinalis</i>
93	昆虫類	カドマルカツオブシムシ	<i>Dermestes haemorrhoidalis</i>
94	昆虫類	キイロショウジョウバエ	<i>Drosophila melanogaster</i>
95	昆虫類	キョウチクトウアブラムシ	<i>Aphis nerii</i>
96	昆虫類	ギラファノコギリクワガタ	<i>Prosopocoilus giraffa borobudur</i>
97	昆虫類	グラジオラスアザミウマ	<i>Thrips simplex</i>
98	昆虫類	クリイロデオキスイ	<i>Carpophilus marginellus</i>
99	昆虫類	クリタマバチ	<i>Dryocosmus kuriphilus</i>
100	昆虫類	クリヤケシキスイ	<i>Carpophilus hemipterus</i>
101	昆虫類	クロイワツクツク	<i>Meimuna kuroiuae</i>
102	昆虫類	クロチビエンムシ	<i>Carcinops pumilio</i>
103	昆虫類	クロテンオオメシコガ	<i>Opogona sacchari</i>
104	昆虫類	クロトンアザミウマ	<i>Heliothrips haemorrhoidalis</i>
105	昆虫類	ケチビコフキゾウムシ	<i>Sitona hispidulus</i>
106	昆虫類	ケブカシバンムシ	<i>Nicobium hirtum</i>
107	昆虫類	ココクゾウムシ	<i>Sitophilus oryzae</i>
108	昆虫類	コナナガシクイ	<i>Rhizopertha dominica</i>
109	昆虫類	コメノゴミムシダマシ	<i>Tenebrio obscurus</i>
110	昆虫類	コルリアトキリゴミムシ	<i>Lebia viridis</i>
111	昆虫類	サツマゴキブリ	<i>Opisthoplatia orientalis</i>
112	昆虫類	サビカクムネチビヒラタムシ	<i>Cryptolestes ferrugineus</i>
113	昆虫類	シバオサゾウムシ	<i>Sphenophrus venatus</i>
114	昆虫類	シバツトガ	<i>Parapediasia teterrella</i>
115	昆虫類	シバンムシアリガタムシ	<i>Lasioderma serricorne</i>
116	昆虫類	シルバーリーフコナジラミ	<i>Bemisia argentifolii</i>
117	昆虫類	シロイチモンジヨトウ	<i>Spodoptera exigua</i>
118	昆虫類	シロオビカッコウムシ	<i>Tarsostenus unvittatus</i>
119	昆虫類	シロオビマルカツオブシムシ	<i>Anthrenus nipponensis</i>
120	昆虫類	ジンサンシバンムシ	<i>Stegobium paniceum</i>
121	昆虫類	ジンショウゲヒゲナガアブラムシ	<i>Acyrtosiphon argus</i>
122	昆虫類	スジマダラメイガ	<i>Ephestia cautella</i>
123	昆虫類	セイタカアワダチソウヒゲナガアブラムシ	<i>Uroleucon nigrotuberculatum</i>
124	昆虫類	セイヨウオオマルハナバチ	<i>Bombus terrestris</i>
125	昆虫類	セイヨウミツバチ	<i>Apis mellifera sspp.</i>
126	昆虫類	ソラメゾウムシ	<i>Bruchus rufimanus</i>
127	昆虫類	タケノホソクロバ	<i>Artona martini</i>
128	昆虫類	タバココナジラミ	<i>Bemisia tabaci</i>
129	昆虫類	チャイロキノコムシ	<i>Typhaea stercorea</i>
130	昆虫類	チャイロコメノゴミムシダマシ	<i>Tenebrio molitor</i>

外来種リスト(全)

131	昆虫類	チャゴマフカミキリ	<i>Mesosa perplexa</i>
132	昆虫類	チュウゴクオナガコバチ	<i>Torymus sinensis</i>
133	昆虫類	チューリップネアブラムシ	<i>Dysaphis tulipae</i>
134	昆虫類	ツツリガ	<i>Paralipsa gularis</i>
135	昆虫類	ツマグロカミキリモドキ	<i>Necerdes melanula</i>
136	昆虫類	テツイロヒメカミキリ	<i>Ceresium sinicum</i>
137	昆虫類	トゲムネデオネスイ	<i>Monotoma spinicollis</i>
138	昆虫類	トビカツオブシムシ	<i>Dermestes ater</i>
139	昆虫類	トマトマメハモグリバエ	<i>Liriomyza sativae</i>
140	昆虫類	ナガヒョウホンムシ	<i>Ptinus japonicus</i>
141	昆虫類	ナシアザミウマ	<i>Taeniothrips inoconsequens</i>
142	昆虫類	ナシヒメシクイ	<i>Grapholita molesta</i>
143	昆虫類	ネギアザミウマ	<i>Thrips tabaci</i>
144	昆虫類	ノシメダラメイガ	<i>Plodia interpunctella</i>
145	昆虫類	バクガ	<i>Sitotroga cerealella</i>
146	昆虫類	ハナアザミウマ	<i>Thrips hawaiiensis</i>
147	昆虫類	ハラジロカツオブシムシ	<i>Dermestes maculatus</i>
148	昆虫類	パラワンオオヒラタクワガタ	<i>Dorcus titanus palawanicus</i>
149	昆虫類	ヒメカツオブシムシ	<i>Attagenus japonicus</i>
150	昆虫類	ヒメフタトゲホソヒラタムシ	<i>Silvans lewisi</i>
151	昆虫類	ヒロヘリアオイラガ	<i>Parasa lepida</i>
152	昆虫類	フタオビツヤゴミムシダマシ	<i>Alphitophagus bifasciatus</i>
153	昆虫類	ブタクサハムシ	<i>Ophraella communa</i>
154	昆虫類	フタトゲホソヒラタムシ	<i>Silvans bidentatus</i>
155	昆虫類	ブラタナスグンバイ	<i>Corytucha ciliata</i>
156	昆虫類	ベダリアテントウ	<i>Rodolia cardinalis</i>
157	昆虫類	ホソヒメマキムシ	<i>Dienerella filum</i>
158	昆虫類	マデイラコナカイガラムシ	<i>Phenacoccus madeirensis</i>
159	昆虫類	マメハモグリバエ	<i>Liriomyza trifolii</i>
160	昆虫類	ミカンキイロアザミウマ	<i>Frankliniella occidentalis</i>
161	昆虫類	ミナミキイロアザミウマ	<i>Thrips palmi</i>
162	昆虫類	ヤサイゾウムシ	<i>Listroderes costirostris</i>
163	昆虫類	ヤノネカイガラムシ	<i>Unaspis yanonensis</i>
164	昆虫類	ヨコヅナサシガメ	<i>Agriosphodrus dohrni</i>
165	昆虫類	ラミーカミキリ	<i>paraglenea frotunei</i>
166	昆虫類	リンゴスガ	<i>Yponomeuta malinellus</i>
167	昆虫類	ワタヘリクロノメイガ	<i>Diaphania indica</i>
168	昆虫類	ワタミヒゲナガゾウムシ	<i>Araecerus fasciculatus</i>
169	軟体動物	アサリ	<i>Ruditapes philippinarum</i>
170	軟体動物	アズキガイ	<i>Pupinella rufa</i>
171	軟体動物	イガイダマシ	<i>Mytilopsis sallei</i>
172	軟体動物	イスパニアマイマイ	<i>Eobania vermiculata</i>
173	軟体動物	インドヒラマキガイ	<i>Indoplanorbis exustus</i>
174	軟体動物	ウスカラシオツガイ	<i>Ptericola</i> sp. cf. <i>lithophaga</i>
175	軟体動物	ウスシジミ	<i>Corbicula papyracea</i>
176	軟体動物	ウネナシトマヤガイ	<i>Trapezium liratum</i>
177	軟体動物	ウメノハナガイモドキ	<i>Felaniella sowerbyi</i>
178	軟体動物	オナジマイマイ	<i>Bradybaena similaris</i>
179	軟体動物	カネツケシジミ	<i>Corbicula fluminea</i> form <i>insularis</i>
180	軟体動物	?カワアイ	<i>Cerithidea djadjariensis</i>
181	軟体動物	カワニナ属の一種	<i>Semisulcospira</i> sp. cf. <i>forticosta</i>
182	軟体動物	カワヒバリガイ	<i>Limnoperna fortunei</i>
183	軟体動物	キュウシュウナミコギセル	<i>Euphadusa subaculus</i>
184	軟体動物	コウラナメクジ (キイロナメクジ)	<i>Limax flavus</i>
185	軟体動物	コウロエンカワヒバリガイ	<i>Xenostrobus securis</i>
186	軟体動物	コケガラス	<i>Modiolus metcalfei</i>
187	軟体動物	コシダカヒメモノアラガイ	<i>Galba truncatula</i>
188	軟体動物	コハクオナジマイマイ	<i>Bradybaena pellucida</i>
189	軟体動物	コハクガイ	<i>Zonitoides arboreus</i>
190	軟体動物	コビトノボウシザラ	<i>Pettancylus pettardi</i>
191	軟体動物	ゴマフダマ	<i>Natica tigrina</i>
192	軟体動物	サカマキガイ	<i>Physa acuta</i>
193	軟体動物	サキグロタマツメタ	<i>Euspira fortunei</i>
194	軟体動物	シジミ属の一種	<i>Corbicula</i> sp. cf. <i>largillierti</i>
195	軟体動物	シナハマグリ	<i>Meretrix petechialis</i>
196	軟体動物	シマメノウフネガイ	<i>Crepidula onyx</i>
197	軟体動物	スクミリンゴガイ	<i>Pomacea canaliculata</i>

外来種リスト(全)

198	軟体動物	スナガイ	<i>Gastrocopta armigerella</i>
199	軟体動物	スナガイ属の一種	<i>Gastrocopta</i> sp.
200	軟体動物	ソウジマミジンマイマイ (ツヤミジンマイマイ)	<i>Valonia pulchella</i>
201	軟体動物	タイワンシジミ	<i>Corbicula fluminea</i>
202	軟体動物	タスキガケサカマキガイ	<i>Physa</i> sp. cf. <i>gyrina</i>
203	軟体動物	チャコウラナメクジ	<i>Lehmannia valentiana</i>
204	軟体動物	トクサオカチャウジガイ	<i>Paropeas achatinaceum</i>
205	軟体動物	?ナメクジ	<i>Meghimatium bilineatum</i>
206	軟体動物	ニワコウラナメクジ	<i>Milax gagates</i>
207	軟体動物	ノハラシノシタ	<i>Helicodiscus inermis</i>
208	軟体動物	ノハラナメクジ	<i>Deroceras laeve</i>
209	軟体動物	パツラマイマイ	<i>Discus pauper</i>
210	軟体動物	ハブタエモノアラガイ	<i>Pseudosuccinea columella</i>
211	軟体動物	ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>
212	軟体動物	ヒタチマイマイ	<i>Euhadra brandtii brandtii</i>
213	軟体動物	ヒメコハクガイ	<i>Hawaiiia minuscula</i>
214	軟体動物	ヒラマキミズマイマイ類	<i>Gyraulus</i> sp. cf. <i>illibatus</i>
215	軟体動物	ホソウミニナ	<i>Batillaria cumingii</i>
216	軟体動物	ホンビノスガイ	<i>Mercenaria mercenaria</i>
217	軟体動物	マルタニシ	<i>Cipangopaludina chinensis laeta</i>
218	軟体動物	ミジンマイマイ	<i>Valonia pulchellula</i>
219	軟体動物	?ミドリイガイ	<i>Perna viridis</i>
220	軟体動物	ムラサキイガイ	<i>Mytilus galloprovincialis</i>
221	軟体動物	モノアラガイ類	<i>Lymnaea</i> spp.
222	軟体動物	ヤマトシジミ種群	<i>Corbicula</i> sp. cf. <i>japonica</i>
223	軟体動物	?ヤミヨキセワタ	<i>Aglaja?</i> sp.
224	節足動物	アメリカザリガニ	<i>Procambarus clarkii</i>
225	節足動物	アメリカフジツボ	<i>Balanus eburneus</i>
226	節足動物	イチジクモンサビダニ	<i>Aceria ficus</i>
227	節足動物	イッカクモガニ	<i>Pyromaia tuberculata</i>
228	節足動物	オカダンゴムシ	<i>Armadillidium vulagre</i>
229	節足動物	オビワラジムシ	<i>Porcellio dilatatus</i>
230	節足動物	タテジマフジツボ	<i>Balanus amphitrite</i>
231	節足動物	チチュウカイミドリガニ	<i>Carcinus aestuarii</i>
232	節足動物	トマトサビダニ	<i>Aculops lycopersici</i>
233	節足動物	ナガワラジムシ	<i>Haplophthalmus danicus</i>
234	節足動物	フロリダマミズヨコエビ	<i>Crangonyx floridanus</i>
235	節足動物	ホソワラジムシ	<i>Porcellionides pruinosus</i>
236	節足動物	モクセイハダニ	<i>Panonychus osmanthi</i>
237	節足動物	ヨーロッパフジツボ	<i>Balanus improvisus</i>
238	節足動物	ランヒメハダニ	<i>Tenuipalpus pacificus</i>
239	節足動物	ルイスハダニ	<i>Eotetranychus lewisi</i>
240	節足動物	ワラジムシ	<i>Porcellio scaber</i>
241	腔腸動物	クロガネイソギンチャク	<i>Anthopleura kurogane</i>
242	線虫類	マツノザイセンチュウ	<i>Bursaphelenchus xylophilus</i>
243	線虫類	レンコンネモグリセンチュウ	<i>Hirschmanniella</i> sp.

千葉県の外來種整理表(全)

分類	和名	学名	分類群	土着生息地(原産地)	分布・生息情報			移入経路		移入年代		体重量	生息環境	生活史	繁殖			食性
					日本での分布状況	千葉県での分布状況	千葉県での生息状況	移入経路：日本	移入経路：千葉県	移入年代：日本	移入年代：千葉県				繁殖場所	時期	繁殖形態	
1 哺乳類	アカゲザル	<i>Macaca mulatta</i>	霊長目オナガザル科	インド、中国、東南アジアなど	千葉県	館山市、南房総市	生息数・分布が増加拡大中。2005年度の調査で、3集団、350〜380頭を確認。	-	観光施設又はペットの放逐・逸出	-	館山市・南房総市のアカゲザルは1995年に初めて生息確認された。移入時期は不明。これとは別に、1970〜1980年代に君津市高岩山において外国産マカクスの移入・交雑が生じ、交雑個体の除去が行われた。	体重5〜8kg 頭胴長47〜64cm 尾長19〜30cm	陸域：森林	昼行性。メンバーの決まった数10頭〜100頭以上の群れで森林内を遊動する。	森林	不明	1産1子	主に植物の果実や葉
2 哺乳類	アライグマ	<i>Procyon lotor</i>	食肉目アライグマ科	北アメリカ	日本各地	夷隅地域、君津市、印西市などで繁殖が確認。県内広くに分布。	生息数・分布が増加拡大中。2006年度の調査で、県内の生息数は約1000〜7000頭と推定。	ペットの放逐・逸出	ペットの放逐・逸出	1960年代	1990年代(県内における繁殖の初記録は1996年ころ)	体重4〜10数kg 頭胴長41〜60cm 尾長20〜41cm	陸域：森林、農村地域、住宅地など	夜行性。木登りが得意で樹上をよく利用する。水辺を好む。	樹洞、人家の屋根裏など	主に春	3〜6頭ほどの子を出産	雑食性(昆虫類、小型の脊椎動物、果実など)
3 哺乳類	イヌ	<i>Canis familiaris</i>	食肉目イヌ科	家畜種	日本各地	県内各地	不明	ペット・猟犬の放逐・逸出	ペット・猟犬の放逐・逸出	不明	不明	体重1〜頭胴長1〜尾長1〜	陸域	単独で暮らす場合もあるが、数頭で群れをつくることも多い。	森林、農村地域、住宅地	季節を問わず?	数頭の子を出産	雑食性
4 哺乳類	イノシシ	<i>Sus scrofa</i>	偶蹄目イノシシ科	北アフリカの一部からユーラシア	在来種として東北以南。国内外来種として日本各地。	房総丘陵を中心とした地域。他に下総町、成田市など。	生息数・分布が増加拡大中。2004年度の調査で、518km ² に生息と推定。	狩猟目的の放逐、飼育個体の逸出。	狩猟目的の放逐。一部に飼育個体の逸出。	不明	おそらく1980年代を中心に。	体重50〜150kg 頭胴長120〜150cm 尾長14〜23cm	陸域：森林、農村地域	夜に行動することが多いが、人間を警戒する必要のない場合には昼行性を示す。単独ないし母系的小集団で暮らす。	森林	主に春	2〜8頭(平均4〜5頭)の子を出産	雑食性(植物の根茎や堅果、ミズなど)
5 哺乳類	オグロプレーリードッグ	<i>Cynomys ludovicianus</i>	齧歯目リス科	北アメリカ	繁殖・定着は確認されていない。	繁殖・定着は確認されていない。	2000〜2001年の約1年間、野田市にあるゴルフ場に1頭が生息していた。	ペットの放逐・逸出	ペットの放逐・逸出	繁殖・定着は確認されていない。	繁殖・定着は確認されていない。	体重0.9〜1.5kg 頭胴長28〜35cm 尾長8〜11cm	陸域：草地	草地に巣穴を掘り、社会的集団で暮らす。	草地の巣穴	不明	不明	雑食性(主に草)
6 哺乳類	カイウサギ	<i>Oryctolagus cuniculus</i>	兎目ウサギ科	ヨーロッパアナウサギの家畜種	日本各地(主に島嶼)	南郷町浮島	不明	飼育個体の放逐・逸出	飼育個体の放逐	19世紀ころ	1980年代	体重1.4〜2.3kg 頭胴長38〜50cm 尾長4〜7cm	陸域：森林、草地	森林や草地に生息する。巣穴を掘って暮らす。	森林、草地	年に数回	地面に穴を掘って、4〜6頭ほどの子を出産	雑食性(植物の葉、枝、樹皮など)
7 哺乳類	キョン	<i>Muntiacus reevesi</i>	偶蹄目シカ科	中国南東部、台湾	千葉県、東京都伊豆大島	房総丘陵を中心とした地域(9市町)	生息数・分布が増加拡大中。2006年度の調査で、570km ² に約1400〜5000頭が生息していると推定。	観光施設からの逸出	観光施設からの逸出	1937〜1980年代の間	1960〜1980年代の間	体重10kg 頭胴長70cm程度 尾長7〜11cm	陸域：森林	昼夜を問わず、行動と休息を繰り返す。ほとんど単独で行動する。犬の吠え声のような大きな警戒音を発する。	森林	年間を通して出産が行われるが、5〜10月が中心。	1産1子。生後半年前後の妊娠と、生後1年〜1年2か月程度の初出産が可能。	雑食性(木の葉や果実、草)
8 哺乳類	クマネズミ	<i>Rattus rattus</i>	齧歯目ネズミ科	東南アジア(推定)	日本各地	全域	不明	紛れ込み	不明	史前(歴史時代という説もある。)	不明	体重150〜200g 頭胴長15〜24cm 尾長15〜26cm	陸域：都市部、住宅地など。	ビルや天井裏など比較的乾燥した高所に生活する。木登りが得意。	人家・ビル内	年に数回	2〜10頭(平均5〜6頭)の子を出産	雑食性(種実類が多い)
9 哺乳類	ドブネズミ	<i>Rattus norvegicus</i>	齧歯目ネズミ科	中央アジア(推定)	日本各地	全域	不明	紛れ込み	不明	史前(江戸時代という説もある。在来種という説もある。)	不明	体重150〜500g 頭胴長18〜26cm 尾長15〜22cm	陸域：都市部、住宅地など(下水道、地下街)。	下水管や地下街など比較的湿った場所を好む。	土中(横え込みなど)、建築物内	年に数回	1〜18頭(平均8〜9頭)の子を出産	雑食性(動物質が多い)
10 哺乳類	ネコ	<i>Felis catus</i>	食肉目ネコ科	家畜種	日本各地	県内各地	不明	ペットの放逐・逸出	ペットの放逐・逸出	不明	不明	体重2〜6kg 頭胴長1〜尾長1〜	陸域	単独生活を送るが、一定の仲間グループがみられる。生ゴミに依存することが多い。小動物を活発に捕食する。	森林、農村地域、住宅地	季節を問わず?	数頭の子を出産	雑食性
11 哺乳類	ハクビシン	<i>Paguma larvata</i>	食肉目ジャコウネコ科	中国南東部、台湾、東南アジアなど	本州以南	ほぼ全域	生息数・分布が増加拡大中。	毛皮用養殖個体の放逐・逸出	茨城県から分布拡大した可能性が高い。	太平洋戦争終戦前後ころ	1980年代(県内では1987年に死体が初記録)。	体重3〜5kg 頭胴長48〜60cm 尾長38〜43cm	陸域：森林、農村地域、住宅地など	夜行性。木登りが得意で樹上をよく利用する。	樹洞、人家(屋根裏)	春〜秋	2〜4頭の子を出産	雑食性(昆虫類、陸生貝類、小型の脊椎動物、果実など)
12 哺乳類	ハツカネズミ	<i>Mus musculus</i>	齧歯目ネズミ科	不明	日本各地	全域	不明	紛れ込み	不明	史前(歴史時代という説もある。)	不明	体重9〜23g 頭胴長57〜91mm 尾長42〜80mm	陸域：住宅地、農耕地、草地	家屋、農耕地、草地などに生息する。	人家内、草地など	年に数回	平均5〜6頭の子を出産	雑食性(種実類が多い)
13 哺乳類	フェレット	<i>Mustela putorius furo</i>	食肉目イタチ科	ヨーロッパケナガイタチの家畜種	繁殖・定着は確認されていない。	繁殖・定着は確認されていない。	1990年代前半に千葉支庁管内で1頭が捕獲されたが、その後は生息情報なし。	ペットの放逐・逸出	ペットの放逐・逸出	繁殖・定着は確認されていない。	繁殖・定着は確認されていない。	体重0.9〜1.1kg 頭胴長30〜36cm 尾長13〜15cm	陸域	不明	不明	不明	不明	雑食性
14 哺乳類	マスクラット	<i>Ondatra zibethicus</i>	齧歯目ネズミ科	北アメリカ	千葉県、東京都、埼玉県	千葉県行徳野鳥観察舎(市川市)周辺	不明	毛皮用養殖個体の放逐・逸出	毛皮用養殖個体の放逐・逸出	太平洋戦争終戦前後ころ	太平洋戦争終戦前後ころ	体重0.5〜1.5kg 頭胴長23〜32cm 尾長18〜29cm	陸域：湖沼、湿地、河川	水辺に生息し、土手に巣穴をつくる。	水辺の土手の巣穴	不明	4〜8頭ほどの子を出産	主に水生植物
15 哺乳類	ワラビー類	<i>Macropodidae sp.</i>	有袋目カンガルー科	オーストラリア	繁殖・定着は確認されていない。	繁殖・定着は確認されていない。	1990年代に、天津小湊町、大多喜町、君津市にて複数の子孫情報あり。	ペットの放逐・逸出	ペットの放逐・逸出	繁殖・定着は確認されていない。	繁殖・定着は確認されていない。	体重1〜頭胴長1〜尾長1〜	陸域	原産地では疎林に生息する種が多い。	不明	不明	不明	雑食性
16 鳥類	アヒル		カモ目カモ科	全国各地	県内各地	池や河川等で見られる。	飼育個体の逸出	飼育個体の逸出	不明	不明	不明	全長59cm	淡水域	湿地に生息する	湿地	春〜夏		雑食性
17 鳥類	コウライキジ	<i>Phasianus colchicus karp</i>	キジ目キジ科	朝鮮半島	北海道・対馬に放鳥されたほか、本州でも記録がある。	不明	不明	狩猟のため放逐	狩猟のため放逐	不明	不明	全長♂80cm、♀60cm	陸域			春〜夏		雑食性
18 鳥類	コジュケイ	<i>Bambusicola thoracica th</i>	キジ目キジ科	中国南部	本州以南に分布	県内各地	樹林等で繁殖する。	狩猟のため放逐	狩猟のため放逐	1918年	不明	全長27cm	陸域					雑食性
19 鳥類	コブハクチョウ	<i>Cygnus olor</i>	カモ目カモ科	ユーラシア大陸北部で繁殖、中国東部、朝鮮半島等で越冬	北海道ウトナイ湖で繁殖、霞ヶ浦等で越冬するほか、各地で観察例がある。	県北部等で観察例がある。	佐原市外浪逆浦では巣を作って繁殖するものもあり。	ペットの放逐・逸出	ペットの放逐・逸出	1975年	不明	全長152cm	淡水域	湿地に生息する	湿地	春〜夏		主に水生植物
20 鳥類	シジュウカラガン	<i>Branta canadensis</i>	カモ目カモ科	北アメリカ?	山中湖、河川湖等で繁殖	手賀沼等で観察例がある。	繁殖は確認されていない。	ペットの放逐・逸出	ペットの放逐・逸出	不明	2000年以降と思われる。	全長67cm?	淡水域	湿地に生息する	湿地	春〜夏		主に水生植物
21 鳥類	ドバト	<i>Columba livia</i>	ハト目ハト科	ユーラシア大陸中西部、北アフリカ	全国各地	県内各地	市街地で普通に見られる。	不明	不明	不明	不明	全長32cm	陸域	社寺や公園等に多い	社寺や橋脚等	ほぼ通年	2卵を産む	雑食性
22 鳥類	ワカケホンセイインコ	<i>Psittacula krameri mani</i>	インコ目インコ科	南アジア、アフリカ	本州各地で繁殖例がある。	千葉市	ねぐらが確認されている。	ペットの放逐・逸出	ペットの放逐・逸出?	1969年	不明	全長40cm	陸域		樹洞		3〜4卵を産む	雑食性
23 爬虫類	カミツキガメ	<i>Chelydra serpentina</i>	カメ目カミツキガメ科	カナダ南部からアメリカ合衆国、中部アメリカを経てエクアドル	日本では1970年頃にはペットとして流通し、日本各地の野外から放逐もしくは逃出したとみられる個体が発見されるようになり社会問題のひとつとして注目されるようになった。また、印旛沼以外では神奈川県大磯丘陵でまとまった数が捕獲されたほか、2003年には武蔵野市の保育園(産経新聞03.11.7)、2004年には都内の公園で孵化個体が確認(佐藤 私信)された。	印旛沼周辺では1978年9月に高崎川で捕獲された記録(NHKニュース)が最も古く、鹿島川からも1986年に報告されている(産経新聞1986.6.12)。また、1990年代中頃からは、印旛沼の定置網で混獲されるようになった(千葉日報1998.9.12)。佐倉市の自然環境調査によれば1998年から1999年にかけて35個体が鹿島川、および高崎川で捕獲もしくは確認された(小林他 2000)。	2002年には印旛沼周辺において野外での繁殖(産卵、孵化、交尾行動)が確認された(小林未発表)。	ペットの放逐・逸出	ペットの放逐・逸出	1970年代?	1978年の報告が最も古い記録	甲長45cm以上、体重30kg以上	淡水域	極めて長寿命で耐熱性が強いので、一旦定着すると影響が長期化する恐れが高い。産卵数も多く、原産地におけるアライグマのような捕食者が存在しない場合には、個体群の増殖率が原産地よりも高くなる可能性がある。	生息地の河川堤防や周囲の水田畔で産卵が確認されている。	6月	卵生、メス1個体が1回の産卵で20〜50個の卵を産む。	基本的に水生動物を捕食する肉食性であるが、胃の内容物から水生植物が確認されることもある。

分類	和名	生態系への影響	人への被害			生態系又は人に対する影響度	防除の緊急度		対策	文献	備考				
			農林水産業への被害	生活被害	生命身体への被害		緊急度	緊急度ランク				緊急度の情報	予防対策	すでに定着している場合の対策	全般
1	哺乳類	アカゲザル	ニホンザルとの交雑	農作物被害	現在のところ、なし	現在のところ、なし	A	A	ニホンザルとの間で交雑がすでに確認されており、危機的状況にある。	飼育管理の強化・外来種問題の普及啓発	実態調査・全頭捕獲・食害の技術的防除	なし	房総のサル管理調査会(1999)、萩原・川本(2001)、萩原ほか(2003)、川本ほか(2004)、NPO法人房総の野生生物調査会(2005)	剥製標本(千葉県立中央博物館)、写真(相澤敬吾・池田文隆)	
2	哺乳類	アライグマ	在来生物の捕食、在来の中型雑食獣との競合、フクロウ類の繁殖樹洞の占拠	農作物被害	天井裏の糞尿・騒音、飼育魚の捕食	現在のところ、なし(アライグマ回虫の危険性が指摘されている)	A	A	北海道や神奈川県からの状況から今後、農作物被害や生態系への影響が増大するものと予測される。定着初期における早急な対策が望まれる。	飼育管理の強化・外来種問題の普及啓発	実態調査・捕獲駆除・食害の技術的防除	日本生態学会(2002)、鈴木(2005)	落合ほか(2002)	剥製・骨格標本(千葉県立中央博物館)、写真(鎌田貴司郎)、映像(大木淳一)	尾に数本の黒い縞模様がある。
3	哺乳類	イヌ	不明	現在のところ、なし	現在のところ、なし	咬傷被害の可能性あり	情報不足	B	通報等に応じて、行政による駆除が実施されている。生態系への影響は不明である。	飼育管理の強化・外来種問題の普及啓発	捕獲駆除	なし	なし	骨格標本(千葉県立中央博物館)	
4	哺乳類	イノシシ	在来生物の捕食、タカサゴキラマダニの増加	農作物・タケノコ被害、水田の畦の踏みおこし。	現在のところ、なし	現在のところ、なし	A	A	近年、県内における農林作物被害金額が1億円を超えており、総合的な対策が必要である。	飼育管理の強化・外来種問題の普及啓発	実態調査・捕獲駆除・食害の技術的防除・生息地管理	日本生態学会(2002)	千葉県生物学会(1999)、浅田ほか(2001)、房総のシカ調査会(2001、2002)	剥製・骨格標本(千葉県立中央博物館)、写真(大木淳一)	国内外来種。イノブタを含む。在来個体群は昭和40年代ごろに絶滅した可能性が高いが、その遺伝子が一部残存している可能性も否定できない。
5	哺乳類	オグロブレーリードッグ	現在のところ、なし	現在のところ、なし	現在のところ、なし	（糞ペスト等の伝播の危険性が指摘されている）	情報不足	C	これまで1頭の生息が確認されただけであり、繁殖・定着情報は得られていない。	飼育管理の強化・外来種問題の普及啓発		鈴木(2005)	東京新聞(2001年5月2日付け特報ちば)	なし	
6	哺乳類	カイウサギ	在来植物の採食	現在のところ、なし	現在のところ、なし	現在のところ、なし	情報不足	C	浮島における調査は実施されておらず、自然植生等に対する影響は不明である。	飼育管理の強化・外来種問題の普及啓発	実態調査	日本生態学会(2002)、鈴木(2005)	千葉県史料研究財団(2002)、鈴木(2005)	なし	
7	哺乳類	キョン	在来植物の採食、ニホンジカとの競合。	農作物被害	現在のところ、なし	現在のところ、なし	A	A	生息数・分布が増加拡大しており、効果的な生息抑制が望まれる。	飼育管理の強化・外来種問題の普及啓発	実態調査・捕獲駆除・食害の技術的防除	日本生態学会(2002)、鈴木(2005)	千葉県生物学会(1999)、浅田ほか(2000)、房総のシカ調査会(2001、2002、2007)	剥製・骨格標本(千葉県立中央博物館)、写真(大木淳一)	勝浦市にあった観光施設が移入源と考えられる。
8	哺乳類	タマネズミ	在来生物の捕食	現在のところ、顕著でない	食品の食害、様々なものを齧る、糞尿被害	病気の伝播(広東住血線虫などの主要宿主)	B	B	生活被害に応じて、駆除業者等による駆除が実施されている。	とくになし	捕獲駆除	宇田川(1974)、矢部(1988)、日本生態学会(2002)	千葉県生物学会(1999)、千葉県史料研究財団(2002)	剥製・骨格標本(千葉県立中央博物館)	
9	哺乳類	ドブネズミ	在来生物の捕食	現在のところ、顕著でない	食品の食害、様々なものを齧る、糞尿被害	現在のところ、なし	B	B	生活被害に応じて、駆除業者等による駆除が実施されている。	とくになし	捕獲駆除	宇田川(1974)、矢部(1988)	千葉県生物学会(1999)、千葉県史料研究財団(2002)	剥製・骨格標本(千葉県立中央博物館)	
10	哺乳類	ネコ	在来生物の捕食(県内ではコアシサシのヒナに対する捕食が問題になっている。)	現在のところ、なし	庭や家庭菜園での脱糞	現在のところ、なし	C&情報不足	C	千葉市内で、希少種であるコアシサシのヒナが捕食されている。状況に応じて、地域的な捕獲が必要かもしれない。その他の地域における生態系への影響は不明である。	飼育管理の強化・外来種問題の普及啓発	実態調査・捕獲駆除	日本生態学会(2002)	なし	骨格標本(千葉県立中央博物館)、写真(田辺浩明)	
11	哺乳類	ハクビシン	在来生物の捕食、在来の中型雑食獣との競合	農作物被害(果実を好む。安房郡のミカン、ピア、夷隅郡のナシなどに被害)	天井裏の糞尿被害・騒音	現在のところ、なし	A	A	全県的に生息し、果樹等の食害が増大している。地域的に生息を抑制するなどの対策が望まれる。	飼育管理の強化・外来種問題の普及啓発	実態調査・捕獲駆除・食害の技術的防除	日本生態学会(2002)、鈴木(2005)	落合(1998)、千葉県生物学会(1999)、落合・浅田(2002)	剥製・骨格標本(千葉県立中央博物館)、写真(大木淳一・田辺浩明)	顔の中央の白線が目立つ。
12	哺乳類	ハツカネズミ	在来生物の捕食	現在のところ、顕著でない	食品の食害、様々なものを齧る、糞尿被害	現在のところ、なし	B	B	生活被害に応じて、駆除業者等による駆除が実施されている。	とくになし	捕獲駆除	宇田川(1974)、矢部(1988)	千葉県生物学会(1999)、千葉県史料研究財団(2002)	剥製・骨格標本(千葉県立中央博物館)	
13	哺乳類	フェレット	現在のところ、なし	現在のところ、なし	現在のところ、なし	現在のところ、なし	情報不足	C	これまで1頭が捕獲されただけであり、繁殖・定着情報は得られていない。	飼育管理の強化・外来種問題の普及啓発		鈴木(2005)	なし	なし	ヨーロッパではウサギを巣穴から追い出すために飼育されてきた。
14	哺乳類	マスカラット	在来生物の捕食	現在のところ、顕著でない(かつてはハスの食害)	現在のところ、なし	現在のところ、なし	情報不足	C	かつては栽培ハスに対する食害が生じていたが、ハス田の消失とともに被害報告はなくなった。調査は実施されておらず、自然植生等に対する影響は不明である。	外来種問題の普及啓発	実態調査	斎藤(1989)、鈴木(2005)	小田切ほか(1989)、千葉県生物学会(1999)、千葉県史料研究財団(2002)、鈴木(2005)	剥製標本(千葉県立中央博物館)	
15	哺乳類	ワラビー類	現在のところ、なし	現在のところ、なし	現在のところ、なし	現在のところ、なし	情報不足	C	複数の目撃情報が得られているが、繁殖・定着情報は得られていない。	飼育管理の強化・外来種問題の普及啓発		なし	なし	なし	
16	鳥類	アヒル	カルガモ、マガモとの交雑	現在のところ、なし	現在のところ、なし	現在のところ、なし	B	B		飼育管理の強化				特になし	
17	鳥類	コウライキジ	自然繁殖個体群(キジ)との交雑	現在のところ、なし	現在のところ、なし	現在のところ、なし	B	B	自然繁殖個体群(キジ)との交雑の問題がある。	捕獲駆除、放鳥を在来種に切り替え	特になし			特になし	
18	鳥類	コジュケイ	現在のところ、なし	現在のところ、なし	現在のところ、なし	現在のところ、なし	D	C		飼育管理の強化	特になし			特になし	
19	鳥類	コブハクチョウ	野生種との交雑	現在のところ、なし	現在のところ、なし	現在のところ、なし	D	C	不明	飼育管理の強化・外来種問題の普及啓発	特になし			特になし	環境省生物多様性情報システム「ガンカモ科鳥類の生息調査」 http://www.biodic.go.jp/gankamo/gankamo_top.html
20	鳥類	シジュウカラガン	野生種との交雑	現在のところ、なし	現在のところ、なし	現在のところ、なし	D	C	不明	飼育管理の強化・外来種問題の普及啓発	特になし	環境庁(2000)		特になし	亜種は未確定。カナダガンとも呼ばれる
21	鳥類	ドバト	不明	農作物被害	建物等への糞被害	感染症の媒介が懸念されるが、現在のところ、なし	C	B	生活被害に応じて、駆除業者等による駆除が実施されている。	外来種問題の普及啓発	ネットによる進入防止、捕獲駆除、給餌の規制			特になし	
22	鳥類	ワカケホンセイインコ	樹洞営巣種への圧迫	不明	現在のところ、なし	現在のところ、なし	D	C		外来種問題の普及啓発	特になし		斎藤ほか(2005)		ホンセイインコの一亜種(ワカケホンセイインコは亜種名)
23	爬虫類	カミツキガメ	在来水生生物への捕食圧	農作業中に咬傷被害が発生する可能性がある。	不明	水辺で咬傷被害を受ける可能性がある。	A	A	定着個体群の総個体数および分布範囲が限られているうちに駆除を実施することが必要、時期が遅くなればなるほど、駆除は困難になる。	飼育個体の遺棄防止の普及啓発		日本生態学会(2002)		有り(東邦大学・千葉県立中央博物館)	

千葉県の外來種整理表(全)

分類	和名	学名	分類群	土着生息地(原産地)	分布・生息情報			移入経路		移入年代		体重等	生息環境	生活史	繁殖			食性		
					日本での分布状況	千葉県での分布状況	千葉県での生息状況	移入経路：日本	移入経路：千葉県	移入年代：日本	移入年代：千葉県				繁殖場所	時期	繁殖形態			
24	爬虫類	グリーンアノール	<i>Anolis carolinensis</i>	トカゲ目イグアナ科	北アメリカの南東部	小笠原諸島、沖縄本島、神奈川県	定着は未確認	未記録	貨物に紛れたか愛玩動物として	未記録	1960年代	未記録	最大の頭胴長75mm	陰域	オスはメスよりも大型になり、繁殖縄張りを構える。メスは孵化した翌年には性成熟し、産卵を始める。	日当たりのよい林縁部	4月～9月	メスは1回に1個の卵を1から2週間に1回産む。	昆虫類	
25	爬虫類	ミシシippアカミガメ	<i>Trachemys scripta elegans</i>	カメ目ヌマガメ科	北アメリカ東部	沖縄から北海道まで全国に定着	都市近郊の河川や調整池	定着し、繁殖していることはほぼ確実であるが、詳細な研究による実証はまだ行われていない。	ペットの放逐・逸出	ペットの放逐・逸出	不明	雄、甲長20cm 雌、甲長28cm	淡水域	オスよりもメスの方が大型になり、メスは背甲長が28cm、体重2.5kgに達する。	生息地の池や沼、河川周辺の地面に穴を掘って産卵する。	6～7月	繁殖能力が高く、1回に20個以上の卵を年に数回産卵する。	雑食性		
26	爬虫類	ミナミシシガメ	<i>Mouremys muticamutica</i>	カメ目バタグールガメ科	台湾、中国東部、インドシナ半島北部、ベトナムに基亜種が生息し、八重山諸島には亜種、ヤエヤマシシガメが生息する。	千葉県印旛沼周辺において、淡水性カメ類の分布調査を行った結果、この地域で新たにまとまった数のミナミシシガメが捕獲された。ミナミシシガメがこの地域で定着している可能性が高いと判断された。	千葉県印旛沼周辺において、淡水性カメ類の分布調査を行った結果、この地域で新たにまとまった数のミナミシシガメが捕獲された。ミナミシシガメがこの地域で定着している可能性が高いと判断された。	高崎川中流域では2000年から2004年までの5年間に、ミナミシシガメが29個体捕獲された。この地域では1998年と1999年の調査でも5個体が捕獲されており(小林他、2000)、また、幼体が確認されたことから、本種が定着している可能性は極めて高い。	ペットの放逐・逸出	ペットの放逐・逸出	昭和初期	1990年代?	雄雌とも、甲長15～18cm	淡水域	オスはメスよりも若干大きくなる。生活史の特性は、在来の淡水性カメ類とはほぼ同じと考えられる。	生息地の池や沼、河川周辺の地面に穴を掘って産卵する	6～7月?	2000年7月下旬に捕獲されたメス個体が、保管期間中に6個の卵を産卵した。	雑食性	
27	両生類	アフリカツメガエル	<i>Xenopus laevis</i>	無尾目ヒバ科	アフリカ大陸南部	関東地方で確認されているが、定着については不明。	利根川・印旛沼水系で記録有り(大利根博物館)	利根川下流域では1998年頃から本種の記録が報告されるようになった。複数の個体が複数年に渡って捕獲されていることから、定着している可能性がある。繁殖しているかどうかは不明。	実験動物として輸入されたものが逸出	不明	1954年から実験動物として輸入されている。野外への逸出年代は不明。	1990年代	体長 50～130mm	淡水域	変態後もほとんど水中で生活し、河川、湖沼から塩性湿地まで、あらゆる水域に生息している	河川、湖沼から塩性湿地	不明	卵生	在来のカエル類など水生生物を好んで捕食する性質を示す(飼育下での実験データ)。	
28	両生類	ウシガエル	<i>Rana (Aquarana) catesbeiana</i>	無尾目アカガエル科	北アメリカのロッキー山脈以東	北海道、本州、四国、九州、小笠原諸島、南西諸島	全域	県内ほぼ全域の池、ため池、湖沼、流のゆるい河川に生息している。	食用として導入	農家の副業として養殖を奨励するため、国家事業として日本各地に配布された。	1918年に日本に導入された。	昭和初期	体長110～185mm	淡水域：沼、用水路、河川	6月以降に産卵されたものはオタマジャクシで越冬し、翌年の6月に変態。秋に変態するオタマジャクシは体長が7cm、幼カエルが3.3cm、春に変態するものはオタマジャクシ11～12cm、幼カエルが4.5cm、10月下旬～11月上旬に冬眠に入る。	湖沼、池、河川の下流など、広い水面を持ち、かつ水深のある静水域	5月～9月	卵は一週間で孵化してオタマジャクシとなる。普通はそのまま越冬し、翌年の5～10月にかけて変態し、体長40mmの幼カエルになる。	オタマジャクシ期は植物を中心とした雑食。変態後は動物食になる。	
29	両生類	トノサマガエル	<i>Rana (Pelophylax) nigromaculata</i>	無尾目アカガエル科	本州、四国、九州	北海道にも移入され、定着している。	一箇所のみで生息が確認されている。	谷津干潟のビジターセンター内の池に定着	国内移入種	不明	国内移入種	1990年代	体長40～90mm	淡水域	主に水田と用水路に生息する	水田、池	4～6月		昆虫類に加え、小型の両生類も捕食する	
30	両生類	ヌマガエル	<i>Rana (Limnodynastes) limnocharis</i>	無尾目アカガエル科	四国、九州、南西諸島(先島諸島を除く)、本州中部地方以西	近年、関東地方各地での分布拡大が報告され、本州内での分布が北東部へ広がっている。	近年、関東地方各地での分布拡大が報告され、本州内での分布が北東部へ広がっている。	左記、地域で繁殖し世代を繰り返していることは確実であり、生息域が拡大するおそれがある。	国内で自然分布拡大なのか、人為的な移動によるものか不明。	不明	1998年に確認された。	体長 25～55mm	淡水域	水田や一時的な水たまりなどの浅い止水に産卵し、幼生は夏期の高温にも耐え、比較的短期間で変態する。圃場整備が行われた乾田にも高密度で生息し、在来種の生息個体が激減した環境に侵入し繁殖しているものと考えられる。	水田	4～7月	卵生	昆虫などの無脊椎動物に加えて、他種のカエル幼体を捕食する傾向が見られる。		
31	魚類	アオウオ	<i>Mylopharyngodon piceus</i>	コイ目コイ科	中国大陸	利根川水系。他に湖沼・溜池などへの放流・生息が推測される。	利根川下流部で定着	数は少ない	ソウギョなどとともに移入	ソウギョなどとともに移入	1942年	1942年	全長60～100cm	大河川下流緩流域、平野部の湖沼、掘割などの淡水域	大河川下流部やそれに連なる水域のやや深いところの生息。	大河川の緩流域	6～7月	流下卵を産卵し、流下中に淡水域で孵化できたものだけが生存。そのため、大河川以外繁殖できない。	主にタニシなどの貝類や底生動物。	
32	魚類	イサザ	<i>Chenogobius isaza</i>	スズキ目ハゼ科	琵琶湖固有種	琵琶湖固有種	印旛沼	一時的生息で、未定着	—	琵琶湖産魚類の移植に伴う混入と考えられている。	—	1985年記録	全長8cm	日中は琵琶湖の沖合いの湖底で、夜間は浮上し摂餌する	沖合いで生活するが、産卵期には岸辺の浅いところに移動する	湖岸の水深7mくらいまでの石のある浅い場所	4月～5月	動物プランクトン食性		
33	魚類	オオクチバス	<i>Micropterus salmoides</i>	スズキ目サンフィッシュ科	北米大陸南東部	全国の河川緩流域、湖沼、ダム湖、溜池など	県内全域の主に湖沼・一部の河川	養老川、小櫃川、湊川、東隅川、栗山川、手賀沼、印旛沼、与田浦、利根川、小糸川、江戸川、長尾川、丸山川、一宮川、南白亀川、手繰川	溜池など孤立した止水域や河川緩流域などに広く生息している。	神奈川県ノ湖への釣目的の放流が初。その後複数回の移植放流の可能性が高い。	不明であるが、釣り対象魚としての放流が主と推測される。	1925年	1965年頃に手賀沼で記録。1983年に印旛沼で記録	全長50cm	淡水域。汽水域の可能性もあり。止水域や河川緩流域を好む。	春から秋は止水域や緩流域の浅所に生息。初夏にオスが営巣し、繁殖。冬季に深場に降り、集団で越冬。寿命は10数年～20年、稚魚期まではオスが保護するが、5cm位で単独生活に入る。メスは4～5年、オスは3～4年で成熟する。	湖沼等の止水域・緩流域の岸辺の水深1.5mくらいまでの砂底や砂礫底	5月上旬～7月上旬	オスが岸辺の水深1.5m位までの水底に、楕円状の巣を作り、メスを次々に誘って産卵させ、孵化後体長5cmになるまで保護する。	体長5cmくらいまでは動物プランクトン、その後魚食性が強まり、多くの魚類を中心にしたさまざまな動物を食べる。
34	魚類	カダヤシ	<i>Gambusia affinis</i>	カダヤシ目カダヤシ科	北米ニュージャージー州からメキシコ沿岸を経てメキシコ中部まで	本州から琉球列島	印旛沼・手賀沼をはじめ、県西部の都市部の河川、栗山川、手繰川、小櫃川まで	都市部の河川下流域などに多く、メダカのような土水路には少ない。	ボウフウ退治のために台湾から移入	不明	1916年	不明	メス全長5cm、オス全長3cm	淡水域から汽水域。水質汚染や高塩分に強く、市街地を流れる都市河川や、溜池から河口汽水域まで生息している。	一年中、同じ水域で生息。成熟は早く、5月に産まれたものは同年内に成熟する。	生息場所と同じ	晩春～初秋	体内受精による卵胎生魚で、全長9mm位の仔魚を産む。	雑食性で、落下昆虫や動物プランクトン、糸状藻類などを食べる。	
35	魚類	カムルチー	<i>Channa argus</i>	スズキ目タイワンドジョウ科	アムール川から長江までの中国北・中部、朝鮮半島	北海道を除く各地	利根川水系下流域、印旛沼、手賀沼、栗山川、東隅川、宮川、南白亀川など県内各地に散在	手賀沼で1945年に異常繁殖の記録。現在は各地にいるが多くない様である。	朝鮮半島から奈良県に移入されたのがはじめ。	不明	1923～24年	不明	全長1m	淡水域。平野部の湖沼や比較的大きな河川の緩流域。	流れの緩やかな場所や止水域の、水草の繁茂するような場所に、単独で生活する。冬季には泥の中などに潜り込み、ほぼ冬眠状態で過ごす。春の上昇とともに活発になり、口に入る動物を追う。上総器官と呼ばれる空気呼吸器官があり、酸素の少ない場所でも生活できる。	生活場所と同じ水質の澄んだような場所	5月～8月	雌雄が共同で浮き巣を作り、産卵し、雌雄で卵・稚魚を保護する。	エビ類、魚類、カエル類など、ある程度の大きさのある動物食	
36	魚類	カワヒガイ	<i>Sarcocheilichthys variegatus variegatus</i>	コイ目コイ科	濃尾平野、琵琶湖流入河川、京都盆地、山口県を除く山陽地方、九州北西部、長崎県志岐	濃尾平野、琵琶湖流入河川、京都盆地、山口県を除く山陽地方、九州北西部、長崎県志岐	亀成川	他に記録なく、未定着と考えられる。	—	不明	—	不明	体長12cm	河川中・下流の緩流域とそれに続く用水などの砂礫底。	水深1～3m程度の砂礫底で生息し、石や沈性植物の間などに潜む。	生息場所のイシガイ科二枚貝類の外殻内に産み付けられる。	5月～8月7月	小型水生昆虫、巻貝、付着藻類などを食べる雑食性		
37	魚類	ギンザケ	<i>Oncorhynchus kisutch</i>	サケ目サケ科	北米大陸カリフォルニアから沿海州中部・サハリンまでの北太平洋の河川に遡上・産卵、北太平洋を回避する。	利根川本流下流域(千葉県産動物総目録、2003)	偶発的な遡上の可能性も否定できないが、養殖個体の速い込み等の可能性が強く、定着はしていないと考えられる。	河川回帰を目的にした放流や養殖のための輸入個体由来の可能性が高い。	日本への移入個体の一部の可能性	—	—	—	全長60cm程度、体重4kg、成熟年齢は通常3～4年	若魚は北太平洋の外洋域。成熟すると河川にはいり上流で産卵。孵化後一年間は淡水域で過ごし、後に降海。	河川で孵化後、1年は淡水域で過ごし、その後、海に下り、北太平洋を回避する。孵化後、満3～4年で部案に回帰する。	河川上流域の浅くて流れの速い場所	10月～1月	河底に巣を掘り、産卵する。	動物食	

分 類	和 名	生態系への影響	人への被害			生態系又は人に対する影響度	防除の緊急度			対 策		文 献		写真・標本の有無（保管先）	備 考
			農林水産業への被害	生活被害	生命身体への被害	緊急度	緊急度ランク	緊急度の情報	予防対策	すでに定着している場合の対策	全般	千葉県			
24	爬虫類	グリーンアノール	稀少昆虫類への高い捕食圧	不明	不明	不明	情報不足	B	存在を広く報告し、目撃情報が得られ次第、徹底的な捕獲・駆除を実施する。	餌として生きた個体の売買禁止	捕獲による駆除	日本生態学会（2002）		有り（東邦大学・千葉県立中央博物館）	神奈川県のある地域に小集団が定着し、すでに数年が経過しているという情報がある（神奈川県立生命の星地球博物館）。
25	爬虫類	ミシシippアカミミガメ	雑食性で、水草の他、魚類、両生類、甲殻類、貝類、水生昆虫などを広く摂食する。在来種のカメ類とは、食物や日光浴場所、産卵場所、越冬場所が類似し、競合する	不明	不明	成長した大型個体に噛みつかれた場合、咬傷被害が発生する恐れが大きい。	AまたはB、時にC	B	生息範囲の把握と駆除方法の確立が先決。	飼育用の販売を禁止する	野生化した集団の生態に関する基礎的研究と、駆除方法の検討を目指した試験的駆除の実施	日本生態学会（2002）		有り（東邦大学・千葉県立中央博物館）	
26	爬虫類	ミナミイシガメ	在来種と食性や生活場所が大きく重なることから、競合の可能性はあるが、定着した個体数がまだ少ないため、影響は顕在化していない。	不明	不明	不明	情報不足	B	生息範囲の把握と駆除方法の確立が先決。	飼育用の販売を禁止する	野生化した集団の生態に関する基礎的研究と、駆除方法の検討を目指した試験的駆除の実施	日本生態学会（2002）、安川（1995）	小林・長谷川（2005a）	なし	
27	両生類	アフリカツメガエル	皮膚に寄生するツボカビが在来種の病原微生物として猛毒をふうおそれが指摘されている。	不明	不明	不明	A	A	繁殖力が高く、定着個体が長生きすることから、発見されしだい駆除を実施すべき。	効果的な捕獲方法の検索・開発による駆除、野外放逐の禁止	野生化した集団の生態に関する基礎的研究と、駆除方法の検討を目指した試験的駆除の実施	日本生態学会（2002）	小林・長谷川（2005b）	なし	養殖業者が野外に放逐しようとして現場で差し止められた事件あり（千葉県立中央博物館、尾崎主任研究員のメモがある）。野外での越冬が可能ならば耐寒性を備えている（千葉大学構内の池での越冬記録あり）。
28	両生類	ウシガエル	日本で最大のカエルであり、極めて捕食性が強く、口に入る大きさであれば、ほとんどの動物が餌となる。昆虫の他、小型の哺乳類や鳥類、爬虫類、他のカエル類を含む両生類、魚類までも捕食の被害を受ける。	不明	住宅地周辺の沼地で騒音被害の届けが出されることがある。	不明	A	B	個体群制御の手段として、商業的な利用を促進させる。	野生個体を実験材料、科学的研究の材料として利用し、制御につなげる。	野生化した集団の生態に関する基礎的研究と、駆除方法の検討を目指した試験的駆除の実施	日本生態学会（2002）		有り（千葉県立中央博物館）	国内外来種
29	両生類	トノサマガエル	在来水生生物の捕食	不明	不明	不明	情報不足	A	小規模な集団であるので、早急に駆除を実現するべきである。	現在定着している地域からの根絶	野生化した集団の生態に関する基礎的研究と、駆除方法の検討を目指した試験的駆除の実施			有り（千葉県立中央博物館）	国内外来種
30	両生類	ヌマガエル	地域生態系への影響は未知数。	不明	不明	不明	B	B	駆除は不可能。新たな地域への侵入を防ぐ手だてを確立させる。	個体の移動を禁止する	野生化した集団の生態に関する基礎的研究と、駆除方法の検討を目指した試験的駆除の実施	日本生態学会（2002）	小賀野ほか（2005）、長谷川・小賀野（1998）	有り（千葉県立中央博物館）	
31	魚類	アオウオ	不明	報告されていない	なし	なし	Dまたは情報不足	C			なし	川那部・水野（1989）	千葉県生物学会（1999）、千葉県史料研究財団（2002）		
32	魚類	イサザ	不明	なし	なし	なし	不明	—	—			川那部・水野（1989）、中坊（1993）	千葉県生物学会（1999）		
33	魚類	オオクチバス	魚類を中心に、様々な動物を捕食することから、生物組成に与える影響が強いといわれ、特に溜池や小規模水域においてこの影響は強いと考えられている。	強度の捕食による在来の漁業対象種の減少があるとされる。	なし	なし	AまたはB、時にC	AまたはB	在来魚種や多くの水生生物への捕食圧による漁業資源減少や生態系悪化のため緊急に防除が必要とされる。	特定外来生物への指定、県条例で移植放流禁止	なし	環境省（2004）、川那部・水野（1989）、中坊（1993）、日本生態学会（2002）、丸山ほか（1987）	千葉県生物学会（1999）、千葉県史料研究財団（2002）、水野・梶山（2000）、梶山（1996a）田中・新島（2000）		本種と同様の問題があるとされるブルーギルが一緒にいる場合、両種の競合関係があるのではないかと指摘あり。
34	魚類	カダヤシ	メダカとの競合を問題にする意見がある。	なし	なし	なし	CまたはD、または情報不足	C			なし	川那部・水野（1989）、中坊（1993）、日本生態学会（2002）	千葉県生物学会（1999）、千葉県史料研究財団（2002）、千葉県内水面水産試験場（2000）、田中・新島（2000）		
35	魚類	カムルチー	動物食のため、異常繁殖があると他の生物の資源量に影響を与える可能性が指摘されている。	現状では報告なし	なし	なし	Dまたは情報不足	C			なし	川那部・水野（1989）、中坊（1993）、日本生態学会（2002）	千葉県生物学会（1999）、千葉県史料研究財団（2002）、千葉県内水面水産試験場（2000）		食用となるが、顎口虫という寄生虫がいるので注意が必要。大物釣りの対象魚として好まれる。
36	魚類	カワヒガイ	情報不足	なし	なし	なし	情報不足	C	なし			川那部・水野（1989）、中坊（1993）	環境管理センター（1996a）		近縁のビワヒガイがある程度広く生息しているが、この種の誤同定の可能性も否定できないが、両種の分布が重なることから、カワヒガイの生息の可能性も完全には否定できない
37	魚類	ギンザケ	情報不足	情報不足	なし	なし	不明	不明	なし			川那部・水野（1989）、中坊（1993）	千葉県資料研究財団（2003）		

千葉県の外來種整理表(全)

分類	和名	学名	分類群	土着生息地(原産地)	分布・生息情報			移入経路		移入年代		体重等	生息環境	生活史	繁殖			食性	
					日本での分布状況	千葉県での分布状況	千葉県での生息状況	移入経路：日本	移入経路：千葉県	移入年代：日本	移入年代：千葉県				繁殖場所	時期	繁殖形態		
38	魚類	グッピー	<i>Poecilia reticulata</i>	カダヤシ目カダヤシ科	ベネズエラからガイアナ	本州から琉球列島	都川、支川都川、葦川	都市部河川の一部でスポット的に生息している。	観賞魚として移入されたものを野外に逸出、放流した。	観賞魚として移入されたものを野外に逸出、放流した。	不明であるが、顕著な広がりはない1960年代以降	不明	メス体長5cm、オス体長3cm	平野部の緩流域、池沼、水田など。汚染や塩分に対する耐性が強く、都市の下水溝や汽水域などでも生息できるが、低音には比較的弱い。	止水域や緩流域に生息している。	生息域に同じ	水温25℃以上であれば一年中	卵胎生。オスの臀鰭が交尾器になり、体内受精をし、全長9mm位の稚魚を数尾から100尾程度産む。	藻類、デトリス、小型水生動物など
39	魚類	ガンゴロウブナ・ハラブナ(ガンゴロウブナの人工品種)	<i>Carassius cuvieri</i>	コイ目コイ科	琵琶湖・淀川水系	日本各地	県内のほぼ全域の河川、湖沼、溜池など	釣り目的で県内各地で継続的に放流されている。	放流	放流		体長約40cm	河川下流域の緩流域、池沼、湖、ダム湖等の表・中層	植物プランクトン食のため、本家中層遊泳魚であるが、改良されたため表・中層を遊泳する。	水草や浮遊物に付着卵を産み付ける。	水草や浮遊物に付着卵を産み付ける。	4月-6月	集団で岸辺近くの水草などに浮遊物に、粘着性のある付着卵を産み付ける。	微小な植物プランクトンを餌で濾して食べる。
40	魚類	コウタイ	<i>Channa asiatica</i>	スズキ目タイワンドジョウ科	長江以南の中国、台湾、海南島	石垣島、大阪府に移植	利根川	大根博物館収蔵史料として記録されている。	日本の記録は全て移入によると考えられる	何らかの移入による一時的出現と推測される	不明	1980年代前半?	全長30cm	山間の流水域、水田地帯	上鰓器官による空気呼吸が出来る。夜行性で、昼間は水草の間などに潜む。	生息域に同じ	原産地では4月-6月	営巣はせず、水草に粘着卵を産み付け、親魚が卵・稚魚を保護する習性がある。	魚類やカエル類などの動物食
41	魚類	コクチバス	<i>Micropterus dolomieu</i>	スズキ目サンフィッシュ科	北米大陸	近年日本各地の河川やダム湖に釣(遊漁)目的で放流・定着例が出来てきている。37都道府県で確認	利根川(確認は数例のみ)	千葉県では未定着と推定される。	アメリカから導入し、芦ノ湖へ放流		1925年に芦ノ湖へ放流の記録。1990年代以降の放流が激増。		1年15cm、2年22cmを超えて成魚となる。	河川上・中流域の淡水域。ブラックバス(オオクチバス)より冷水性で、流れのあるところに生息する。			5-7月	オスがすり鉢状の巣をつくり、メスに産卵させ、卵から稚魚までを保護する。	肉食性で、魚類や甲殻類が主食
42	魚類	コクレン	<i>Aristichthys nobilis</i>	コイ目コイ科	アジア大陸東部	霞ヶ浦、北浦、利根川下流域、江戸川。淀川にも放流により生息。	利根川とその付属水域		ハクレンとともに中国から食料増強の目的で移入				体長1m	大河川下流緩流域、平野部の湖沼、池などの淡水域。	流れの緩やかな場所や止水域に生息。中・上層を群泳。	大河川下流緩流域	6-7月	流下卵を産み、卵は流下しながら発生を続け、淡水中で孵化する。このため利根川以外では繁殖が確認されていない。	動物プランクトン
43	魚類	シロヒレタビラ	<i>Acheilognathus tabira tabira</i>	コイ目コイ科	濃尾平野、琵琶湖淀川水系、山陽地方、四国北部	濃尾平野、琵琶湖淀川水系、山陽地方、四国北部	戸神川	後述文献調査で記録された。未定着。		ガンゴロウブナの放流が行われており、またキンギョが同時に記録されていることから、これら放流による一時的出現と推測される。		1998年に記録	全長8cm	河川下流の緩流域や付属の用水、平野部の湖沼や溜池などの砂底や砂泥底、湖岸の岩礁地帯や護岸石垣の間など。	湖岸の砂泥底や岩礁地に生息するが、タナコ類の中では最も深いところまで生息し、琵琶湖では水深30-40m付近まで採集される。	生息域の同じ	4月-7月	ドブガイやマツカサガイなどのイシガイ科二枚貝類の縫業内に産卵する習性がある。	主に付着藻類
44	魚類	スゴモロコ	<i>Squalidus chankaensis bima</i>	コイ目コイ科	琵琶湖固有亜種	琵琶湖。関東地方に移植されている。	利根川、八間川、大須賀川、栗山川水系、一宮川、夷隅川、印旛沼、手賀沼、養老川、小櫃川	県内の河川に広く生息し、定着している可能性が高い。	関東平野への移植が行われた。	琵琶湖からの移植またはそれからの拡大と推定される。	不明	不明	全長12cm	琵琶湖では水深10m前後の砂泥底	琵琶湖の水深10m付近の砂泥底から砂底の水深近くを群泳する。冬は深みに移動する。満1-2年で成熟する。	生息域に同じ	5月-6月	卵は弱い粘着性を持つ沈性卵で、直接水底にばら撒かれると考えられている。	水生昆虫、ヨコエビ、小型巻貝、浮遊動物
45	魚類	ストライプトバス	<i>Morone saxatilis</i>	スズキ目モロネ科	北米大陸	江戸川(写真確認)、東京湾・霞ヶ浦(聞き取り)	江戸川(写真確認)、東京湾(聞き取り)	定着している可能性は小さい	不明	不明	1990年代後半?	1990年代後半?	江戸川で捕獲された写真個体は体長約50cmメスで発達した卵巣を持っていた	沿岸域-汽水域、産卵時淡水域に入る。	河川淡水域			魚食性	
46	魚類	ズナゴイ	<i>Hemibarbus longirostris</i>	コイ目コイ科	近畿以西の本州、朝鮮半島、中国遼河	近畿以西の本州、静岡県東川科、山陰の一部の川	白狐川で記録	未定着と推測される		一時的移入と推測される		1980年代前半?	全長20cm	河川中流の緩流部	緩流部の水底付近に生息し、砂にもぐり習性がある。日中、水面近くに浮上していることもある。満2年で全長10-13cmに成長し、成熟する。	生息域に同じ	5月-6月	沈性粘着卵を産む。	主に止水域カゲロウ類などの水生昆虫を食べる。
47	魚類	ゼゼラ	<i>Bivia zezera</i>	コイ目コイ科	濃尾平野、琵琶湖・淀川水系、山陽地方、九州西部	濃尾平野、琵琶湖・淀川水系、山陽地方、九州西部、関東平野	利根川、江戸川、印旛沼、高崎川	利根川水系を中心に定着していると推定される。	関東地方へは移植	千葉県は関東地方への移植によると推定される。			全長8cm	河川下流域、平野部の浅い湖沼、用水、河川敷内のワンド。	底生性で、流れのほとんどない淀みの泥底や砂泥底を好む。満1年で成熟する。	生息域周辺のアシやマコモの根元	4月-7月	アシやマコモの沈性粘着卵を産みつけ、オスが保護する。	付着藻類、デトリスを主食にする雑食性
48	魚類	ソウギョ	<i>Ctenopharyngodon idellus</i>	コイ目コイ科	アムール川からベトナム北部までのアジア大陸東部	繁殖は利根川水系。ほかに除草目的で全国各地で放流された。	利根川、江戸川、印旛沼、栗山川など	種分布域は利根川水系	食糧増産などの目的で移入・放流	利根川水系放流がもと			体長1m	大河川下流緩流域、平野部の湖沼、掘削などの淡水域	流れに緩やかな場所や止水域のやや深いに生活する。	大河川下流緩流域	6-7月	流下卵を産み、卵は流下しながら発生を続け、淡水中で孵化する。このため利根川以外では繁殖が確認されていない。	岸に生えるマコモ、アシ、浮草、水草など水生植物食
49	魚類	タイリクスズキ	<i>Lateolabrax sp.</i>	スズキ目スズキ科	黄海、渤海、中国沿岸	西日本から関東地方沿岸域	東京湾、外房海域	外房海域では釣りにより比較的容易に捕獲されている。	養殖用に輸入、生養殖中のものが逸出したが、西日本からの拡大		1980年代後半以降	1990年代には確認されている。	全長70cmを超える	沿岸域、河口汽水域	沿岸域に住む。河口内でもよくつれる。生活史の詳細は不明。			動物食性と推測される	
50	魚類	タイリクバラタナゴ	<i>Rhodeus ocellatus ocellatus</i>	コイ目コイ科	アジア大陸東部、台湾	日本全国	南部の一部を除き県内各地記録：印旛沼、手賀沼、利根川、栗山川、一宮川、夷隅川、与田浦、南白亀川、手繰川	河川改修、圃場整備などに伴う水域環境の変化により、本種およびイシガイ科二枚貝類の生息可能な環境が減少、本種も急激に減少中である。	ハクレンやソウギョの移入に伴い入ったと推測されている。	ハクレンやソウギョの移入に伴い入った、それが拡大したと推測されている。	1940年代	1940年代、あるいはそれ以降	全長8cm	平野部の池沼、細流、溜池、小河川、灌漑用水路など	流れの弱い場所や止水域などで生息。寿命は1-2年。	流れの弱い場所や止水域などで生息する場所	地域によって4月-10月	イシガイ科二枚貝類の縫業内に産卵、卵は貝の縫業内で孵化。発生し、稚魚として浮上。単独生活が始める。	稚魚期は動物プランクトン食、その後付着藻類を中心にした植物食
51	魚類	タイワンドジョウ	<i>Channa maculata</i>	スズキ目タイワンドジョウ科	中国南部、ベトナム、台湾、海南島、フィリピン	石垣島、和歌山県、兵庫県、香川県などの各地で定着	手賀沼で記録がある	一時的記録で未定着と推測される。	1906年に台湾から大阪府堺への移入が最初	不明	不明	不明	全長50cm	平野部の池沼	水草の多いところを好む。他はカマルチーと同じ。	生活場所と同じ水草の茂るような場所	5月-8月	雌雄が共同で浮き巣を作り、産卵し、雌雄で卵・稚魚を保護する。	エビ類、魚類、カエル類など、ある程度の大きさのある動物食
52	魚類	タモロコ	<i>Gnathopogon elongatus elongatus</i>	コイ目コイ科	東海地方、長野県諏訪湖地方、濃尾平野、福井県から紀ノ川まで、山陽地方、四国瀬戸内側と四万十川水系。しかし、関東平野のものが移植と思われていたが、自然分布の可能性も否定できない。	東海地方、長野県諏訪湖地方、濃尾平野、福井県から紀ノ川まで、山陽地方、四国瀬戸内側と四万十川水系。東北地方、九州の一部へ移植。関東平野のものが移植とされてきたが、自然分布の可能性も否定できない。	県内のほぼ全域の河川、湖沼、溜池、池など。記録：印旛沼、手賀沼、小櫃川、一宮川、夷隅川、養老川、栗山川、南白亀川、手繰川、鹿島川、高崎川	県内ほぼ全域に定着	関東平野へは1939年と41年に移植されたこととされているが、それ以前に生息していたことが確認され、関東が自然分布の可能性も考えられる。	不明			全長10cm	河川中・下流部、水田に付属する細流や溜池、湖沼、池など。淡水域：緩やかな流水を好み、多くの在来種が絶滅した圃場整備後の水田水路や改修後の小河川にある落盤工の下側などで、本種だけがまとまって採集されることがある。	流れの緩やかな、あるいはない淡水域の中・低層で生活。雌雄とも、満1年で成熟する。	細流、灌漑用水路、水田など	4月-7月	水草や抽水植物などに沈性粘着卵を産みつける。	ユスリカ幼虫、イトミミズ、ヨシノボリ類の幼魚、動物プランクトン、水草など、動物食主体の雑食性
53	魚類	チャカ属の一種	<i>Chaca sp.</i>	ナマズ目チャカ科	東南アジア-インド	江戸川(写真確認)	未定着と考えられる	観賞魚の放流?	不明	不明	1990年代後半?	1990年代後半?	全長約10cm	淡水域					
54	魚類	チャカ科ヤマトノボリ(チャカ)	<i>Ictalurus punctatus</i>	ナマズ目アメリカナマズ科	北米	少なくとも、利根川下流域、霞ヶ浦、北浦などを中心に優先種となっている。記録：霞ヶ浦、北浦、利根川、荒川	利根川、江戸川、栗山川、印旛沼、手賀沼	北部の利根川水系やその付随水域を中心に生息している。	養殖用種苗としてアメリカから導入	30年ほど前に関東地方や東北南部で養殖対象種として輸入された時期がある。このときの逸出や放棄による拡散などの可能性はあるが、詳細は不明。	1975年頃?霞ヶ浦では1990年代前半から稚魚がまとまって入網し、漁獲量が増加してきていることから、この頃から安定した定着が推定される。	1971年		平野部の規模の大きい池沼や河川下流域、それに連なる水路など	大雨時には陸上を移動する。		6-8月		幅広い雑食性

分 類	和 名	生態系への影響	人への被害			生態系又は人に対する影響度	防除の緊急度			対 策		文 献		備考	
			農林水産業への被害	生活被害	生命身体への被害		緊急度	緊急度ランク	緊急度の情報	予防対策	すでに定着している場合の対策	全般	千葉県		写真・標本の有無（保管先）
38	魚類	グッピー	メダカとの競争関係が議論されているが、両種の間以上に両種の生息環境の悪化が激しく、千葉県内での競合関係は報告されていない。	なし	なし	なし		C			なし	川那部・水野(1989)、中坊(1993)	千葉県史料研究財団(2002)		
39	魚類	ガンゴロウブナ・ヘラブナ(ガンゴロウブナの人工品種)	県内各地でもかなり古くから溜池などでの釣りの目的で放流が継続的に行われてきたが、その影響についてはほとんど調べられていないと認め不明である。	なし	なし	なし	情報不足		防除の必要性について社会的検討が必要	なし	なし	川那部・水野(1989)、中坊(1993)	千葉県生物学会(1999)、千葉県史料研究財団(2002)		県内で見られるのは少なくともその大部分が飼育品種のヘラブナであると推定される。一般に「ヘラブナ」と呼ばれて現在全国で放流されているものは、大阪府内の養殖業者が肉付きの良い個体を食用に改良したものを漁業権魚種「ふな類」として種苗放流あり。
40	魚類	コウタイ	県内未定着により現在まで影響報告なし。		なし	なし	情報不足	C			なし	川那部・水野(1989)、中坊(1993)	千葉県生物学会(1999)		原産地では食用および漢方薬原料とされる。
41	魚類	コクチバス	食害による在来生物群集に対する影響	有用魚種の食害	なし	なし	千葉県での扱いについては情報不足	千葉県での扱いについては情報不足		内水面漁業調整規則第32条の2(外来魚の移植の制限)		日本生態学会(2002)、農林水産技術会議事務局ほか(2003)		写真・標本：千葉県内水面水産研究センター	千葉県には生息に適した環境が少ないと思われる。また情報が少なく、判断する十分な情報がない。
42	魚類	コクレン	不明	報告なし	なし	なし	Dまたは情報不足	C	なし		なし	川那部・水野(1989)、中坊(1993)	千葉県生物学会(1999)		農ヶ浦などでは漁業対象になっている。
43	魚類	シロヒレタビラ	情報不足	報告なし	なし	なし	情報不足	C		啓蒙による移動や飼育個体の放流の防止	なし	川那部・水野(1989)、中坊(1993)	環境管理センター(1996b)		
44	魚類	スゴモロコ	情報不足	報告なし	なし	なし	情報不足	情報不足			なし	川那部・水野(1989)、中坊(1993)	千葉県生物学会(1999)		琵琶湖ではホンモロコの代用として漁業対象種になっている。
45	魚類	ストライプトバス	不明	報告なし	なし	なし	情報不足	不明	不明		なし				写真確認・聞き取り：望月 東京湾ではまれに捕獲されるとの情報あり
46	魚類	ズナガニゴイ	情報不足	報告なし	なし	なし	情報不足				なし	川那部・水野(1989)、中坊(1993)	千葉県生物学会(1999)		千葉県での確認には精査が必要との指摘あり。漁獲対象魚で、雑魚として、てんぷらや唐揚げにされる。
47	魚類	ゼゼラ	情報不足	報告なし	なし	なし	情報不足				なし	川那部・水野(1989)、中坊(1993)	千葉県生物学会(1999)		漁獲されると雑魚として扱われる。
48	魚類	ソウギョ	不明	なし	なし	なし	Dまたは情報不足	C	なし		なし	川那部・水野(1989)、中坊(1993)、日本生態学会(2002)	千葉県生物学会(1999)、千葉県史料研究財団(2002)、尾崎(1996b)、梶山(1996b)		
49	魚類	タイリクスズキ	不明	不明	なし	なし	情報不足	情報不足			なし		日本生態学会(2002)		
50	魚類	タイリクバラタナゴ	同一種内の別亜種であるニッポンバラタナゴとの交雑が報告されている。また、千葉県ではミヤコタナゴとの競争関係による駆逐が知られている。	なし	なし	なし	条件によりA-D	条件によりA-C	比較的規模の大きい水系ではタイリクバラタナゴとミヤコタナゴが共存しているが、ミヤコタナゴが生息する止水域あるいは緩流域などに侵入した場合は短期間でタイリクバラタナゴに置き換わった例が知られている。	啓蒙による移動や飼育個体の放流の防止	ミヤコタナゴ生息域での駆除の試みがなされた例がある。	日本生態学会(2002)、環境省野生生物保護対策検討会移入種問題分科会(移入種検討会)(2002)、川那部・水野(1989)、中坊(2000)、奥田ほか(1996)	千葉県生物学会(1999)、千葉県史料研究財団(2002)、千葉県内水面水産研究センター(2004)、田中・新島(2000)		
51	魚類	タイワンドジョウ	動物食のため、異常繁殖があると他の生物の資源量に影響を与える可能性が考えられる。	現状では報告なし	なし	なし	Dまたは情報不足	C			なし	川那部・水野(1989)、中坊(1993)	千葉県生物学会(1999)		大物釣りの対象魚。原産地では食用として生きて売られている
52	魚類	タモロコ	不明	報告なし	なし	なし	情報不足	不明			なし	川那部・水野(1989)、中坊(1993)	千葉県生物学会(1999)、千葉県史料研究財団(2002)、千葉県内水面水産研究センター(2004)、田中・新島(2000)		食用になるが千葉県では利用していない。
53	魚類	チャカ属の一種	不明	報告なし	なし	なし				啓蒙による移動や飼育個体の放流の防止	なし				写真確認：望月
54	魚類	チヤカヤクトフィッシュ(ツリカヤス)	情報不足		なし	なし	情報不足であるが、生態的地位が高いと推定され、資源量が大きくなった場合、生態系への何らかの影響があることは容易に予測されるが、調査資料がなく詳細は不明である。	情報不足			なし	日本生態学会(2002)、環境省野生生物保護対策検討会移入種問題分科会(移入種検討会)(2002)	尾崎(2003)、尾崎(2004)、尾崎・宮部(2007)	写真・標本：千葉県内水面水産研究センター	

分 類	和 名	生態系への影響	人への被害			生態系又は人に対する影響度	防除の緊急度			対 策		文 献		写真・標本の有無 (保管先)	備 考
			農林水産業への被害	生活被害	生命身体への被害	緊急度	緊急度ランク	緊急度の情報	予防対策	すでに定着している場合の対策	全般	千葉県			
55	魚類	チョウセンブナ	情報不足。一旦定着したものが近年激減していることについては、一般的に生態環境不適合、近年の環境変化、捕食・競争種の出現、えさ生物の減少などが考えられるが、実態は不明。	報告なし	なし	なし	情報不足	C		啓蒙による移動や飼育個体の放流の防止	なし	川那部・水野(1989)、中坊(1993)	千葉県生物学会(1999)		
56	魚類	ツチフキ	情報不足	報告なし	なし	なし	情報不足	C			なし	川那部・水野(1989)、中坊(1993)	千葉県生物学会(1999)		漁獲された場合、雑魚として扱われる
57	魚類	ナイルテラピア(チカダイ)	不明	報告なし	なし	なし	情報不足	情報不足	なし		なし	川那部・水野(1989)、中坊(1993)	千葉県生物学会(1999)		谷城(千葉県動物誌)では、原典のテラピアを本種であるとしてチカダイの和名で同書中に記録している。美味であり、刺身で供されることが多い。温泉水や温排水を利用した養殖対象種。チカダイは別名。
58	魚類	ニジマス	競争、捕食による他生物の衰退	なし	なし	なし	D	C			なし	日本生態学会(2002)、川那部・水野(1989)、中坊(1993)	千葉県生物学会(1999)、藍・尾崎(2007)		放流地では漁業種魚種
59	魚類	ハクレン											千葉県内水面水産研究センター(2004)		漁業種魚種
60	魚類	ハス	情報不足	報告なし	なし	なし	情報不足	不明	なし	琵琶湖産アユ種苗の放流に伴う拡大であり、種苗法流のあり方から見直さないといけないと各地での継続的移入が続くことから、この点からの再検討が不可欠	なし	川那部・水野(1989)、中坊(1993)	千葉県生物学会(1999)、千葉県史料研究財団(2002)、千葉県内水面水産研究センター(2004)		
61	魚類	ヒメダカ(野生メダカの人工品種の総称)	野生個体の生息域にヒメダカが入った場合は、野生メダカ集団の遺伝的かく乱が起ると推測される。	なし	なし	なし	C			啓蒙による移動や飼育個体の放流の防止	なし	川那部・水野(1989)、中坊(1993)			ヒメダカはメダカの人工品種。野生のメダカには遺伝子組成の異なる複数の地方群があり、各地でその土地のもの異なる地方群のものが放流されている例が知られている(千葉県では未確認)。この場合、ヒメダカの放流と同質の問題が起きると推測される。
62	魚類	ビワヒガイ	情報不足	報告なし	なし	なし	情報不足	不明	なし		なし	川那部・水野(1989)、中坊(1993)	千葉県生物学会(1999)、千葉県内水面水産研究センター(2004)		漁業対象種で、琵琶湖では延縄、刺網、鮎、鯰、茶などで漁獲される。身は自身で、塩焼、照焼、唐揚げ、南蛮漬、辛子味噌和などで食される。旬は3月～4月。
63	魚類	ブルーギル	本種の捕食により在来魚などに大きな影響を与えるとされているが、県内の例で見ると場所の条件で影響の出方が異なるようである。より詳細な調査が必要であろう	捕食による在来種への影響が指摘されている。また、網漁具への入網による作業効率の低下なども考えられる。	なし	なし	AまたはB,時にC(情報不足)	AまたはB,時にC(情報不足)	影響について水域ごとの調査が必要	県条例で移殖放流禁止		環境省編(2004)、川那部・水野(1989)、中坊(1993)、日本生態学会(2002)、丸山ほか(1987)	千葉県生物学会(1999)、千葉県史料研究財団(2002)、尾崎真澄(1996a)		
64	魚類	ベヘレイ	何らかの影響は予測されるが、現状は情報不足。霞ヶ浦では、1988年以来混獲されるようになり、1999年には優先種になり、その後減少したが混獲は続いている。		なし	なし	情報不足	不明			なし	川那部・水野(1989)	千葉県生物学会(1999)		原産地では高級魚。各地の水産試験研究機関で増殖・放流仕官が行われているが、現状では販路の問題が残っている。
65	魚類	ホンモロコ		報告なし	なし	なし	情報不足	C			なし	川那部・水野(1989)、中坊(1993)	千葉県生物学会(1999)		琵琶湖では高級食用魚で、鮎、地曳網、底曳網、刺網等で漁獲され、塩焼きや甘露煮で食される。
66	魚類	ムギツク	不明	報告なし	なし	なし	情報不足				なし	川那部・水野(1989)、中坊(1993)	千葉県生物学会(1999)		雑魚として取り扱われ、食用になる。
67	魚類	養殖コイ、ヒゴイ	情報不足であるが、養殖個体や人工品種などの、遺伝的に本来の種と異なる個体が優占し、あるいは本来の野生個体がなくなっている状況であり、種内の遺伝的かく乱を議論する段階は過ぎていると考えられる。他の生物に対する影響は、底生動物に対する職外の可能性が考えられる。	報告なし	なし	なし	不明	不明			なし	川那部・水野(1989)、中坊(1993)	千葉県生物学会(1999)、千葉県史料研究財団(2002)		水域によっては漁業対象種
68	魚類	ワカサギ	在来の地方群がいるところで、形質の異なる他産地個体を放流したため形質の変化が起きた事例が知られている。	報告なし	なし	なし	情報不足				なし	川那部・水野(1989)、中坊(1993)	千葉県生物学会(1999)、千葉県史料研究財団(2002)、千葉県内水面水産研究センター(2004)		漁業種魚種
69	魚類	ワタカ	不明	報告なし	なし	なし	情報不足	不明			なし	川那部・水野(1989)、中坊(1993)	千葉県生物学会(1999)、千葉県史料研究財団(2002)、千葉県内水面水産研究センター(2004)		
70	昆虫類	アオマツムシ		ナシへの被害	なし	なし	C	C			なし	石川ほか(1981)、大野(1986)	千葉県生物学会(1999)		
71	昆虫類	アカウキクサソウムシ					情報不足	C					千葉県生物学会(1999)		
72	昆虫類	アカクビホシカムシ			干魚など乾燥動物質を食害する。		C	C				黒澤ほか(1985)、林(1984)	千葉県生物学会(1999)	写真： http://www.eiken.city.nagoya.jp/insect/c_clerid/index2.htm	

千葉県の外來種整理表(全)

						分布・生息情報			移入経路		移入年代		繁殖					
分類	和名	学名	分類群	土着生息地(原産地)	日本での分布状況	千葉県での分布状況	千葉県での生息状況	移入経路:日本	移入経路:千葉県	移入年代:日本	移入年代:千葉県	体重等	生息環境	生活史	繁殖場所	時期	繁殖形態	食性
73	昆虫類	アカマダラカツオブシムシ	<i>Trogoderma varium</i>	コウチュウ目カツオブシムシ科	本州以南	下総台地						体長2.6-4.0mm	陰域					
74	昆虫類	アズキマメゾウムシ	<i>Callosobruchus chinensis</i>	コウチュウ目ハムシ科	本州以南	全域	野外では発見しにくい。	中国からアズキに混入		3-8世紀		2-3mm	陰域;畑地及び室内 成熟マメのみで育つ屋内型	貯蔵中の豆に来て産卵、年に数回発生、温度25℃、湿度75%で約1ヶ月で1世代	貯蔵中の豆類に直接産卵して世代を繰り返す。			アズキ、ササゲ、ダイズ、エンドウ、ソラマメ
75	昆虫類	アトグロホソアリモドキ	<i>Anthicus floralis</i>	コウチュウ目アリモドキ科		利根川低地、下総台地、房総沿岸地						体長3.0-3.5mm	陰域					
76	昆虫類	アトラスオオカブト	<i>Chalcosoma atlas</i>	コウチュウ目コガネムシ科	熱帯アジア		2005年9月山田町の1例のみ	ベッコウ昆虫として輸入、あるいは国内の飼育下で繁殖	飼育個体の放逐と思われる。			体長50mm-110mm	陰域					
77	昆虫類	アメリカシジミバチ	<i>Sceliphron caementarium</i>	ハチ目アナバチ科	北米	東京周辺	利根川低地、下総台地、内湾低地、房総丘陵			1945年		体長20-25mm	陰域					
78	昆虫類	アメリカシロヒトリ	<i>Hyphantria cunea</i>	チョウ目ヒトリガ科	北米	本州以南	全域	輸入貨物への蛹混入1946年8月の東京が最初で、1947年には都心部と横浜に分布。	成虫の飛翔移動千葉県には1949年に入った。1955年市川市、松戸市。初期には東西北部に分布。1974年秋には、銚子-八日市場-横芝-土気-高滝まで分布。その後東南部に広がっているという情報。	1945年頃		成虫体長14-16mm	陰域 : 蛹で越冬	年2回又は3回発生	樹園地及び街路樹	年間の発生は2回、成虫が5月下旬頃と8月中旬頃	1雌当たりの産卵数平均900-1000個	ブラタナスとサクラ、カキの被害が著しい。ほかにクワ、ヤナギ類、ニワウルシなど。
79	昆虫類	アメリカミズアブ	<i>Hermetia illucens</i>	ハエ目ミズアブ科	本州以南	利根川低地、下総台地、房総丘陵				1950年頃		体長10-20mmほど	陰域					
80	昆虫類	アルファルフアコゾウムシ	<i>Hypera postica</i>	コウチュウ目ゾウムシ科	ヨーロッパ	九州,琉球	下総台地 夷隅、千葉、東葛、山武、長生	成虫が輸入貨物の隙間などに潜り込んで侵入したと考えられ、国内でもこのような習性や、新成虫の飛翔によって分布を拡大したようである。	成虫の飛翔移動	1982年に福岡県と沖縄県。	2004年	体長4.8-5.5mmほど	陰域	成虫は産卵数が多い(600-800卵)、しかも土着の有効天敵が存在しない。4月頃に高密度、高湿度等により疫病が流行し減少することもある、鹿児島県で1998年4月に疫病が流行し減少した。	マメ科植物	11月頃からレンガ、ウマゴヤシ、カラスノエンドウなどのマメ科植物に飛来し、1、2月を中心に12月から5月上旬まで産卵を続ける。4月中旬-下旬に幼虫密度がピークに達し、5月上旬頃から新成虫が羽化し始める。	成虫は5月中旬頃から周辺の樹皮干や建物の隙間、石の下などに移動し、集団で夏眠。	草食
81	昆虫類	イセリアカイガラムシ	<i>Icerya purchasi</i>	カメシ目ワジカイガラムシ科	オーストラリア	本州、四国、九州、屋久島、種子島、奄美大島、沖縄、石垣島	下総台地、内湾低地、房総沿岸部	市街地の公園などの天敵の少ない人工的な環境下やトベラなどにしばしば多発する。	柑橘系に付着して侵入	明治時代		体長4-6mm	陰域	年2-3回、時期不定、成虫越冬				
82	昆虫類	イネミズゾウムシ	<i>Lissorhoptrus oryzophilus</i>	コウチュウ目オサゾウムシ科	アメリカ南東部	本州-九州	全域	すでに全域に広く定着	本種は輸入乾草等に混入してカリフォルニアから侵入。	他府県からの飛翔移動	1976年に愛知県で確認。1986年には全国。	体長3.0-3.3mmほど	陰域	雑木林で越冬した成虫は、春に単子葉の雑草を摂食し飛行可能となる。その後水田に移動して産卵する。孵化した幼虫はイネの根を摂食。幼虫は土中で蛹化。羽化後越冬地に移動。	水田及び畦畔雑草	5月-7月	卵生、両性生殖型と単為生殖型があるが、日本に侵入したものは単為生殖型で、雌だけで繁殖している。	草食
83	昆虫類	イラガセイボウ	<i>Chrysis shanghaiensis</i>	ハチ目セイボウ科	中国 ?	全国	下総台地、房総丘陵			大正?		体長10mm	陰域	イラガの天敵	7-9月			イラガの繭に産卵
84	昆虫類	ウスバキスイ	<i>Cyrtophagus cellaris</i>	コウチュウ目キスイムシ科	本州、九州	下総台地、内湾低地、房総丘陵						体長2.0-2.7mm	陰域					
85	昆虫類	オオコゾウムシ	<i>Hypera punctatus</i>	コウチュウ目ゾウムシ科	ヨーロッパ	本州	我孫子市、市川市江戸川河川敷、船橋市松が丘	貼り芝の移動に伴って拡散?		1978年横浜植物防疫所が初記録。		体長7.5-8.0mm	陰域					シロツメクサ・アカツメクサなどのマメ科植物
86	昆虫類	オオタバコガ	<i>Helicoverpa armigera</i>	チョウ目ヤガ科	アフリカ、ヨーロッパ、アジア、オーストラリア	全国						体長15-18mm	陰域					トマト、ナス、オクラ、シシトウ、エンドウ、レタス、キャベツ、ニンジン、ワタ、ラッカセイ等
87	昆虫類	オナジショウジョウバエ	<i>Drosophila simulans</i>	ハエ目ショウジョウバエ科	1972年以降全国	全域		果実の移動等	果実の移動等	1936年小笠原で発見。1972年以降全国的に見られる。		体長約2mm	陰域					腐敗植物食
88	昆虫類	オンシツコナジラミ	<i>Trialeurodes vaporariorum</i>	カメシ目コナジラミ科	北米ないし中南米	全国	全域	すでに全域に広く定着	苗、植物体の移動等	苗、植物体の移動等	1974年広島、福島で確認	体長1.2mm	陰域	関東以西の暖地では成虫及び卵で越冬、関東以北の施設では成虫で越冬する。休眠はなく施設内では冬季でも繁殖する。比較的低温条件を好み、4-6月と10-12月に発生が多くなる。	花きおよび野菜園圃(特に施設内)	4-6月が多に多い。温室内では年10回以上発生。露地では年6回。夏期は一時抑制。	卵生	トマト、花卉、ナス、キュウリ、インゲン
89	昆虫類	オンシツツヤコバチ	<i>Encarsia formosa</i>	ハチ目ツヤコバチ科	本州、九州	全域(但し、ハウス内)	野外は未確認	一部の施設野菜農家でオンシツツヤコバチの天敵としてオランダから導入	オンシツツヤコバチの天敵としてオランダから導入			体長0.6mm	陰域:施設内。	オンシツツヤコバチの内部寄生性。天敵として利用。	施設野菜園圃	周年		肉食性
90	昆虫類	ガイマイゴミムシダマシ	<i>Alphitobius diaperinus</i>	コウチュウ目ゴミムシダマシ科	本州以南	我孫子市、市川市、印西市木下、印旛村山田橋、音信山、富津市青木、市原市(養老溪谷-大福山)、君津市(東山林道・笹)、清澄山						体長5.5-6.0mm	陰域					穀類の粉
91	昆虫類	カキクダアザミウマ	<i>Ponticulothrips diospyrosi</i>	アザミウマ目アザミウマ科		富津市梨沢、千葉市				1975年(岡山県)		成虫は体長3ミリ、幼虫は0.5-2ミリ	陰域		果樹園			カキの新葉
92	昆虫類	カシノシマメイガ	<i>Pyralis farinalis</i>	チョウ目メイガ科		下総台地、房総丘陵						体長22-30mm	陰域	年1、2回発生、幼虫越冬	成虫は屋内			穀類、穀粉類、種子類など
93	昆虫類	カドマルカツオブシムシ	<i>Dermestes haemorrhoidalis</i>	コウチュウ目カツオブシムシ科	ヨーロッパ	本州	内湾低地、房総丘陵、房総沿岸部					体長6.2-8.2mm	陰域					干物や動物死体などによく発生する。
94	昆虫類	キイロショウジョウバエ	<i>Drosophila melanogaster</i>	ハエ目ショウジョウバエ科	全世界	全国	全域					体長約2mm	陰域	卵から成虫まで25℃で約10日		周年		腐食性
95	昆虫類	キョウチクトウアブラムシ	<i>Aphis nerii</i>	ヨコバイ目アブラムシ科		全域						体長1.7mm	陰域	キョウチクトウ、ガガイモ				
96	昆虫類	ギラファノコギリクワガタ	<i>Prosopocoilus giraffa borobudur</i>	コウチュウ目クワガタムシ科	東南アジア		2004年7月印西市の1例のみ	ベッコウ昆虫として輸入、あるいは国内の飼育下で繁殖	飼育個体の放逐と思われる。			体長60mm-120mm	陰域					
97	昆虫類	グラジオラスアザミウマ	<i>Thrips simplex</i>	アザミウマ目アザミウマ科	全国	全域	安房郡	種球根の移動	種球根の移動	1986年(茨城県、静岡県、奈良県)		体長♀1.6mm、♂1.3mm	陰域	成虫、幼虫、卵で球根の鱗片付近で越冬し、春新芽の伸長とともに地上部に移動し、食害する。	寄生植物の茎葉、花器に産卵	春-秋	卵生	グラジオラスほかカーネーション、アイリス、フリージア、ユリ、バラ小型の吸汁性昆虫で、雑食性、冬期非休眠型で増殖能力が高く、単為生殖が可能?
98	昆虫類	クリイロデオクスイ	<i>Carpophilus marginellus</i>	コウチュウ目ケンシスイ科	本州以南	利根川低地、下総台地、房総丘陵						体長2.4-3.9mm	陰域					
99	昆虫類	クリタマバチ	<i>Dryocosmus kuriphilus</i>	ハチ目タマバチ科	中国	北海道、本州、四国、九州	全域	日中戦争当時に中国河北省に駐留していた日本軍兵士が、樺木または苗木とともに持ち込んだ可能性が高いと考えられている。	種球根の移動	1941年岡山県。1946年まで岡山県内で分布を広げていたが、1947年以降、隣接する兵庫・広島・鳥取各県から、さらに本州・四国・九州全域に分布を拡大。1962年には北海道に侵入し道南各地へ広がった。	1952-1954年	体長2mmほど	陰域	幼虫は虫房を形成し越冬する。早春被害芽は異常肥大して虫えいとなり、そこで幼虫は蛹化し、初夏に羽化した虫えいを脱出、クリの芽の中に産卵。	卵は芽内に卵塊として生み付けられ、約1カ月で孵化する。	年1世代で、単為生殖によって増殖。産卵数は平均50個。	クリの虫えいをつくってその中を食べる。	

分類	和名	生態系への影響	人への被害			生態系又は人に対する影響度	防除の緊急度			対策		文献			
			農林水産業への被害	生活被害	生命身体への被害		緊急度	緊急度ランク	緊急度の情報	予防対策	すでに定着している場合の対策	全般	千葉県	写真・標本の有無(保管先)	備考
73	昆虫類	アカマダラカツオブシムシ				情報不足	C					黒澤ほか(1985)	千葉県生物学会(1999)		
74	昆虫類	アズキマメゾウムシ				B	C			輸入豆類に対する植物検疫の強化が必要		林匡夫ほか(1984)、原田(1984)			
75	昆虫類	アトグロソアリモドキ				情報不足	C					黒澤ほか(1985)	千葉県生物学会(1999)		
76	昆虫類	アトラスオオカブト	在来の生物との競合、駆逐、在来のヒラタクワガタとの交雑の可能性			情報不足	C	影響度は不明であるが、発見され次第根絶すべき。		ペット昆虫が放逐されないような普及啓蒙活動			斉藤(2005)	写真・標本ともに有り(千葉県立中央博物館)	定着の可能性は未知
77	昆虫類	アメリカジガバチ	本種との競合により在来種キゴシジガバチが絶滅の危機にある。			B	C					安松ほか(1965)	千葉県生物学会(1999)	写真: http://www.plala.or.jp/tokyo/insects/hachi-americajiiga.htm	
78	昆虫類	アメリカシロヒトリ	各種街路樹や農作物に被害	街路樹や公園の樹木、庭木などの食害	なし	B	B	根絶が困難であるが、防除などの対策を続けるべき。	薬剤防除	薬剤防除(効果は高い)		井上(1982)、五味(1997)、伊藤(1972)	千葉県生物学会(1999)		
79	昆虫類	アメリカミズアブ				情報不足	C					安松ほか(1965)	千葉県生物学会(1999)		
80	昆虫類	アルファルファクゾウムシ				C	C		薬剤防除	1988～89年に門司植物貿易所はアメリカから4種の寄生蜂を導入。現在ヨーロッパトビチビアメバチを九州各県に放飼。寄生蜂の定着は北九州と山口県の一部で確認。微生物(Metarhizium, Beauveria属菌)の利用も。遅めの播種が有効。		日本生態学会(2002)、林匡夫ほか(1984)、林川(1999)、巖本(1993)	千葉県病害虫防除所(2004)	写真(病害虫防除所)	対策としての外国産天敵の導入が新たな外来種を生む危険性がある。
81	昆虫類	イセリアカイガラムシ		柑橘類、ブルーベリー、庭園ジュに被害		C	C		薬剤防除	天敵のベダリアテントウの導入・放飼(制圧に成功)		日本生態学会(2002)、河合(1980)		写真(農業総合研究センター応用昆虫研究室)	天敵のベダリアテントウも外来種
82	昆虫類	イネミズゾウムシ				B	B	根絶が困難であるが、防除などの対策を採ること。	農産物の自給率を向上させること。	登録薬剤による防除。(適期の殺虫剤の施用で十分な効果あり。)		林匡夫ほか(1984)、日本生態学会(2002)	千葉県生物学会(1999)、千葉県農林水産部園芸農産課(2005)		
83	昆虫類	イラガセイボウ				C	C						末田(2003)	写真: http://www.city.minoh.osaka.jp/E-MACHI/sakuhin/konchu/03.html	
84	昆虫類	ウスバキスイ				情報不足	C					黒澤ほか(1985)	千葉県生物学会(1999)		
85	昆虫類	オオタコゾウムシ	在来種との競合・駆逐の可能性			C	C					林匡夫ほか(1984)、森本(1988)、堀(2003)	千葉県生物学会(1999)		
86	昆虫類	オオタバコガ				C	C			粗皮削り、がんしゅ病病斑中の虫を捕殺。がんしゅ病罹病木の除去。剪定痕の傷に塗布剤。				染谷・清水(1997)、染谷・清水(1998)	
87	昆虫類	オナジショウジョウバエ	交配による遺伝子擾乱	特になし	なし	情報不足	C			なし		Watabeほか(1980)		写真・標本(農業総合研究センター応用昆虫研究室)	
88	昆虫類	オンシツコナジラミ				B	B	根絶が困難であるが、防除などの対策を続けるべき。	殺虫剤への耐性も強い?成虫の侵入防止対策としては、紫外線カットフィルム或利用や開口部を遮光資材でふさぐ。	・捕虫テープによる成虫の誘引・捕殺。 ・天敵昆虫や天敵微生物の利用。(オンシツツヤコバチ) ・登録薬剤による防除。トマト、ナス、キュウリ:スプラサイド、アブロード、アデイオン(高密度での防除は困難。発生初期の処置が重要) ・近紫外線除去フィルムの使用。		日本生態学会(2002)	写真(病害虫防除所)、被害写真(農業総合研究センター)		
89	昆虫類	オンシツツヤコバチ				情報不足	C							写真: http://www.greenjapan.co.jp/b_ojo_tsuyako.htm	
90	昆虫類	ガイマイゴミムシダマシ				C	C			工場、倉庫の清掃をよくし、こぼれた粉粒などをそのまま放置しない。		黒澤ほか(1985)	千葉県生物学会(1999)		
91	昆虫類	カキクダアザミウマ		カキの果実及び葉に被害	なし	C	C		薬剤防除	薬剤防除(効果あり)			千葉県生物学会(1999)	写真: http://www.afr.pref.osaka.jp/zukan/165.htm	
92	昆虫類	カシノシマメイガ				C	C					井上ほか(1982)	千葉県生物学会(1999)		
93	昆虫類	カドマルカツオブシムシ				C	C					黒澤ほか(1985)	千葉県生物学会(1999)		
94	昆虫類	キイロショウジョウバエ				情報不足	C							写真: http://contents.kids.yahoo.co.jp/zukan/insects/card/0228.html	野外での生態に関してはまだ知られていない部分が多い。
95	昆虫類	キョウチクトウアブラムシ				C	C					森津(1983)	千葉県生物学会(1999)		
96	昆虫類	ギラファノコギリクワガタ	在来の生物との競合、駆逐、在来のヒラタクワガタとの交雑の可能性			情報不足	C	影響度は不明であるが、発見され次第根絶すべき。		ペット昆虫が放逐されないような普及啓蒙活動			清水(2004)	写真・標本ともに有り(千葉県立中央博物館)	定着の可能性は未知
97	昆虫類	グラジオラスアザミウマ		花き類に被害	なし	C	C			殺虫剤への耐性も強い?オルトラン水和剤に浸漬		日本生態学会(2002)		無	
98	昆虫類	クリイロデオキスイ	競合・駆逐の可能性			情報不足	C					黒澤ほか(1985)	千葉県生物学会(1999)		
99	昆虫類	クリタマバチ	コナラ属寄生タマバチ類を攻撃していた寄生蜂が、新たな寄生蜂の増加により影響を受けた可能性がある。	クリに被害	なし	情報不足	C		薬剤防除	薬剤防除(効果不明)		日本生態学会(2002)	千葉県生物学会(1999)		

千葉県の外来種整理表(全)

分類	和名	学名	分類群	土着生息地(原産地)	分布・生息情報			移入経路		移入年代		体重等	生息環境	生活史	繁殖			食性			
					日本での分布状況	千葉県での分布状況	千葉県での生息状況	移入経路: 日本	移入経路: 千葉県	移入年代: 日本	移入年代: 千葉県				繁殖場所	時期	繁殖形態				
100	昆虫類	クリアルケシクスイ	<i>Carpophilus hemipterus</i>	コウチュウ目ケシクスイ科		鹿児島以北	内湾低地, 房総丘陵					体長2.4-4.0mm	陰域					貯蔵食品			
101	昆虫類	クロイワツクツク	<i>Meimna kuroiwa</i>	ヨコバイ亜目セミ科		鹿児島大隈半島、種子島、鹿久島、奄美大島、喜界島、沖縄本島	白浜町	わずかずつ生息域を拡大中	喜界島より移入したサルズベリに付着	サルズベリとソテツの移植に伴う移入	1972, 1973年	体長雄23-37、雌25-34mm、全長37-52mm	陰域								
102	昆虫類	クロチビエンマムシ	<i>Carcinops pumilio</i>	コウチュウ目エンマムシ科		全国	九十九里平野(海岸性昆虫)					体長2.2-2.7mm	陰域								
103	昆虫類	クロテンオオメシ	<i>Opogona sacchari</i>	チョウ目ヒロズコガ科	アフリカ, 中南米, ヨーロッパ	本州以南	千葉県君津郡内の観葉植物栽培農家数件で発生	観葉植物栽培施設の周辺においても越冬定着の可能性	輸入観葉植物または培養土、家畜飼料	輸入観葉植物	1986年(植物検疫)	1989年	体長(開張)♀23mm、♂20mm	陰域	不明		不明	卵生	草食		
104	昆虫類	クロトンアザミウマ	<i>Heliothrips haemorrhoidalis</i>	アザミウマ目アザミウマ科		関東以南	全域	すでに全域に広く定着	小笠原で1937年に記録(1950 Monzen)。			体長♀1.3-1.7mm	陰域				卵生(単為生殖)	草食			
105	昆虫類	ケチビコフキゾウムシ	<i>Sitona hispidulus</i>	コウチュウ目ゾウムシ科	ヨーロッパ		我孫子市, 市川市江戸川河川敷, 佐倉市, 栄町須賀新田, 船山市見物						陰域: 芝地・牧草地などの草原環境					シロツメクサなどのマメ科雑			
106	昆虫類	ケバクシバンムシ	<i>Nicobium hirtum</i>	コウチュウ目シバンムシ科		本州, 四国, 九州	下総台地, 内湾低地, 房総丘陵					体長3.7-6.0mm	陰域					マツ、ヒノキ、クス、その他			
107	昆虫類	コクゾウムシ	<i>Sitophilus oryzae</i>	コウチュウ目オサゾウムシ科	熱帯?	全国	利根川低地, 下総台地, 房総丘陵		米の移動に付随?			体長2.0-2.8mm	陰域: 貯蔵穀物のある室内 高温を好む。					コメ、コムギなどの穀類			
108	昆虫類	コナナガシクイ	<i>Rhizopertha dominica</i>	コウチュウ目ナガシクイムシ科		本州, 四国, 九州, 種子島	房総丘陵				明治期に記載(佐々木, 1900)。	体長2.1-3.0mm	陰域					穀類、穀粉類			
109	昆虫類	コメノゴミミシ	<i>Tenebrio obscurus</i>	コウチュウ目ゴミミシ科		四国以外	下総台地, 内湾低地, 房総丘陵					体長14.0-18.0mm	陰域					穀類			
110	昆虫類	コルリアトキリゴミムシ	<i>Lebia viridis</i>	コウチュウ目オサムシ科	北米	関東地区全都県, 長野県, 静岡県	利根川低地, 内湾低地, 下総台地		家畜飼料の乾草への随伴?		1989に千葉県佐倉市から初めて報告(中根, 1989)。	1989に千葉県佐倉市から初めて報告(中根, 1989)。	陰域: オープンランド環境					ハムシ類の幼虫に寄生 タゲ類の葉上にカミナリムシ類と共にいることが多いと多く、その幼虫を捕食しているものと思われる。またセイタカアワダチソウの花にも来る。			
111	昆虫類	サツマゴキブリ	<i>Opisthoplatia orientalis</i>	ゴキブリ目マダラゴキブリ科		四国足摺岬, 九州南部, 伊豆八丈島, 小笠原諸島, 南西諸島	房総丘陵	定着は不明				体長♂25mm♀30-35mm	陰域	幼虫で越冬し6月頃成虫となる。			朽ち木の隙間に数頭ひそむ。幼虫は水中を好む。	卵胎生			
112	昆虫類	サビカクムネチビヒゲタムシ	<i>Cryptolestes ferrugineus</i>	コウチュウ目ヒラタムシ科		全国	房総丘陵					体長1.5-2.2mm	陰域								
113	昆虫類	シバオサゾウムシ	<i>Sphenophorus venatus</i>	コウチュウ目オサゾウムシ科	北米	本州, 九州, 琉球	利根川低地, 下総台地 我孫子市, 市川市, 船橋市	ゴルフ場で被害が発生する。	アメリカからのティフトンシバの輸入	市川市本行徳の河川敷の1個体が最初の記録	1980年2月沖縄県のゴルフ場のノシバで最初に発見	体長7.9-9.3mm	陰域	年1回発生 幼虫、成虫態で越冬、幼虫は4-5月ごろ活動し、6月蛹化、7月羽化。			シバ類の茎葉、根部	産卵5月	卵生	成虫は芝のやわらかい葉 幼虫は地中で根や地下茎	
114	昆虫類	シバツトガ	<i>Parapediasia teterrella</i>	チョウ目メイガ科		本州以南 本州, 四国, 九州, 対馬, 沖縄	全域	ゴルフ場で被害が発生する。	ティフトン芝に付随	シバの移動	1964年兵庫県でアメリカジョージア州から	体長 成虫開張19-21mm	陰域	年3回発生				シバ類の茎葉、根部	5-10月	卵生	草食
115	昆虫類	シバンムシアリガタムシ	<i>Lasioderma serricorne</i>	コウチュウ目シバンムシ科		全国	全域					体長1.7-3.1mm	陰域					貯蔵穀物や穀粉およびパン、ビスケットなどの菓子類、墨、ワラなどの乾燥植物質。			
116	昆虫類	シルバリーフコナジラミ	<i>Bemisia argentifolii</i>	カメムシ目コナジラミ科	北米	全国	全域(ここ数年以内での発生が確認されていないが、近県でトマト黄化葉巻病(TVLCV)の発生が拡大してきており、媒介虫として、注意が必要である。)	すでに全域に広く定着	ポインセチアに寄生し分布地域を拡大したと推定されている。		1989年に確認された。	1988年	体長2mm	陰域	施設園芸において全国的に発生しているが、オンシツコナジラミと比較して低温に弱く、露地越冬は不可能。			ナス科、ウリ科、マメ科諸物ほか多数	通年	卵生	ポインセチア、トマト、カボチャ、イチゴ、ダイズなど、小型の吸汁性昆虫で、雑食性。
117	昆虫類	シロイチモンジトウ	<i>Spodoptera exigua</i>	チョウ目ヤガ科		全国 北海道, 本州, 四国, 九州, 沖縄対馬, 沖縄、宮古島, 石垣島, 西表島, 南大東島	全域				1980年1月沖縄県のゴルフ場のノシバで最初に発見	体長10-15mm	陰域	成虫は長距離移動可能。幼虫は耐寒性あり。					花卉、ネギなど広範囲。		
118	昆虫類	シロオビカクコムシ	<i>Tarsostenus unvittatus</i>	コウチュウ目カクコムシ科		本州-奄美	内湾低地, 下総台地, 房総丘陵					体長4.0-5.0mm	陰域					捕食性で、ヒラタキクイムシなどの食材昆虫を捕食			
119	昆虫類	シロオビマルカツオブシムシ	<i>Anthrenus nipponensis</i>	コウチュウ目カツオブシムシ科		本州-九州	房総丘陵					体長2.3-4.1mm	陰域					雑食、花など			
120	昆虫類	ジンサンシバンムシ	<i>Stegobium paniceum</i>	コウチュウ目シバンムシ科		全国	利根川低地, 下総台地, 内湾低地				大正期-昭和初期に定着。	体長1.7-3.0mm	陰域					多くの乾燥動・植物質を食害する。とりわけ漢方生薬、園芸用油かすなどの肥料、多くの乾燥動・植物質を食害する。とりわけ漢方生薬、園芸用油かすなどの肥料。	年2-3回		
121	昆虫類	ジンチョウゲヒゲナガアブラムシ	<i>Acyrtosiphon argus</i>	アブラムシ目アブラムシ科		全国	鎌ヶ谷市, 市川市, 市原市				1989年につくば市で発見された。		陰域								
122	昆虫類	スジマダラメイガ	<i>Ephesia cautella</i>	チョウ目メイガ科	熱帯-亜熱帯		下総台地, 房総丘陵		穀物の移動		大正期-昭和初期に定着。	開帳8-18mm	陰域	年3-4回発生。幼虫 越冬倉庫内				米、麦、マメなど。特に粉状になった状態で多く発生。			
123	昆虫類	セイタカアワダチソウヒゲナガアブラムシ	<i>Uroleucon nigrotuberculatum</i>	アブラムシ目アブラムシ科		本州以南	全域					無翅型の体長4mm程度	陰域					セイタカアワダチソウの師管液を吸汁			
124	昆虫類	セイヨウオオマルハチバチ	<i>Bombus terrestris</i>	ハチ目ミツバチ科	ヨーロッパ	1996年秋に北海道日高地方門別町で自然果が発見。2001年には静岡県で記録。	下総台地, 房総丘陵	営巣は確認されていない。	温室トマトの受粉昆虫として1992年頃からベルギーやオランダから輸入されている。				陰域					土中で営巣して大きなコロニーを作る。新女王が越冬雑草(トマト)	植物の花粉や蜜など		
125	昆虫類	セイヨウミツバチ	<i>Apis mellifera</i> ssp.	ハチ目ミツバチ科	ヨーロッパ	全国	全域	ナシやイチゴの受粉用に利用	養蜂用に導入された。		1876年		陰域					施設野菜(イチゴ)	雑食性(花粉、蜜)		
126	昆虫類	ソラマメゾウムシ	<i>Bruchus rufimanus</i>	コウチュウ目マメゾウムシ科	地中海沿岸	本州以南	全域				1926年熊本県のソラマメ畑で初記録	体長4.4-5.0mm	陰域	ソラマメのさやが3cmくらいになると、その表面に1個づつ産卵し、幼虫はマメに入り7月下旬から10月上旬に成虫となる。越冬した成虫は3月下旬頃から活動を始め、花粉や、蜜を食べる。				5月上旬		ソラマメ	
127	昆虫類	タケノホソクロバ	<i>Artona martini</i>	チョウ目マダラガ科		全国	市川市, 千葉県花園町				小笠原で1937年に記録(1950 Monzen)。		陰域	暖地で2-3回。				タケノコ			
128	昆虫類	タバココナジラミ	<i>Bemisia tabaci</i>	カメムシ目コナジラミ科		全国	全域						陰域					捕食性			

分類	和名	生態系への影響	人への被害			生態系又は人に対する影響度	防除の緊急度			対策		文献			備考							
			農林水産業への被害	生活被害	生命身体への被害		緊急度	緊急度ランク	緊急度の情報	予防対策	すでに定着している場合の対策	全般	千葉県	写真・標本の有無(保管先)								
100	昆虫類	クリヤクシキスイ					C	C					黒澤ほか(1985)	千葉県生物学会(1999)								
101	昆虫類	クロイワツクツク					情報不足	C								国内移入						
102	昆虫類	クロチビエンナムシ					情報不足	C					上野ほか(1985)	千葉県生物学会(1999)								
103	昆虫類	クロテンオオメシ					なし	なし					成・幼虫の捕殺及び寄生植物の隔離 防虫ネット等による被害拡大防止 (根本的な防除になっていないため、徐々に被害が拡大している。冬期でも加温施設内で活動し、定着していると思われる。)	吉松ほか(2004)	写真・標本(千葉県農業総合研究センター産地園芸研究所 環境研究室(三平))							
104	昆虫類	クロトンアザミウマ					イチゴ、ヤマモモに被害	なし					薬剤防除	なし	日本生態学会(2002)	千葉県生物学会(1999)	写真: http://www.pref.saitama.lg.jp/A06/BAQ21/enkann/photo/kurotou2.jpg					
105	昆虫類	ケチビコフキゾウムシ	競合・駆逐の可能性											森本(1988)	千葉県生物学会(1999)							
106	昆虫類	ケブカシバンムシ												黒澤ほか(1985)	千葉県生物学会(1999)							
107	昆虫類	コクゾウムシ					コメ、コムギなどの穀類を食害						穀物貯蔵施設を低温に保つと、発生をおさえることが可能	梶谷・岡田(2003)、日本生態学会(2002)、林匡夫ほか(1984)、原田(1984)	千葉県生物学会(1999)							
108	昆虫類	コナナガシクイ					穀類、穀粉類を食害							黒澤ほか(1985)、日本生態学会(2002)	千葉県生物学会(1999)	写真: http://www.eiken.city.nagoya.jp/insect/c_bostry/rd.htm						
109	昆虫類	コメノゴミシダマシ	競合・駆逐の可能性				穀類を食害							黒澤ほか(1985)、林(1984)	千葉県生物学会(1999)							
110	昆虫類	コルリアトキゴミシ	上位捕食者としての影響 競合・駆逐の可能性											中根(1989)、松本(1997)	千葉県生物学会(1999)							
111	昆虫類	サツマゴキブリ												安松ほか(1965)	倉西・倉西(2003)		国内移入					
112	昆虫類	サビカクムネチビヒラタムシ												黒澤ほか(1985)	千葉県生物学会(1999)							
113	昆虫類	シバオサゾウムシ					シバに被害	なし						薬剤防除	薬剤防除(効果あり)	林匡夫ほか(1984)	千葉県生物学会(1999)					
114	昆虫類	シバツトガ					シバに被害	なし						薬剤防除	パテルス・チューリンゲンシス(BT)は自然界に広く分布している天敵細菌 薬剤防除(効果高い)	井上ほか(1982)		写真: http://www.rikengreen.co.jp/nousi-kenkyuu/gaichu/sibatutoga.htm				
115	昆虫類	シバンムシアリガタムシ					家屋内で発生することがある。	本種に寄生するシバンムシアリガタバチに刺される恐れがある。							黒澤ほか(1985)	山崎・宮内(2003)	写真: http://www.sacts.co.jp/summer2.htm	シバンムシアリガタバチも外来種であるが千葉県では正式な記録がない。				
116	昆虫類	シルバリーフコナジラミ	本種の媒介によりトマト黄化萎縮ウイルス(TYLCV)が九州・東海の一部地域にまん延しつつある。				なし	なし					防除対策として、有効な殺虫剤、防虫ネット、幼若ホルモン誘引剤を散布した被覆シート、天敵等の防除素材が開発、利用されている。	成虫の侵入防止対策としては、紫外線カットフィルムの利用や開口部を遮光資材でふさぐ。捕虫テープによる成虫の誘引・捕殺。天敵昆虫や天敵微生物の利用。登録薬剤による防除。	日本生態学会(2002)、河名ほか(1990)、河名・福田(1992)	写真(病害虫防除所) http://www.jpnn.ne.jp/kagoshi/ma/	タバココナジラミとの区別は困難					
117	昆虫類	シロイチモンジトウ					ネギの葉への食入、	なし						薬剤防除	薬剤による防除:3齢になると耐性が高い。孵化直後は効果あり。フェロモンによる防除:交信かく乱剤(商品名:ヨトウコン-S)が市販。5ha以上が必要。(やや難あり)誘殺灯を併用する。	井上ほか(1982)		無				
118	昆虫類	シロオビカクムシ												情報不足	C			写真: http://www.eiken.city.nagoya.jp/insect/c_clerid/index2.htm				
119	昆虫類	シロオビマルカツオブシムシ												情報不足	C			写真: http://www.geocities.jp/kidoban298/yy-kontyuu/kouchuumoku/html/shiroobimarukatsuo.htm				
120	昆虫類	ジンサンシバンムシ						シバンムシアリガタバチ(刺傷被害を起こす)が寄生する。							C	C		写真: http://www.eiken.city.nagoya.jp/insect/c_anobii/sp.htm				
121	昆虫類	ジンチョウゲヒゲナガアブラムシ												情報不足	C			日本生態学会(2002)	千葉県生物学会(1999)			
122	昆虫類	スジマダラメイガ													C	C		日本生態学会(2002)、井上ほか(1982)	千葉県生物学会(1999)			
123	昆虫類	セイトカアワダチソウヒゲナガアブラムシ												情報不足	C			日本生態学会(2002)、井上ほか(1982)	千葉県生物学会(1999)	写真: http://www.insects.jp/kon-aburaseitakawadati.htm		
124	昆虫類	セイヨウオオマルハナバチ	植生などへの影響、在来近縁種と競合・駆逐の可能性、交雑による遺伝的擾乱。北海道日高地方では広範な野生植物・栽培植物を利用し、盗蜜を高頻度で行う。				なし	なし							A	A	現状では千葉県では定着が確認されていないが、影響が大きいため、野外で確認された場合はすぐに排除するとともに、逸出防止策を取り続けるべき。	逸出防除ネットの展張、使用済み巣箱の適正処理の普及を図る。	日本生態学会(2002)、鷲谷ほか(1997)	須田(1999)、信太(2000)	写真: http://bluelist.hokkaido-ies.go.jp/	
125	昆虫類	セイヨウミツバチ	ニホンミツバチと巣が接近しているとニホンミツバチの巣を攻撃し全滅させる。				なし	なし							C	C		日本生態学会(2002)	千葉県生物学会(1999)			
126	昆虫類	ソラマメゾウムシ													C	C		日本生態学会(2002)、林匡夫ほか(1984)	千葉県生物学会(1999)			
127	昆虫類	タケノホソクロバ													C	C		日本生態学会(2002)、井上ほか(1982)	千葉県生物学会(1999)	写真: http://www.eiken.city.nagoya.jp/insect/L_zygaen/bf.htm		
128	昆虫類	タバココナジラミ					なし	なし							B	B	根絶が困難であるが、防除などの対策を取り続けるべき。	薬剤防除	薬剤防除		無	シルバリーフコナジラミとの区別は困難

千葉県の外來種整理表(全)

分 類	和 名	学 名	分 類 群	土着生息地(原産地)	分布・生息情報			移 入 経 路		移 入 年 代		体重等	生息環境	生 活 史	繁 殖					
					日本での分布状況	千葉県での分布状況	千葉県での生息状況	移入経路：日本	移入経路：千葉県	移入年代：日本	移入年代：千葉県				繁殖場所	時期	繁殖形態	食 性		
129 昆虫類	チャイロコキノコムシ	<i>Typhaea stercorea</i>	コウチュウ目コキノコムシ科		本州, 沖縄	利根川低地, 下総台地, 房総丘陵						体長2.0-2.5mm	陰域：山間部, 林							
130 昆虫類	チャイロコメノゴミムシ	<i>Tenebrio molitor</i>	コウチュウ目ゴミムシ科	ヨーロッパ	本州	内湾低地, 房総沿岸部						体長11.0-15.0mm	陰域	幼虫がミルワーム。「小動物の餌」として利用。						
131 昆虫類	チャゴマフカミキリ	<i>Mesosa perplexa</i>	コウチュウ目カミキリムシ科		本州(兵庫県以西)、四国, 九州, 対馬	館山市	恐らく同定間違い						陰域							
132 昆虫類	チュウゴクオナガコバチ	<i>Torymus sinensis</i>	ハチ目オナガコバチ科	中国河南省		茨城県では放飼後3年後、熊本県では放飼後17年後に定着したと思われる。	全域	クリタマバチの防除を目的に寄生蜂である本種が導入放飼された。	つくばで放虫した個体が、千葉県にも拡がり、定着。	1979年と1981年に導入			陰域	クリ園			昆虫寄生性			
133 昆虫類	チュウリップネアブラムシ	<i>Dysaphis tulipae</i>	アブラムシ目アブラムシ科			安房							陰域							
134 昆虫類	ツヅリガ	<i>Paralipsa gularis</i>	チョウ目メイガ科		全国	下総台地							陰域	成虫は屋内			貯穀			
135 昆虫類	ツマグロカミキリモドキ	<i>Necerdes melanula</i>	コウチュウ目カミキリモドキ科		全国	内湾低地, 房総沿岸部							体長9.0-12.0mm	陰域：海岸付近、特に都会。貯木場。時として大発生。		成虫は5-6月		湿った材木を好んで食べる		
136 昆虫類	テツイロヒメカミキリ	<i>Ceresium sinicum</i>	コウチュウ目カミキリムシ科	台湾、中国、タイ	関東以西の本州、九州	内湾低地, 下総台地	住宅街に限定的に生息						体長9.5-15.5mm	陰域：大都市周辺にふつう		成虫は5-7月		ケヤキ、アカメガシワ、ソメイヨシノ、イチヨウなど		
137 昆虫類	トグムネデオネスイ	<i>Monotoma spinicollis</i>	コウチュウ目ネスイムシ科		四国	安房郡船南町浮島							陰域							
138 昆虫類	トビカツオブシムシ	<i>Dermeestes ater</i>	コウチュウ目カツオブシムシ科		全国	房総丘陵, 房総沿岸部							体長6.2-8.8mm	陰域				食品ばかりでなく衣服、とくに毛織物を加害する。動物の骨格標本を作るのに利用。		
139 昆虫類	トマトメハモグリバエ	<i>Liriomyza sativae</i>	ハモグリバエ科	北米南部-南米		2002年2月現在21都府県で確認された。	全域	すでに全域に広く定着	苗の輸入	苗の移動	1999年京都府のトマトで発見	2000年	体長2mm	陰域	成虫の飛翔能力が高く、発生源から広範な分散によって分布が拡大したと考えられる。	ウリ科野菜ほか	通年	卵生	草食	
140 昆虫類	ナガヒョウホムシ	<i>Ptinus japonicus</i>	コウチュウ目ヒョウホムシ科			下総台地, 内湾低地							体長2.7-5.0mm	陰域				衣類、玄米や飼料等の穀物破片を食する。		
141 昆虫類	ナシアザミウマ	<i>Taeniothrips inoconsequens</i>	アザミウマ目アザミウマ科			清澄山							陰域							
142 昆虫類	ナシヒメシンクイ	<i>Grapholita molesta</i>	チョウ目ハマキガ科	中国大陸	全国	全域	全域、県内の多くのナシ園で発生が多く、重要害虫になっている。	苗木の輸入	苗木の移動 成虫の飛翔拡大	1905年			開帳10-13mm	陰域	年間2-6回発生	ナシ、リンゴほか落葉果樹、クリ、カンキツ、チャなどの新梢	春-秋	卵生	バラ科, ナシ, ビワ, リンゴ, モモなど	
143 昆虫類	ネギアザミウマ	<i>Thrips tabaci</i>	アザミウマ目アザミウマ科		北海道、本州、四国、九州、沖縄本島、久米島、宮古島、石垣島、西表島	全域	多くの露地野菜や花で問題になっている。						体長1mm	陰域					植食性	
144 昆虫類	ノシメダラメイガ	<i>Plodia interpunctella</i>	チョウ目メイガ科			下総台地							開帳11-18mm	陰域：屋内で普通に見られる方で、台所で発生する害虫の大半はこの種である。			発生は適温は25℃前後で、最適な条件下では約40日で成虫になる。			米、クルミ、豆、乾果、菓子、穀類、穀粉やその製品、チョコレート、菓子、ペット飼料などから発生する。
145 昆虫類	バクガ	<i>Sitotroga cerealella</i>	チョウ目キバガ科			下総台地, 房総丘陵							開帳13-17mm	陰域：			北海道で年2回、暖地で年4-5回			麦類, 米, トウモロコシなど
146 昆虫類	ハナアザミウマ	<i>Thrips hawaiiensis</i>	アザミウマ目アザミウマ科		北海道、本州、四国、九州、沖縄本島、宮古島、石垣島	全域							体長0.9-1.6mm	陰域					植食性	
147 昆虫類	ハラジロカツオブシムシ	<i>Dermeestes maculatus</i>	コウチュウ目カツオブシムシ科		全国	房総丘陵, 房総沿岸部							体長5.5-9.5mm	陰域					干物, 飼料, 動物死体など	
148 昆虫類	バラワンオオヒラタクラウガタ	<i>Dorcus titanus palawanicus</i>	コウチュウ目クラウガタムシ科	フィリピン		2004年9月大多喜町の1例のみ	飼育個体の放逐と思われる。	バット昆虫として輸入、あるいは国内の飼育下で繁殖	飼育個体の放逐と思われる。				体長50mm-110mm	陰域						
149 昆虫類	ヒメカツオブシムシ	<i>Attageus japonicus</i>	コウチュウ目カツオブシムシ科		本州-九州	利根川低地, 内湾低地, 下総台地, 房総丘陵							体長3.2-4.8mm	陰域					干物, 毛皮, 毛製品, 絹, 動物標本, 飼料など	
150 昆虫類	ヒメフタゴソヒラタムシ	<i>Silvans lawisi</i>	コウチュウ目ホソヒラタムシ科		本州-九州	下総台地, 内湾低地, 九十九里平野, 房総丘陵							体長2.1-2.5mm	陰域					穀類の粉	
151 昆虫類	ヒロヘリアオイラガ	<i>Parasa lepida</i>	チョウ目イラガ科	中国、インド、セイロンなど	本州, 九州, 沖縄	下総台地, 房総丘陵							1989年に千葉県で初記録	陰域	幼虫は6月下旬-8月中旬, 9月中旬-11月。蛹で越冬。		幼虫は6月下旬-8月中旬, 9月中旬-11月。蛹で越冬。			カキ, ナンキンハゼ, モミジバフウ, サクラほか
152 昆虫類	フタオビツヤゴミムシ	<i>Alphitophagus bifasciatus</i>	コウチュウ目ゴミムシ科		本州-九州	下総台地							体長2.3-3.0mm	陰域：製粉工場の床面の麦質粉の中に多い。						
153 昆虫類	フタクサハムシ	<i>Ophraella communa</i>	コウチュウ目ハムシ科	北米	本州, 四国, 九州	利根川低地, 下総台地, 内湾低地, 九十九里平野, 房総丘陵		干草の輸入に混入	干草の輸入に混入	1995年までは未確認	1996年千葉県で発見		陰域	成虫越冬、1年に数回発生、卵数20-50個、幼虫期間20-25日	食草の葉の裏	春-秋			フタクサ, オオフタクサ, オオオナモミ等、ヒマワリ	
154 昆虫類	フタトゴソヒラタムシ	<i>Silvans bidentatus</i>	コウチュウ目ホソヒラタムシ科		全国	我孫子市, 清澄山							体長2.5-3.5mm	陰域					食品類から見つかると、食品以外にもカビなどの生えたところが発生源となっている可能性がある。	
155 昆虫類	ブラタナスグンバイ	<i>Corytucha ciliata</i>	セミ目グンバイムシ科			市川市							体長3.5mm	陰域					ブラタナス	
156 昆虫類	ベダリアテントウ	<i>Rodolia cardinalis</i>	コウチュウ目テントウムシ科	オーストラリア	全国	利根川低地, 下総台地, 内湾低地, 九十九里平野, 房総丘陵		外来種イセリアアイガラムシの天敵として、静岡県に導入。					体長3.3-3.8mm	陰域						
157 昆虫類	ホソヒメマキムシ	<i>Dienerella filum</i>	コウチュウ目ヒメマキムシ科		本州	下総台地, 内湾低地, 九十九里平野							体長1.2-1.6mm	陰域						
158 昆虫類	マデイラコナカイガラムシ	<i>Phenacoccus madeirensis</i>	カメムシ目コナカイガラムシ科	中南米	高知県	千葉県鴨川市のキク栽培農家1件にて発生			苗の移動		1987年(小笠原、南西諸島)	2004年	体長 ♀4-5mm	陰域	年数回発生	果樹類、灌木類、草本植物の葉上	通年	卵生	草食	
159 昆虫類	マメハモグリバエ	<i>Liriomyza trifolii</i>	ハエ目ハモグリバエ科	北アメリカ	全国	印旛管内全域	施設トマトで周年発生	1994年小笠原で初記録。			1996年		体長2mm	陰域						
160 昆虫類	ミカンキイロアザミウマ	<i>Frankliniella occidentalis</i>	アザミウマ目アザミウマ科	北米	全国	全域		花き類の輸入	花き類の輸入 成虫の移動分散	1990年	1990年		体長1.5-1.7mm	陰域	露地では蛹で越冬が可能		4-9月に5回発生		花卉, イチゴ・キュウリ・ナス・トマト	

分類	和名	生態系への影響	人への被害			生態系又は人に対する影響度	防除の緊急度			対 策		文 献			備考
			農林水産業への被害	生活被害	生命身体への被害		緊急度	緊急度ランク	緊急度の情報	予防対策	すでに定着している場合の対策	全般	千葉県	写真・標本の有無 (保管先)	
129	昆虫類	チャイロコキノコムシ					情報不足	C				黒澤ほか(1985)	千葉県生物学会 (1999)		
130	昆虫類	チャイロコメノゴミムシダマシ					情報不足	C				黒澤ほか(1985)	千葉県生物学会 (1999)	写真： http://ugawalab.miyako-u.ac.jp/zukan/card/COL231.html	
131	昆虫類	チャゴマフカミキリ					情報不足	C					千葉県生物学会 (1999)	写真： http://www.g-hopper.ne.jp/free/fukuda/photo_zukan/kochu/pz_chagomafukamikiri-01.htm	同定間違いの可能性大
132	昆虫類	チュウゴクオナゴロバチ	なし		なし		情報不足	C				日本生態学会 (2002)		写真： http://www.museum.kyushu-u.ac.jp/INSECT/08/08-3.html	
133	昆虫類	チュウリップネアブラムシ					情報不足	C					千葉県生物学会 (1999)		
134	昆虫類	ツツリガ					情報不足	C				井上ほか (1982)	千葉県生物学会 (1999)		
135	昆虫類	ツマグロカミキリモドキ			体液にカンタリジンという有毒物質を持っていて、それが人間の皮膚につくと水ぶくれを引き起こす衛生害虫。		C	C				黒澤ほか(1985)	千葉県生物学会 (1999)	写真： http://www.mus-nh.city.osaka.jp/shiyake/heitaimushi.html	
136	昆虫類	テツイロヒメカミキリ					情報不足	C				林匡夫ほか(1984)	千葉県生物学会 (1999)	写真： http://www.k3.dion.ne.jp/~kamikiri/tetuirohime.html	
137	昆虫類	トグムネデオネスイ					情報不足	C				黒澤ほか(1985)	千葉県生物学会 (1999)		
138	昆虫類	トビカツオブシムシ		家屋内で発生し毛織物を食害			C	C				黒澤ほか(1985)	千葉県生物学会 (1999)	写真： http://www.mus-nh.city.osaka.jp/tour/view.cgi?page=1&corner=2&file=155	
139	昆虫類	トマトマメハモグリバエ	ウリ科作物に被害	なし	なし		B	B	根絶が困難であるが、防除などの対策を続けるべき。	各種薬剤抵抗性が発達。比較的低温に強く、冬期にハウスの被覆を外して寒気にさらすことにより根絶の可能性。寄生蜂による防除が普及しつつある。	薬剤防除 (効果あり)	日本生態学会 (2002)	千葉県病害虫防除所(2001)	無	
140	昆虫類	ナガヒョウホンムシ		家屋内で発生し毛織物などを食害			C	C				黒澤ほか(1985)	千葉県生物学会 (1999)	写真： http://www.eiken.city.nagoya.jp/insect/c_ptinid/pi.htm	
141	昆虫類	ナシアザミウマ					C	C					千葉県生物学会 (1999)		
142	昆虫類	ナシヒメシシクイ	ナシ等バラ科果樹を加害する。被害は、幼虫の果実への食入被害によるもの。また新梢に食入し芯折れを伴うことによる。	なし	なし		C	B	根絶が困難であるが、防除などの対策を続けるべき。	薬剤防除	粗皮削り等により、越冬量を減少させる。被害結果枝の除去。登録薬剤による防除。性フェロモン剤による防除法が普及してきている。(効果は高い)	川辺(1982)、一色(1969)	内野(2001)	写真： http://www.jpmoth.org/Tortricidae/Olethreutinae/Grapholita_molesta.html 被害写真 (農業総合研究センター応用昆虫研究室)	
143	昆虫類	ネギアザミウマ	各種作物に被害	なし	なし		C	B	根絶が困難であるが、防除などの対策を続けるべき。	薬剤防除	薬剤防除 (効果やや低い)	日本生態学会 (2002)	千葉県生物学会 (1999)	写真： http://www.pref.saitama.lg.jp/A06/BQ21/enkann/photo/negiaabural.jpg	ウイルス媒介
144	昆虫類	ノシメダラメイガ		家屋内で発生			C	C				井上ほか (1982)	千葉県生物学会 (1999)	写真： http://www.eiken.city.nagoya.jp/insect/lepidopt/pi.htm	
145	昆虫類	バクガ					C	C				日本生態学会 (2002)、井上ほか(1982)	千葉県生物学会 (1999)		
146	昆虫類	ハナアザミウマ	花き、野菜類に被害	なし	なし		C	C		薬剤防除 (効果やや低い)	薬剤防除 (効果あり)		千葉県生物学会 (1999)		
147	昆虫類	ハラジロカツオブシムシ					C	C				黒澤ほか(1985)	千葉県生物学会 (1999)	写真： http://www.eiken.city.nagoya.jp/insect/c_dermes/dm.htm	
148	昆虫類	バラワンオオヒラタクワガタ	在来生物との競合、駆逐、在来のヒラタクワガタとの交雑の可能性				情報不足	C	影響度は不明であるが、発見され次第根絶すべき。	ペット昆虫が放逐されないような普及啓発活動		斉藤(2004)、日本生態学会(2002)	斉藤(2004)	写真・標本ともに有り (千葉県立中央博物館)	定着の可能性は未知
149	昆虫類	ヒメカツオブシムシ					C	C				黒澤ほか(1985)	千葉県生物学会 (1999)	写真： http://www.eiken.city.nagoya.jp/insect/c_dermes/	
150	昆虫類	ヒメフタトゲホソヒラタムシ					C	C				黒澤ほか(1985)	千葉県生物学会 (1999)		
151	昆虫類	ヒロヘリアオイラガ			触れると痛い		C	C				井上ほか (1982)	千葉県生物学会 (1999)	写真： http://aoki2.si.gunma-u.ac.jp/youtyuu/HTMLs/hiroheri-aoiraga.html	
152	昆虫類	フタオビツヤゴミムシダマシ					C	C		工場、倉庫の清掃		黒澤ほか(1985)	千葉県生物学会 (1999)	写真： http://www.nfri.affrc.go.jp/yakudachi/gaichu/zukan/3.html	
153	昆虫類	ブタクサハムシ					C	C				日本生態学会(2002)	滝沢ほか(1999)	写真： http://aoki2.si.gunma-u.ac.jp/youtyuu/HTMLs/butakusashamusii.html	
154	昆虫類	フタトゲホソヒラタムシ					C	C				黒澤ほか(1985)	千葉県生物学会 (1999)	写真： http://www.eiken.city.nagoya.jp/insect/c_silvan/sb.htm	
155	昆虫類	ブラタナスダンバイ					C	C					山崎(2004)	写真： http://www.zennokyo.co.jp/filed/yz/yz1.html	
156	昆虫類	ベダリアテントウ					C	C				黒澤ほか(1985)	千葉県生物学会 (1999)		害虫に対する天敵利用、いわゆる生物農薬利用の世界初の成功例
157	昆虫類	ホソヒメマキムシ					情報不足	C				黒澤ほか(1985)	千葉県生物学会 (1999)		
158	昆虫類	マデイラコナカイガラムシ		なし	なし		C	C			カイガラムシ類の防除薬剤の散布および捕殺 (予防的薬剤散布により防除可能)	日本生態学会 (2002)、高知県病害虫防除所 (2003)		写真 (千葉県農業総合研究センター暖地園芸研究所 環境研究室 (三平))、標本 (同定依頼を依頼した横浜植物防疫所業務部 時広五朗氏に照会された)	
159	昆虫類	マメハモグリバエ	トマト、豆類、葉菜類の葉の食入ナス科などの農作物に被害				B	B	根絶が困難であるが、防除などの対策を続けるべき。	冬期間のハウス開放、被害株の銀込み	薬剤による防除 (やや難あり)	日本生態学会 (2002)、北海道病害虫防除所(1996)		写真： http://blueilst.hokkaido-ies.go.jp/	
160	昆虫類	ミカンキイロアザミウマ	寄生範囲が広く、花き類を主体に、野菜や果樹にも発生している。吸汁による花や生長点の萎縮、花弁のくさり症状、果実の着色障害を起こす。また、ウイルス病を媒介する。				B	B	根絶が困難であるが、防除などの対策を続けるべき。	合成ピレスロイド系殺虫剤に耐性。ミカンキイロアザミウマは侵入して間もないため登録薬剤はほとんどない。登録薬剤による防除。(薬剤抵抗性を獲得した難防除害虫である。)		福田ほか(1991)、早瀬・福田(1991)、日本生態学会 (2002)	千葉県生物学会 (1999)	写真 (病害虫防除所)	

			人への被害			生態系又は人に対する影響度	防除の緊急度		対 策		文 献			
分 類	和 名	生態系への影響	農林水産業への被害	生活被害	生命身体への被害	緊急度	緊急度ランク	緊急度の情報	予防対策	すでに定着している場合の対策	全般	千葉県	写真・標本の有無 (保管先)	備考
161	昆虫類 ミナミキイロアザミウマ			なし	なし	C	C			施設内への侵入を防ぐため、開口部を銀色寒冷紗で覆う。 紫外線除去フィルムで施設を覆う。 反射フィルムでマルチを行い忌避を図る。 粘着テープによる成虫の誘殺。 天敵農薬の利用。 登録薬剤による防除。 (薬剤抵抗性を獲得した難防除害虫である。)	河合(1990)	千葉県生物学会 (1999)	写真 (病害虫防除所)	
162	昆虫類 ヤサイノウムシ		野菜類に被害			C	C			薬剤防除(効果あり)	日本生態学会(2002)、林匡夫ほか(1984)	千葉県生物学会(1999)		
163	昆虫類 ヤノネカイガラムシ		カンキツの害虫であり、雌成虫が葉、緑枝、果実に寄生する。増殖力が強く、侵入当初は樹体を枯死させることも多かった。	なし	なし	C	C			・登録薬剤による防除。 ・天敵昆虫の定着利用。(効果あり。なお、中国から導入された天敵(ヤノネカイロコバチ・ヤノネツヤコバチ)の放飼により国の指定有害動植物のリストから外された。(2000年))	日本生態学会(2002)、河合(1980)		無	
164	昆虫類 ヨコツナシガメ					情報不足	C				安松ほか(1965)	信太(2003)	写真: http://sok2.si.gunma-u.ac.jp/youtyu/HTMLs/yokodum-asasigame.html	
165	昆虫類 ラミーカミキリ					C	C				林匡夫ほか(1984)		写真: http://www.spmh.jp/news/news05/news0504.htm	
166	昆虫類 リンゴスガ					C	C				井上ほか(1982)	千葉県生物学会(1999)		
167	昆虫類 ワタヘクロノメイガ		ワタ、アオイ、クワ、キュウリ等ウリ科農作物の葉・生長点の加害			C	C			薬剤防除(効果の高い薬剤あり)	井上ほか(1982)		写真: http://www.insects.jp/kon-gawatsheriguro.htm	
168	昆虫類 ワタミヒグナゴノウムシ					C	C		乾燥食品は密閉容器に保管し、こぼれた食品は掃除機などで吸い取っておく。		林匡夫ほか(1984)	千葉県生物学会(1999)	写真: http://www.nfri.affrc.go.jp/yakudachi/gaichu/zukan/18.html	
169	軟体動物 アサリ	在来のアサリとの交雑の可能性等	混入による地価低下の可能性がある	不明	なし?	B	A	外来個体群が増加すると、水産上在来のブランドが下がる可能性がある。	移入アサリのチェック；食用移入の遡業禁止；養殖・畜養の制限	特になし；[産地表示の明確化]			(標本：千葉県立中央博物館)	国外及び国内外来種
170	軟体動物 アズキガイ	不明	不明	不明	なし?	C	C	定着していても範囲が小さくさである。	苗木等の移動時のチェック	特になし	木村(2002)		標本：千葉県立中央博物館	国内外来種
171	軟体動物 イガイダマシ	不明	多くはないが、漁業関係資材への付着が認められる	不明	なし?	C	C	個体数も多く、プランクトン幼生を出すので、駆除等が難しい。足糸で付着するので、他生物等への影響大?	バラスタタンク水の「殺菌」や付着生物のチェック；塗料等による付着面への定着阻害	特になし	波部(1980)、日本生態学会(2002)	朝倉(1992)	標本：千葉県立中央博物館	
172	軟体動物 イスパニアマイマイ	不明	農作物の食害の可能性	家庭菜園での食害の可能性	広東住血線虫の中間宿主の可能性	C	A	被害は出ていないが、生息地が限定されており、定着初期なので、根絶できる可能性もある。	苗木等の移動時のチェック	薬剤散布や生息環境の改善	上島ほか(2004)	上島ほか(2004)	標本：千葉県立中央博物館	
173	軟体動物 インドヒラマキガイ	不明	不明	不明	吸虫類の中間宿主の可能性	C	C	野外逸脱のみで、野外での繁殖は確認されていない。水槽内では付着藻の除去に利用されている。	水草等の移動時のチェックや水槽内個体の野外遡業禁止	特になし	波部(1973)	倉西(1996)	(県外産標本：千葉県立中央博物館)	
174	軟体動物 ウスカラシオツガイ	不明	多くはないが、漁業関係資材への付着が認められる。	不明	なし?	C	C	個体数も多く、プランクトン幼生を出すので、駆除等が難しい。	バラスタタンク水の「殺菌」や付着生物のチェック	特になし		岡本(1993)、岡本・黒住(1996)	標本：千葉県立中央博物館	
175	軟体動物 ウスシジミ	在来ヤマトシジミとの競合や置き換わりの可能性	不明	不明	なし?	B	B	在来ヤマトシジミとの競合等が問題かもしれない。	移入シジミのチェック；食用移入の遡業禁止；養殖・畜養の制限	ヤマトシジミ混雑時の除去；[産地表示の明確化]	根本ほか(2003)	根本ほか(2003)	標本：中央博(写真・標本：千葉県内水面水産研究センター；外国産シジミ)	
176	軟体動物 ウネナシトマヤガイ	不明	不明	不明	なし?	C	C	個体数も多く、プランクトン幼生を出すので、駆除等が難しい。	バラスタタンク水の「殺菌」や付着生物のチェック	特になし		黒住(2006)	標本：千葉県立中央博物館	国内外来種
177	軟体動物 ウメノハナガイモドキ	不明	不明	不明	なし?	C	B	個体数も多く、プランクトン幼生を出すので、駆除等が難しい。	バラスタタンク水の「殺菌」や移入アサリのチェック	特になし；[産地表示の明確化]		風呂田(2001)	標本：千葉県立中央博物館	国内外来種
178	軟体動物 オナジマイマイ	植物の食害	農作物の食害	家庭菜園での食害	広東住血線虫の中間宿主	C	C	県内には広く分布するが、個体数は少なく、農業被害は少ないようである。	苗木等の移動時のチェック	薬剤散布や耕種防除	黒田(1959)	稲葉(1975)、黒住・岡本(1996)	標本：千葉県立中央博物館	
179	軟体動物 カネツケシジミ	在来ヤマシジミとの置き換わり	不明	不明	なし?	B	A	着実に分布を広げており、在来種のヤマシジミを駆逐する可能性がある。	移入シジミのチェック；食用移入の遡業禁止；養殖・畜養の制限	特になし；[産地表示の明確化]	諸喜田(1984)、増田ほか(1998)、日本生態学会(2002)	黒住ほか(2004)	標本：千葉県立中央博物館	
180	軟体動物 ?カワアイ	不明	不明	不明	なし?	C	C	東京湾ではほぼ絶滅した種であり、DNAでも違いがなさそうなので、見守る。	バラスタタンク水の「殺菌」や移入アサリのチェック	個体群動態の調査；[産地表示の明確化]	(県内在来種：ただし絶滅に懸する)	飯島ほか(2002)	標本：千葉県立中央博物館	国内外来種 ただし外来種であるか未確定
181	軟体動物 カワニナ属の一種	不明	不明	不明	なし?	C	C	まだ確実に増加しそうだが、根絶が難しい。	移入シジミのチェック	特になし；[産地表示の明確化]	黒住・岡本(2002)	黒住・岡本(2002)	標本：千葉県立中央博物館	
182	軟体動物 カワヒバリガイ	不明(微細空間の創出)	不明	導水管等への付着による効率悪化	なし?	B	A	日本各地で確認され始め、駆除は困難であり、早めに対策をとるべきである。	最侵入に対しては移入シジミのチェック	繁殖期前の大規模な見つけ採り	松田・上西(1992)、中井・松田(2000)、日本生態学会(2002)		標本：千葉県立中央博物館	
183	軟体動物 キュウシユウナミコギセル	不明	不明	不明	なし?	C	C	周辺へ分布拡大していない。	苗木等の移動時のチェック	特になし		岡本(2002)	(県外産標本：千葉県立中央博物館)	国内外来種
184	軟体動物 コウラナメクジ(キイロナメクジ)	植物の食害	農作物の食害	家庭菜園での食害	広東住血線虫の中間宿主	C	C	県内では、ほぼ絶滅したようである。	農作物・苗木等の移動時のチェック	特になし	山口・波部(1965)	稲葉(1975)、成毛(1985)	(県外産写真：黒住)	現在は絶滅?
185	軟体動物 コウロエンカワヒバリガイ	不明	不明	不明	なし?	B	C	個体数も多く、プランクトン幼生を出すので、駆除等が難しい。足糸で付着するので、他生物等への影響大?	バラスタタンク水の「殺菌」や付着生物のチェック；塗料等による付着面への定着阻害	特になし	品川(1978)、Kimuraほか(1999)、日本生態学会(2002)	朝倉(1992)	標本：千葉県立中央博物館	
186	軟体動物 コケガラス	不明	不明	不明	なし?	B	B	定着していても初期の可能性があり、個体数増加を軽減できるかもしれない。足糸で付着するので、他生物等への影響大?	移入アサリのチェック	特になし；[産地表示の明確化]			標本：千葉県立中央博物館	野外逸脱的、国内外来種
187	軟体動物 コシダカヒメモノアラガイ	不明	不明	不明	吸虫類の中間宿主の可能性	C	C	個体数・確認地点も少なく、被害等の報告はない。	水草等の移動時のチェック	特になし	黒田(1963)	倉西(1996)、新島・田中(2000)	標本：千葉県立中央博物館	
188	軟体動物 コハクオナジマイマイ	植物の食害	農作物(果樹を含む)の食害	家庭菜園での食害	広東住血線虫の中間宿主	B	B	近年、着実に分布域を拡大しており、農作物への被害もある。	苗木等の移動時のチェック	薬剤散布や耕種防除	岡本(1992)		標本：千葉県立中央博物館	国内外来種
189	軟体動物 コハクガイ	植物の食害	農作物の根等の食害	家庭菜園での食害	広東住血線虫の中間宿主の可能性	B	C	広範囲に分布しているが、県内からは農業被害の報告はない。	苗木等の移動時のチェック	薬剤散布	黒田(1958)	稲葉(1975)、黒住・岡本(1996)	標本：千葉県立中央博物館	
190	軟体動物 コビトノボウシザラ	不明	不明	不明	吸虫類の中間宿主の可能性	C	C	報告例も少なく、被害等の報告もない。	水草等の移動時のチェックや水槽内個体の野外遡業禁止	特になし	Barch(1964)、渡部(1990)		標本：千葉県立中央博物館	
191	軟体動物 ゴマフダマ	貝類を捕食	有用二枚貝類の捕食	不明	なし?	A	A	未だ野外での繁殖は確認されていないが、個体が増加すると影響がそうなので、早めの対策が必要。	移入アサリのチェック	特になし；[産地表示の明確化]		黒住・岡本(1996)	標本：千葉県立中央博物館	野外逸脱的、国内外来種

分 類	和 名	生態系への影響	人への被害			生態系又は人に対する影響度	防除の緊急度		対 策	文 献	備 考			
			農林水産業への被害	生活被害	生命身体への被害		緊急度	緊急度ランク				緊急度の情報	予防対策	すでに定着している場合の対策
192	軟体動物 サカマキガイ	在来種の捕食?	水田作物等の食害の可能性	観葉植物の食害	吸虫類の中間宿主の可能性	B	C	分布域・個体数とも多く、駆除等は難しい。ただ在来種の直接的捕食の可能性も示唆されている。	水草等の移動時のチェックや水槽内個体の野放し禁止	時に薬剤散布	黒田(1963)、日本生態学会(2002)	稲葉(1975)、黒住・岡本(1996)	標本：千葉県立中央博物館	
193	軟体動物 サキグロタマツメ	貝類を捕食	有用二枚貝類の捕食	不明	なし?	A	B	有用貝類への捕食が認められるが、個体数が増加しており、駆除等は困難。	移入アサリのチェック	一部、見つけ採り；[産地表示の明確化]	酒井(2000)、大越(2003)		標本：千葉県立中央博物館；写真：水産研究センター富津研究所	国内外来種
194	軟体動物 シジミ属の一種	在来のマシジミとの置き換わりの可能性	不明	不明	なし?	C	A	着実に分布を広げており、在来種のマシジミを駆逐する可能性がある。まだ定着地は少ないようである。	移入シジミのチェック；食用移入の遺棄禁止；養殖・蓄養の制限	特になし；[産地表示の明確化]	根本ほか(2003)		標本：千葉県立中央博物館	
195	軟体動物 シナハマグリ	不明	不明	不明	なし?	C	A	定着する可能性は低い、逆に定着等が認められれば、初期の根絶等が可能かもしれない。	移入ハマグリ・アサリのチェック；食用移入の遺棄禁止；養殖・蓄養の制限	特になし；[産地表示の明確化]	日本生態学会(2002)	岡本・黒住(1996)	標本：千葉県立中央博物館	
196	軟体動物 シマメノウフネガイ	?在来種の成長阻害	有用巻貝類の成長阻害の可能性	不明	なし?	B	C	広範囲に多数生息しており、駆除等は困難。	バラストタンク水の「殺菌」や付着生物のチェック	特になし	開瀬(1969)、江川(1985)、日本生態学会(2002)	朝倉(1992)	標本：千葉県立中央博物館	
197	軟体動物 スクミリンゴガイ	植物の食害	水田作物の食害	不明(大量死亡時の水質悪化等?)	広東住血線虫の中間宿主	A	A	現実的な農業被害が出ているので、早急な対策が必要。ただ全国でも根絶等はできていない。	植物防衛法の遵守；国内移動の制限	取水口からの侵入防止/捕殺・越冬期のロータリー耕・登録薬剤による防除/水位調節	宮崎(1985)、日本生態学会(2002)	入村・細川(1993)	標本：千葉県立中央博物館；写真(病害虫防除所)	
198	軟体動物 スナガイ	不明	不明	不明	なし?	C	C	個体数が多く、微小なので、駆除等は難しい。	苗木等の移動時のチェック	特になし		黒住・岡本(1996)	標本：千葉県立中央博物館	国内外来的なもの
199	軟体動物 スナガイ属の一種	不明	不明	不明	なし?	C	B	報告例も少なく、面積も狭いので、駆除実験が可能かもしれない。	農作物・苗木等の移動時のチェック	特になし				
200	軟体動物 ソウジマジンマイ(ツヤミジンマイ)	不明	不明	不明	なし?	C	B	報告例も少なく、面積も狭いので、駆除実験が可能かもしれない。	農作物・苗木等の移動時のチェック	特になし	湊(2005)	石島(2006)	標本：千葉県立中央博物館(他県産)	
201	軟体動物 タイワンシジミ	在来のマシジミとの置き換わり	タイワンシジミの競合等の可能性	不明	なし?	B	A	着実に分布を広げており、在来種のマシジミを駆逐する可能性がある。	移入シジミのチェック；食用移入の遺棄禁止；養殖・蓄養の制限	特になし；[産地表示の明確化]	増田ほか(1998)、日本生態学会(2002)	新島・田中(2000)、千葉県史料研究財団(2002)	標本：千葉県立中央博物館 写真・標本：千葉県水産総合研究センター内水面水産研究所	
202	軟体動物 タスキガケサカマキガイ	在来種の捕食?	水田作物等の食害の可能性	観葉植物の食害	吸虫類の中間宿主の可能性	C	C	サカマキガイとの識別が難しく、また被害等の報告もないようである。	水草等の移動時のチェックや水槽内個体の野放し禁止	特になし	岡本(1976)、増田・内山(2004)	岡本(1976)	標本：千葉県立中央博物館	
203	軟体動物 チョウランナメクジ	植物の食害	農作物の食害	家庭菜園での食害	広東住血線虫の中間宿主	B	B	家庭菜園を中心に小面積の農地での被害が大きい。	農作物・苗木等の移動時のチェック	薬剤散布	山口・波部(1955)、日本生態学会(2002)	稲葉(1975)、黒住・岡本(1996)	標本：千葉県立中央博物館	
204	軟体動物 トクサオカチョウジガイ	不明	農作物の根等の食害	家庭菜園での食害	吸虫類の中間宿主の可能性	B	C	県内では、農業被害等の報告はないようである。	農作物・苗木等の移動時のチェック	特になし	黒田(1958)	稲葉(1975)	標本：千葉県立中央博物館	
205	軟体動物 ?ナメクジ	植物の食害	農作物やキノコ類の食害	家庭菜園での食害	広東住血線虫の中間宿主	B	C	県内では農作物への被害は少ないようであり、個体数も減少傾向にある。	農作物・苗木等の移動時のチェック	薬剤散布	黒田(1963)	稲葉(1975)、黒住・岡本(1996)	標本：千葉県立中央博物館	外来種であるか未確定
206	軟体動物 ニワコウランナメクジ	植物の食害	農作物の食害の可能性	家庭菜園での食害の可能性	広東住血線虫の中間宿主の可能性	C	C	発見例が極めて少ないので影響は現在のところ軽微である。	農作物・苗木等の移動時のチェック	特になし	山口・波部(1965)	?稲葉(1975)	(写真等なし)	
207	軟体動物 ノハラシノシタ	不明	不明	不明	広東住血線虫の中間宿主の可能性	C	C	確認地点も少なく、生息場所からも影響は軽微と考えられる。	苗木等の移動時のチェック	特になし	Kano(1996)		標本：千葉県立中央博物館	
208	軟体動物 ノハラナメクジ	植物の食害	農作物の食害	家庭菜園での食害	広東住血線虫の中間宿主	C	C	農作物に被害を与える可能性が高いが、その報告はないようである。	農作物・苗木等の移動時のチェック	薬剤散布	山口・波部(1965)	稲葉(1975)、黒住・岡本(1996)	標本：千葉県立中央博物館	
209	軟体動物 バツラマイマイ	不明	不明	不明	広東住血線虫の中間宿主の可能性	C	C	個体数が多いので、駆除等は難しい。	苗木等の移動時のチェック	特になし	黒住(2003)	稲葉(1975)、黒住・岡本(1996)	標本：千葉県立中央博物館	国内外来種
210	軟体動物 ハブタエモノアラガイ	不明	不明	不明	吸虫類の中間宿主の可能性	C	C	広範囲に分布しているが、被害等は報告されていないようである。	水草等の移動時のチェック	特になし	品川(1981)、増田・内山(2004)	黒住・岡本(1996)、新島・田中(2004)	標本：千葉県立中央博物館	
211	軟体動物 ハマグリ	不明	不明	不明	なし?	B	B	外来群のDNAが東京湾在来のもと同じであれば、繁殖しても良いと思うので、早急なDNAのチェックが必要。	移入ハマグリ・アサリのチェック；食用移入の遺棄禁止；養殖・蓄養の制限	特になし；[産地表示の明確化]			標本：千葉県立中央博物館	野外逸脱的、国内外来種 在来個体群は絶滅
212	軟体動物 ヒタチマイマイ	不明	不明	不明	広東住血線虫の中間宿主の可能性	C	C	小面積での繁殖だが、保護されている場所なので、この種だけの駆除は難しい。	苗木等の移動時のチェック	特になし		黒住(1994)	標本：千葉県立中央博物館	国内外来種
213	軟体動物 ヒメコハクガイ	不明	不明	不明	広東住血線虫の中間宿主の可能性	C	C	サイズ・食性から被害はほとんど出ないようである。	苗木等の移動時のチェック	特になし	黒田(1958)、Kano(1996)	稲葉(1975)、黒住・岡本(1996)	標本：千葉県立中央博物館	外来種であるか未確定
214	軟体動物 ヒラマキミズマイマイ類	不明	不明	不明	吸虫類の中間宿主の可能性	C	C	在来種との識別が難しく、また被害等の報告もないようである。	水草等の移動時のチェックや水槽内個体の野放し禁止	特になし	増田・内山(2004)	村山・倉西(2001)	(県外産標本：千葉県立中央博物館)	
215	軟体動物 ホソウミナ	不明	不明	不明	なし?	C	C	由来がわかっており、絶滅した地域での回復調査としての意義が大きいので見守る。		個体群動態の調査	(県内在来種)	飯島(2004)	標本：千葉県立中央博物館	国内外来種；個体群回復の実験のために導入。
216	軟体動物 ホンビノスガイ	不明	不明	不明	なし?	B	C	個体数増加が大きく、影響がでるのかもしれない。	食用移入種の遺棄禁止	特になし		黒住・岡本(2002)、西村(2005)	標本：千葉県立中央博物館	現在は食用に販売されている。
217	軟体動物 マルタニシ	不明	不明	不明	なし?	C	C	史前帰化と考えられ、減少していることによる良くない影響がでている。		特になし	黒住(2000)	黒住・岡本(1996)	標本：千葉県立中央博物館	千葉県レッドリストはおよそ明治以降の減少を対象としており、外來種は史前帰化を含めているので、ここに掲載した。
218	軟体動物 ミジンマイマイ	不明	不明	不明	なし?	C	C	個体数が多く、微小なので、駆除等は難しい。	苗木等の移動時のチェック	特になし		稲葉(1975)	標本：千葉県立中央博物館	国内外来種
219	軟体動物 ?ミドリイガイ	不明	多くはないが、漁業関係資材への付着が認められる。	不明	なし?	B	C	個体数も多く、プランクトン幼生を出すので、駆除等が難しい。足糸で付着するので、他生物等への影響大?	バラストタンク水の「殺菌」や付着生物のチェック；塗料等による付着面への定着阻害	塗料等による付着面への定着阻害と人力による除去	杉谷(1968)、横川・鍋島(1998)、日本生態学会(2002)	朝倉(1992)	標本：千葉県立中央博物館	東南アジア等から能動的に分散してきた可能性もあり、その場合、外来種には当てはまらない。
220	軟体動物 ムラサキイガイ	不明(在来種の定着場所被覆・海水の滲過)	船底や養殖施設を含めた漁業関係資材への付着が認められる。	発電所の取・排水管への付着による効率悪化	なし?	A	B	IUCNワースト100；個体数も多く、プランクトン幼生を出すので、駆除等が難しい。足糸で付着するので、他生物等への影響大?	バラストタンク水の「殺菌」や付着生物のチェック；塗料等による付着面への定着阻害	塗料等による付着面への定着阻害と人力による除去	金丸(1935)、梶原(1985)、日本生態学会(2002)	朝倉(1992)	標本：千葉県立中央博物館	
221	軟体動物 モノアラガイ類	不明	不明	不明	吸虫類の中間宿主の可能性	C	C	人工池等に分布を広げているが、被害等は確認されていないようである。	水草等の移動時のチェックや水槽内個体の野放し禁止	特になし	上島ほか(2000)、増田・内山(2004)	新島・田中(2000)	標本：千葉県立中央博物館	
222	軟体動物 ヤマトシジミ種群	在来ヤマトシジミとの競合や置き換わりの可能性	不明	不明	なし?	C	B	現在のところは、在来ヤマトシジミの絶滅域なので問題は少ないが、今後の動態を把握して置かねばならない。	移入シジミのチェック；食用移入の遺棄禁止；養殖・蓄養の制限	特になし；[産地表示の明確化]	根本ほか(2003)		標本：千葉県立中央博物館 写真・標本：千葉県水産総合研究センター内水面水産研究所	

千葉県の外來種整理表(全)

分類	和名	学名	分類群	土着生息地(原産地)	分布・生息情報			移入経路		移入年代		体重等	生息環境	生活史	繁殖			食性		
					日本での分布状況	千葉県での分布状況	千葉県での生息状況	移入経路：日本	移入経路：千葉県	移入年代：日本	移入年代：千葉県				繁殖場所	時期	繁殖形態			
223	軟体動物	ウヤミヨキセワタ	<i>Aglaia?</i> sp.	頭橋目カノコキセワタ科	?	東京湾等	小櫃川河口干潟	個体数は少ない。	パラストタンク水に混入?	パラストタンク水に混入?	平成時代	平成時代	体長2 cm程度	海域：潮間帯の砂/砂泥底	不明	不明	不明	肉食(貝類や多毛類?)		
224	節足動物	アメリカザリガニ	<i>Procambarus clarkii</i>	エビ目アメリカザリガニ科	アメリカ合衆国東南部	本州、四国、九州	都川、栗山川、南白亀川調査で記録あり		ウシガエルの餌料として移入					淡水域	河川、池沼、水田、用水路などの止水や流れの緩やかな泥底に生息する。満1年で体長約40mm、2年で約60mmに成長し、成熟する。				雑食性	
225	節足動物	アメリカフジツボ	<i>Balanus eburneus</i>	無柄目フジツボ科	アメリカ合衆国北部東岸-南米北岸	本州、四国、九州	東京湾沿岸	東京湾奥に多数生息。	不明だがおそらく船によって運ばれた(船底かバラスト水)	不明だがおそらく船によって運ばれた(船底かバラスト水)	明治以降(1950年)	おそらく1950-1960年の間	直径15mmほど	海域	内湾潮下帯	内湾潮下帯	ほぼ周年産卵がおこなわれる。		海中懸濁物食	
226	節足動物	イチジクモンサビダニ	<i>Aceria ficus</i>	ダニ目フシダニ科	外来種?	本州	一部	家庭果樹用として植えられているイチジクで発生が確認されたことがある。		?侵入害虫かどうか不明				陸域					植食性	
227	節足動物	イッカククモガニ	<i>Pyramia tuberculata</i>	十脚目クモガニ科	北米太平洋岸のサンフランシスコから南米コロンビアまで	本州、四国、九州	東京湾沿岸	東京湾内に非常に多数生息。	不明だがおそらく船によって運ばれた(船底かバラスト水)	不明だがおそらく船によって運ばれた(船底かバラスト水)	明治以降(1970年)	おそらく1970年頃	甲長25mmほど	海域	内湾潮下帯	内湾潮下帯	ほぼ周年	夏期で1ヶ月、冬季で3ヶ月で成熟し、1回の産卵後直ちに次のパッチを産卵する。	海底堆積有機物食	
228	節足動物	オカダゴンシ	<i>Armadillidium vulgare</i>	等脚目(ワラジムシ目)オカダゴンシ科	ヨーロッパ(地中海地域と考えられる)	全国的に分布(関東・北陸以南に多い)	全国的に人為の及ぶ場所にごく普通	すでにかなり多い。	不明	不明	明治以降	不明	体長14mmまで	陸域、人為の及ぶ場所	寿命不詳	人為の及ぶ場所	春-秋に産卵	殆ど同じ形態(育房を出たばかりの幼者の歩行付觸肢は1対少ない)	雑食(落葉、生の植物、他の虫およびその遺体)	
229	節足動物	オビワラジムシ	<i>Porcellio dilatatus</i>	等脚目(ワラジムシ目)ワラジムシ科	ヨーロッパ(地中海地域と考えられる)	関東地方などに希	館山市で報告例有り	拡大している観察例はない。	不明	不明	明治以降	不明	体長16mmまで	陸域、人為の及ぶ場所	寿命不詳	人為の及ぶ場所	不明	殆ど同じ形態(育房を出たばかりの幼者の歩行付觸肢は1対少ない)	主に落葉	
230	節足動物	タテジマフジツボ	<i>Balanus amphitrite</i>	無柄目フジツボ科	不明(マハワイ、マフィリピン)	北海道-九州	千葉県沿岸全域	千葉県沿岸の内湾の特に港湾施設岩壁に非常に多数生息。	不明だがおそらく船によって運ばれた(船底かバラスト水)	不明だがおそらく船によって運ばれた(船底かバラスト水)	明治以降(1935年に相模沖の記録がある)	明治以降?	直径10-15mmほど	海域	内湾潮間帯-潮下帯	内湾潮間帯-潮下帯	ほぼ周年産卵がおこなわれる		海中懸濁物食	
231	節足動物	チチュウカイミドリガニ	<i>Carcinus aestuarii</i>	十脚目ガザミ科	地中海	東京湾沿岸域(神奈川県、東京都)	東京湾沿岸	東京湾内に多数生息。	不明だがおそらく船によって運ばれた(船底かバラスト水)	不明だがおそらく船によって運ばれた(船底かバラスト水)	明治以降(1984年)	1959年に浦安での採集記録がありおそらくそのころ	甲長50-60mmほど	海域	内湾潮下帯、寿命は少なくとも3年以上。	内湾潮下帯	冬期を中心とした11月-5月	幼生の着底は3月ごろ、稚ガニは春から夏に成長しその年の秋から繁殖をはじめる。	おそらく二枚貝やゴカイを主食とする肉食	
232	節足動物	トマトサビダニ	<i>Aculops lycopersici</i>	ダニ目フシダニ科		北海道、本州、四国、九州	全域(ハウス内)野外では未確認	減農薬のトマトでしばしば発生する。			1986年に沖縄で初めて確認	1995年に松戸のトマト農家で発生		陸域			周年		植食性	
233	節足動物	ナガワラジムシ	<i>Hoplophthalmus danicus</i>	等脚目(ワラジムシ目)、ナガワラジムシ科	ヨーロッパ(地中海地域と考えられる)	全国的に分布(関東・北陸以南に多い)増加傾向にあると思われる	全国的に公園や二次林などに増加傾向にあると考えられる。	不明	不明	明治以降	不明	体長4mmまで	陸域、公園や二次林、林縁など	寿命不詳	公園や二次林など	不明	殆ど同じ形態(育房を出たばかりの幼者の歩行付觸肢は1対少ない)	主に落葉		
234	節足動物	フロリダマシズコエビ	<i>Crangonyx floridanus</i>	ヨコエビ目マシズコエビ科	北米(東海岸)	東北、関東、中部、関西、四国、九州(一部未公表データを含む)	古利根沼(利根川水系)、千葉市(都川、鹿島川)、栗山川、一宮川	多い場所では、一平方メートルあたり100個体をこえる場所もある。2006年の段階では、北総地域の水系に分布を広げつつある。	観賞魚の水槽にいれる水草に付着して侵入した?	観賞魚の水槽にいれる水草に付着して侵入した?	1980年代	1980年代	数-数十ミリグラム(湿重)	淡水域	詳細不明、やや富栄養化した河川、湖沼で年間を通して採集される。	河川では確底、湖沼では水草帯、	冬期を除く一年中	雌が卵を包卵する。卵数等は不明。	デトライタス	
235	節足動物	ホソワラジムシ	<i>Porcellionides pruinosus</i>	等脚目(ワラジムシ目)ワラジムシ科	ヨーロッパ(地中海地域と考えられる)	全国的に分布(関東・北陸以南に多い)	全国的に人為の及ぶ場所	拡大している観察例はない。	不明	不明	明治以降	不明	体長13mmまで	陸域人為の及ぶ場所	寿命不詳	人為の及ぶ場所	春-秋に産卵	殆ど同じ形態(育房を出たばかりの幼者の歩行付觸肢は1対少ない)	主に落葉	
236	節足動物	モクセイハダニ	<i>Panonychus osmanthi</i>	ダニ目ハダニ科			松戸市	庭木のモクセイ類で発生する。		?侵入害虫かどうか不明				陸域					植食性	
237	節足動物	ヨーロッパフジツボ	<i>Balanus improvisus</i>	無柄目フジツボ科	ヨーロッパ大西洋岸	本州、四国、九州	東京湾沿岸、銚子	東京湾内に生息。	不明だがおそらく船によって運ばれた(船底かバラスト水)	不明だがおそらく船によって運ばれた(船底かバラスト水)	明治以降(1952年)	1960年頃?	直径10mmほど	海域	内湾潮下帯	内湾潮下帯	ほぼ周年産卵がおこなわれる。		海中懸濁物食	
238	節足動物	ランヒメハダニ	<i>Tenuipalpus pacificus</i>	ダニ目ヒメハダニ科			山田町(ハウス内)野外では未確認	コショウランを栽培している農家で発生が確認された。			1991年(三重県)			陸域		施設(ファレノブシ)			植食性	
239	節足動物	ルイスハダニ	<i>Eotetranychus lewisi</i>	ダニ目ハダニ科			大栗町、東庄町(ハウス内)野外では未確認	香取のポインセチアを栽培している農家で発生が確認された。		?侵入害虫かどうか不明	1997年(奈良県)	2001年に香取のポインセチアで発生が確認された		陸域		施設(ファレノブシ)ポインセチア)			植食性	
240	節足動物	ワラジムシ	<i>Porcellio scaber</i>	等脚目(ワラジムシ目)ワラジムシ科	ヨーロッパ	全国的に分布(中部以北に多いが南西日本に分布を拡大)	全国的に人為の及ぶ場所にごく普通	すでにかなり多く、かつ増加傾向と考えられる。	不明	不明	明治以降	不明	体長12mmまで	陸域人為の及ぶ場所、水辺にもしばしば出現	寿命不詳	人為の及ぶ場所	春-秋に産卵	殆ど同じ形態(育房を出たばかりの幼者の歩行付觸肢は1対少ない)	主に落葉	
241	腔腸動物	クログネイソギンチャク	<i>Anthopleura kurogane</i>	イソギンチャク目ウメボシイソギンチャク科				砂地						海域：砂地					肉食	
242	線虫類	マツノザイセンチュウ	<i>Bursaphelenchus xylophilus</i>	ハリセンチュウ目アフェレンコイデス科	北アメリカ	北海道、青森県を除く全都府県	全域	全域	造船用輸入木材に寄生して侵入	枯根木の移動	1905年長崎県	1948年(君津市)	♀成虫体長0.7-1mm ♂成虫体長0.6-0.8mm	陸域		マツノマダラカミキリによって媒介され、マツの木部に寄生し、全身的な衰弱、枯損を起こす。	マツ木部	通年	卵生	草食
243	線虫類	レンコンネモグリセンチュウ	<i>Hirschmanniella</i> sp.	ハリセンチュウ目ブライトレンクス科	?	レンコン栽培地	千葉県長生郡、君津郡、香取郡管内のレンコン栽培圃場	千葉県長生郡、君津郡、香取郡管内のレンコン栽培圃場	種レンコンの輸入	種レンコンの移動	?	1990年代前半	体長 ♀1-2mm	淡水域(レンコン栽培田)		レンコン根部	通年	卵生	草食	

※日本での分布状況における、「ヤマト」とはおよそ本州から九州のこと。

分 類	和 名	生態系への影響	人への被害			生態系又は人に対する影響度	防除の緊急度		対 策		文 献		写真・標本の有無（保管先）	備考	
			農林水産業への被害	生活被害	生命身体への被害	緊急度	緊急度ランク	緊急度の情報	予防対策	すでに定着している場合の対策	全般	千葉県			
223	軟体動物	ウヤミヨキセツタ	不明	不明	なし？	C	C	個体数は少ないようで、現在のところ影響は多大ではないようである。	バラスト水の「殺菌」等	すでに定着している場合の対策	特になし	和田ほか(1996)	和田ほか(1996)	(写真等なし)	外来種であるか未確定
224	節足動物	アメリカザリガニ	椎エビの類は魚や水生昆虫などの餌になる個体が多いが、成長するに従ってこの関係は逆転する。	イネ、苗代								日本生態学会 (2002)、伴 (1980)、リバーフロント整備センター(1996)			
225	節足動物	アメリカフジツボ	?	特になし	特になし	D	C		バラスト水の殺菌			朝倉(1992)、岩崎ほか(2004)	朝倉(1992)		
226	節足動物	イチジクモンサビダニ		イチジクに被害	なし	なし	C	C		なし				被害写真（農業総合研究センター応用昆虫研究室）	
227	節足動物	イッカクモガニ	在来の小型カニ類の生息に影響を与える可能性がある。	特になし	特になし	D	C		バラスト水の殺菌			朝倉(1992)、岩崎ほか(2004)、風呂田・木下(2004)	風呂田・木下(2004)		
228	節足動物	オカダゴムシ	落葉の分解に役立つ、生の植物や虫を食べる。	園芸作物を食害することがある。	人により不快害虫		D	C		侵入防止、殺虫剤		布村(1999)、布村 (2004a)	布村(2004b)	千葉県立中央博物館・富山市科学文化センター	
229	節足動物	オビワラジムシ	落葉の分解に役立つ。			D	C					布村(1999)、布村 (2004a)	布村(2004b)	富山市科学文化センター	
230	節足動物	タテジマフジツボ	船底汚損生物	特になし	特になし	D	C		船底についてはすでに対策がとられている。			岩崎ほか(2004)	朝倉(1992)		
231	節足動物	チチュウカイミドリガニ	在来のカニ類や貝類の生息に影響を与える可能性がある。	在来の水産有用ワタリガニ類の生息に影響を与える可能性がある。二枚貝の生息に影響を与えるおそれがある。	特になし	C	B	きわめて近縁の <i>Carcinus maenas</i> が、世界中に帰化しており内湾の貝類を食べるので、貝の養殖をしているところでは被害が出るおそれがある。	バラスト水の殺菌			朝倉(1992)、岩崎ほか(2004)、風呂田・木下(2004)	風呂田・木下(2004)		
232	節足動物	トマトサビダニ		トマトに被害	なし	なし	C	B			薬剤防除(効果あり)			被害写真（農業総合研究センター応用昆虫研究室）	
233	節足動物	ナガワラジムシ	落葉の分解に役立つ			D	C					布村(1999)、布村 (2004a)	布村(2004b)	千葉県立中央博物館・富山市科学文化センター	
234	節足動物	フロリダマミズコエビ	汚れた水や夏期の高水温に強く、河川中の有機物を分解するフロリダマミズコエビは、同様の生活要求をもつ他の底生動物に大きな脅威を与えることが考えられ、また水生植物を強力に分解し植生を一変させてしまう可能性もある。	現状では不明	現状では不明	現状では不明	C	B	泥を底質とする水環境に生息する底生動物や水生植物に大きな影響を与える可能性が高い。外来種ココエビは、体サイズが小さいので一度侵入すると除去は困難である。	現状では不明	現状では不明	Morino et al. (2004)、Toft et al. (2002)	Morino et al. (2004)、千葉県史料研究財団(2002)	千葉県立中央博物館、茨城大学理学部	
235	節足動物	ホソワラジムシ	落葉の分解に役立つ。		人により不快害虫	D	C		侵入防止、殺虫剤			布村(1999)、布村 (2004a)	布村(2004b)	千葉県立中央博物館・富山市科学文化センター	
236	節足動物	モクセイハダニ		モクセイの葉に被害	なし	なし	C	B		なし			千葉県生物学会 (1999)	無	
237	節足動物	ヨーロッパフジツボ	?	特になし	特になし	D	C		バラスト水の殺菌			朝倉(1992)、岩崎ほか(2004)	朝倉(1992)		
238	節足動物	ランヒメハダニ		ファレノプシスの葉に被害	なし	なし	C	B					千葉県生物学会 (1999)	被害写真（農業総合研究センター応用昆虫研究室）	
239	節足動物	ルイスハダニ		ポインセチアの葉に被害	なし	なし	C	B		なし				無	
240	節足動物	ワラジムシ	落葉の分解に役立つ。		人により不快害虫	D	C		侵入防止、殺虫剤			布村(1999)、布村 (2004a)	布村(2004b)	千葉県立中央博物館・富山市科学文化センター	
241	腔腸動物	クログネイソギンチャク													
242	線虫類	マツノザイセンチュウ		防風林のマツ枯損による被害が大きい	防風林等保全林の被害		A	A	薬剤防除 抵抗性マツ系統の導入	薬剤防除		岸(1988)、全国森林病虫獣害防除協会(1997)	千葉県史料研究財団(2002)		
243	線虫類	レンコンネモグリセンチュウ		レンコンネモグリセンチュウがレンコンの可食部となる肥大表皮を加害し、不正形褐色斑点を発生させ商品価値を著しく低下させる。	なし	なし	C	B		種はすは線虫の寄生していないものを選ぶ。 線虫汚染圃場からの土の移動を防ぐ。 連作を避け、休耕又は乾田化し、線虫密度を下げる。 (登録農薬がなく汚染圃場は拡大している。)			藍沢ほか(2002) 三平(2002)	写真・標本（農業総合研究センター応用昆虫研究室）	本線虫の生理生態及び形態分類については独立行政法人農業・生物系特定産業技術研究機構 中央農業総合研究センター線虫害研究室 水久保隆之丞長に照会されたい。

引用文献一覧	
分類	文 献
総合	<ul style="list-style-type: none"> 千葉県史料研究財団(編). 2002. 千葉県の自然誌、本編6、千葉県の動物1 - 陸と淡水の動物 - . VII + 988 pp. 千葉県, 千葉. 千葉県生物学会(編). 1999. 千葉県動物誌. 1248 pp. 文一総合出版, 東京. 日本生態学会(編), 村上興正・鷲谷いずみ(監修). 2002. 外来種ハンドブック. xvi+390 pp. 地人書館, 東京.
哺乳類	<ul style="list-style-type: none"> NPO法人房総の野生生物調査会(編). 2005. 平成16年度房総半島における野生猿管理対策調査研究事業報告書. 60 pp. 千葉県環境生活部自然保護課. 浅田正彦・落合啓二・長谷川雅美. 2000. 房総半島及び伊豆大島におけるキョンの帰化・定着状況. 千葉県立中央博物館自然誌研究報告 6: 87-94. 浅田正彦・直井洋司・阿部晴恵・葦沢雄希. 2001. 房総半島におけるイノシシ(<i>Sus scrofa</i> Linnaeus, 1758)の生息状況. 千葉県立中央博物館自然誌研究報告 6: 201-207. 宇田川竜男. 1974. ネズミの話 - よみもの動物記 -. 229 pp. 北隆館, 東京. 小田切敬子・小田切則夫・麻布大学動物研究会. 1989. 市川市妙典に生息する帰化動物マスカットの生態調査. 平岡環境科学研究所報告 2: 119-129. 落合啓二. 1998. 千葉県におけるハクビシンの分布と移入経路. 千葉県立中央博物館自然誌研究報告 5: 51-54. 落合啓二・浅田正彦. 2002. ハクビシンの千葉市への移入. 千葉県立中央博物館自然誌研究報告 7: 17-19. 落合啓二・石井睦弘・布留川毅. 2002. 千葉県におけるアライグマの移入・定着. 千葉県立中央博物館自然誌研究報告 7: 21-27. 川本芳・萩原光・相澤敬吾. 2004. 房総半島におけるニホンザルとアカゲザルの交雑. 霊長類研究 (20): 89-95. 斎藤正寛. 1989. 日本に於けるマスカットの野生化の経緯と俗名の考察. 平岡環境科学研究所報告 2: 179-183. 鈴木欣司. 2005. 日本外来哺乳類フィールド図鑑. 271 pp. 旺文社, 東京. 東京新聞, 2001年5月2日付け, 特報ちば. 萩原光・川本芳. 2001. 房総半島におけるニホンザルと外来種の混血に関する研究. 霊長類研究所年報 (32): 147. 萩原光・相澤敬吾・蒲谷肇・川本芳. 2003. 房総半島の移入種を含むマカカ属個体群の生息状況と遺伝的特性. 霊長類研究 (19): 229-241. 房総のサル管理調査会(編). 1999. 平成10年度房総半島における野生猿管理対策調査研究事業報告書. 124 pp. 千葉県環境部自然保護課・房総のサル管理調査会. 房総のシカ調査会(編). 2001. 千葉県イノシシ・キョン管理対策調査報告書1. 95 pp. 千葉県環境部自然保護課・房総のシカ調査会. 房総のシカ調査会(編). 2002. 千葉県イノシシ・キョン管理対策調査報告書2. 97 pp. 千葉県環境生活部自然保護課・房総のシカ調査会. 房総のシカ調査会(編). 2007. 平成18年度外来種緊急特別対策事業(キョンの生息状況等調査). 88 pp. 千葉県環境生活部自然保護課・房総のシカ調査会. 矢部辰男. 1988. 昔のねずみと今のねずみ. 175 pp. どうぶつ社, 東京.
鳥類	<ul style="list-style-type: none"> 環境庁. 2000. 第31回ガンカモ科鳥類の生息調査報告書. 367 pp. 環境庁, 東京. 齋藤映樹・戸辺進・鴫田真紀子・桑原和之. 2005. ワカケホンセイインコ・千葉市に峙. みみずく鳥獣救護ボランティア通信 38:3-5.
両生爬虫類	<ul style="list-style-type: none"> 小賀野大一・福士融・木村孝康. 2005. 印旛沼水系に侵入したヌマガエルの分布範囲と生息状況. 千葉生物誌 55(1): 1-8. 小林頼太・長谷川雅美. 2005a. 千葉県印旛沼流域における外来種ナミイシガメの定着について. 爬虫両生類学会報2005 (2): 150-154. 小林頼太・長谷川雅美. 2005b. 関東平野におけるアフリカツメガエルの確認記録と定着可能性. 爬虫両生類学会報2005 (2): 169-172. 長谷川雅美・小賀野大一. 1998. 房総半島南部で発見されたヌマガエル, その分布範囲と生息状況. 爬虫両生類学会報 1998 (1): 193-194.(雑誌の年号 要確認) 安川雄一郎. 1995. ミナミイシガメ・日本の稀少な野生水生生物に関する基礎資料 (II): 443-448. 日本水産資源保護協会.
魚類	<ul style="list-style-type: none"> 藍憲一郎・尾崎真澄. 2007. 夷隅川水系および養老川水系におけるカワウ <i>Phalacrocorax carbo hanedae</i> の食性. 千葉県水産総合研究センター研究報告 (2): 43-51. 奥田重俊・柴田敏隆・島谷幸宏・水野信彦・矢島稔・山岸哲(監修). 1996. 川の生物図典. 663 pp. 山海堂, 東京. 尾崎真澄. 1996a. 印旛沼における張網漁獲物組成の変遷. 千葉県水産総合研究センター内水面水産試験場研究報告 (6): 15-27. 尾崎真澄. 1996b. 与田浦の魚類・甲殻類目録. 千葉県水産総合研究センター内水面水産試験場研究報告 (6): 35-40. 尾崎真澄. 2003. 利根川下流部におけるチャンネルキャットフィッシュの生活史に関する研究. 2003年度日本魚類学会講演要旨集, p. 21.

分類	文 献
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 尾崎真澄. 2004. 利根川下流部におけるアメリカナマズの生態および在来魚への影響. <i>In</i>: 平成15年度移入種管理方策検討委託事業報告書, pp. 21-24. ・ 尾崎真澄・宮部多寿. 2007. 利根川下流域におけるチャンネルキャットフィッシュの漁獲実態. 千葉県水産総合研究センター研究報告 (2): 33-41. ・ 梶山誠. 1996a. 亀山湖におけるオオクチバス <i>Micropterus salmoides</i> の食性. 千葉県水産総合研究センター内水面水産試験場研究報告 (6): 7-14. ・ 梶山誠. 1996b. 栗山川の魚類・甲殻類目録. 千葉県水産総合研究センター内水面水産試験場研究報告 (6): 47-52. ・ 川那部浩哉・水野信彦(編・監修). 1989. 日本の淡水魚. 720 pp. 山と溪谷社, 東京. ・ 環境管理センター. 1996a. 千葉県北部地区亀成川他生態系調査報告書, 亀成川. 130 pp. 環境管理センター, 東京. ・ 環境管理センター. 1996b. 千葉県北部地区亀成川他生態系調査報告書, 戸神川. 74 pp. 環境管理センター, 東京. ・ 環境省(編). 2004. ブラックバス・ブルーギルが在来生物群集及び生態系に与える影響と対策. iv+226 pp. (財)自然環境研究センター, 東京. ・ 環境省野生生物保護対策検討会移入種問題分科会(移入種検討会). 2002. 移入種(外来種)への対応方針. 35 pp. 環境省, 東京. ・ 田中正彦・新島偉行. 2000. 魚類. <i>In</i>: 佐倉市自然環境調査団(編), 佐倉市自然環境調査報告書, pp. 221-238. 佐倉市経済環境部環境保全課, 千葉. ・ 千葉県史料研究財団(編). 2003. 千葉県の自然誌資料, 千葉県産動物総目録. XI+379 pp. 千葉県, 千葉. ・ 千葉県内水面水産試験場. 2000. 平成10年度千葉県内水面水産試験場事業報告. 38 pp. 千葉県, 千葉. ・ 千葉県内水面水産研究センター. 2004. 平成14年度千葉県内水面水産研究センター事業報告. 33 pp. 千葉県, 千葉. ・ 永野歩・梶山誠. 2000. 小櫃川におけるオオクチバス <i>Micropterus salmoides</i> の食性. 千葉県水産総合研究センター内水面水産試験場研究報告 (7): 23-28. ・ 中坊徹次(編). 1993. 日本産魚類検索. xxxiv+1474 pp. 東海大学出版会, 東京. ・ 中坊徹次(編). 2000. 日本産魚類検索 - 全種の同定 第二版 (,). 1818 pp. 東海大学出版会, 東京. ・ 農林水産技術会議事務局・水産庁沿岸沖合課・水産総合研究センター中央水産研究所. 2003. 外来魚コクチバスの生態学的研究及び繁殖抑制技術の開発. 47pp. 農林水産技術会議事務局・水産庁沿岸沖合課・水産総合研究センター中央水産研究所発行機関, 東京. ・ 丸山為蔵・藤井一則・木島利通・前田弘. 1987. 外国産新魚種の導入経過. 157 pp. 水産庁研究部資源課・養殖研究所, 東京.
昆虫	<ul style="list-style-type: none"> ・ Watabe, H., E. Momma and M. T. Kimura. 1980. Changes in drosophilid fauna at the University Botanical Garden in Sapporo, Japan. <i>Drosophila Information Service</i> (55): 141-142. ・ 石川千秋・河野幹幸・渡辺勇・藤井正巳・下畑次夫. 1981. カキ及びナシの果実を加害するアオマツムシ. 植物防疫 (35): 73 - 75. ・ 一色周知. 1969. ナシヒメシンクイ. <i>In</i>: 原色日本蛾類幼虫図鑑 下. 86 p. 保育社, 大阪. ・ 伊藤嘉昭(編). 1972. アメリカシロヒトリ - 種の歴史の断面. 185 pp. 中央公論社, 東京. ・ 井上寛. 1982. アメリカシロヒトリ. <i>In</i>: 井上寛・杉繁郎・黒子浩・森内茂・川辺湛. 日本蛾類大図鑑 , pp. 653-654. 講談社, 東京. ・ 井上寛・杉繁郎・黒子浩・森内茂・川辺湛. 1982. 日本蛾類大図鑑 . 966 pp. 講談社, 東京. ・ 上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝(編著). 1985. 原色日本甲虫図鑑 . viii+514 pp. 保育社, 大阪府. ・ 大野正男. 1986. アオマツムシの分布調査に寄せて. <i>インセクトリウム</i> (23): 304-305. ・ 内野 憲. 2001. 複合交信かく乱剤の特徴とニホンナシ園における上手な利用法. 平成12年度試験研究成果発表会資料(果樹), pp. 1 - 6. 千葉県・千葉県農林技術会議, 千葉. ・ 梅谷献二・岡田利承(編). 2003. 日本農業害虫大事典. 1,203 pp. 全国農村教育協会, 東京. ・ 河合章. 1990. 施設野菜における害虫管理: ミナミキイロアザミウマの管理. 植物防疫 (44): 341 - 344. ・ 河合省三. 1980. 日本原色カイガラムシ図鑑. viii+455 pp. (株)全国農村教育協会, 東京. ・ 河名利幸・福田寛. 1992. タバココナジラミ防除薬剤の検討. 関東東山病虫研究会年報 (39): 215-218. ・ 河名利幸・福田寛・清水喜一. 1990. タバココナジラミの防除法の検討. 関東東山病虫研究会年報 (37): 209-211. ・ 川辺湛. 1982. <i>Grapholia molesta</i> (Busck) ナシヒメシンクイ. <i>In</i>: 井上寛・杉繁郎・黒子浩・森内茂・川辺湛. 日本産蛾類大図鑑 . 146 p. 講談社, 東京. ・ 倉西良一・倉西森大. 2003. 千葉県鴨川市でサツマゴキブリを採集. 房総の昆虫 (29): 43. ・ 黒澤良彦・久松定成・佐々治寛之. 1985. 原色日本甲虫図鑑 . x+500 pp. 保育社, 大阪府. ・ 高知県病害虫防除所. 2003. マデラコナカイガラムシ(ピーマン、シシトウ、ナスなど). 平成15年度病害虫発生予察特殊報 (1): 1. ・ 五味正志. 1997. アメリカシロヒトリの日本への侵入と季節対応. <i>インセクトリウム</i> (34): 320-325. ・ 斉藤明子. 2004. 千葉県大多喜町でパラワンヒラタクワガタが発見される. 房総の昆虫 (33): 64. ・ 斉藤明子. 2005. 千葉県山田町でアトラスオオカブトが発見される. 房総の昆虫 (35): 20 - 21.

分類	文 献
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 信太利智. 2000. 佐倉市でセイヨウオオマルハナバチを採集したこと. 房総の昆虫 (24): 27. ・ 信太利智. 2003. ヨコゾナサシガメ佐倉に発生. 房総の昆虫 (31): 18-19. ・ 清水敏夫. 2004. 印西市でギラファノギリクワガタを採集. 房総の昆虫 (33): 64. ・ 須田博久. 1999. 野生のセイヨウオオマルハナバチが千葉・東京で. 千葉生物誌 49(2): 96. ・ 染谷淳・清水喜一. 1997. 千葉県におけるオオタバコガの発生生態と薬剤感受性. 関東東山病虫研究会年報 (44): 241 - 248. ・ 染谷淳・清水喜一. 1998. 千葉県におけるオオタバコガ越冬の可能性. 関東東山病虫研究会年報 (45): 207 - 210. ・ 滝沢春雄・斉藤明子・佐藤光一・平野幸彦・大野正男. 1999. 侵入昆虫ブタクサハムシ - 関東地方での分布拡大と生活史 -. 月刊むし (338): 26-31. ・ 嶽本弘之. 1993. レンゲの播種時期とアルファルファタコゾウムシ. 今月の農業 (37): 99-102. ・ 千葉県農林水産部園芸農産課. 2005. 水稻 イネミズゾウムシ. 平成17年度農作物病害虫雑草防除指針: 23. 千葉県, 千葉. ・ 千葉県病害虫防除所. 2001. トマトハモグリバエの発生について. 平成13年度発生予察特殊報 (3): 2. ・ 千葉県病害虫防除所. 2004. アルファルファタコゾウムシの発生について. 平成16年度病害虫発生予察特殊報 (1): 2. ・ 中根猛彦. 1989. 移入種と思われるアトキリゴミムシの記録. 昆虫と自然 24(8): 33. ・ 林匡夫・木元新作・森本桂 (編著). 1984. 原色日本甲虫図鑑. vii+438 pp. 保育社, 東京. ・ 林長閑. 1984. 家屋・食品に見られる鞘翅目(甲虫目)の形態と生態. <i>In</i>: 日本家屋害虫学会(編), 家屋害虫, pp. 24-47. 井上書院, 東京. ・ 林川修二. 1999. 鹿児島におけるアルファルファタコゾウムシの発生動. 植物防疫 (53): 419-422. ・ 早瀬猛・福田寛. 1991. ミカンキイロアザミウマの発生と見分け方. 植物防疫 (44): 59 - 61. ・ 原田豊秋. 1984. 家屋内で見受けられる食品害虫について(2). <i>In</i>: 日本家屋害虫学会(編), 家屋害虫, pp. 127-137. 井上書院, 東京. ・ 福田 寛・河名利幸・久保田篤男・早瀬猛. 1991. ミカンキイロアザミウマの発生と防除. 関東東山病虫会年報 (38): 231-233. ・ 北海道病害虫防除所. 1996. 平成7年の発生にかんがみ注意すべき病害虫. 北農 63(2): 186-193. ・ 堀繁久. 2003. 北海道に侵入したオオタコゾウムシ. <i>Jezoensis</i> (29): 71-72. ・ 松本英明. 1997. 北海道未記録および希少なゴミムシ類5種. 層雲峡博物館研究報告 (17): 25-26. ・ 森津孫四郎. 1983. キョウチクトウアブラムシ. <i>In</i>: 森津孫四郎, 日本原色アブラムシ図鑑, pp. 401, 545 pp. 全国農村教育協会, 東京. ・ 森本桂. 1988. 日本へ侵入したゾウムシ類の見分け方と被害. 農業研究 35(1): 28-44. ・ 安松京三・朝比奈正二郎・石原保. 1965. 原色昆虫大圖鑑 . 76+358 pp. 北隆館, 東京. ・ 山崎秀雄. 2004. プラタナスグンバイムシ市川市に侵入. 房総の昆虫 (33): 31-33. ・ 山崎秀雄・宮内博至. 2003. 市川市のコウチュウ目(). <i>In</i>: 市川市自然環境実態調査報告書, pp. 751-854. 市川市・市川市自然環境調査会, 千葉. ・ 吉松慎一・宮本泰行・広渡俊哉・安田耕司. 2004. クロソオムソカ (新称) (<i>Opogona sacchari</i> (Bojer))の日本における発生状況. 日本応用動物昆虫学会誌 (48): 135-139. ・ 米田洋斗. 2003. 東京葛飾区のハチ . 房総の昆虫 (30): 10-12. ・ 鷲谷いづみ・鈴木和雄・加藤真・小野正人. 1997. マルハナバチ・ハンドブック. 49 pp. 文一総合出版, 東京.
軟体動物	<ul style="list-style-type: none"> ・ Burch, J. B. 1964. A new species of freshwater limpet, genus <i>Gundlachia</i>, from Japan. <i>Occ. Paps. Mus. Zool. Univ. Michigan</i> (637): 1-7. ・ Kano, Y. 1996. A revision of the species previously known as <i>Hawaiia minuscula</i> in Japan and the discovery of the Helicodiscidae, the family new to Japan. <i>The Yuriyagai</i> (4): 39-59. ・ Kimura, T., M. Tabe., and Y. Shikano. 1999. <i>Limnoperna fortunei kikuchii</i> Habe, 1981(Bivalvia: Mytilidae) is a synonym of <i>Xenostrobus securus</i> (Lamarck, 1819): introduction into Japan from Australia and/or New Zealand. <i>Venus</i> 58(3): 101-117. ・ 朝倉彰. 1992. 東京湾の帰化生物: 都市生態系における移入の過程と定着成功の要因に関する考察. 千葉県立中央博物館自然誌研究報告 2: 1-14. ・ 飯島明子. 2004. 市川市の海域及び汽水域における底生動物・魚類目録. <i>In</i>: 市川市自然環境実態調査報告書2003, pp. 461-504. 市川市・市川自然環境調査会, 千葉. ・ 飯島明子・黒住耐二・風呂田利夫. 2002. 東京湾の人工潟湖に形成された絶滅危惧種の干潟産腹足類カワイ <i>Cerithidea djadjariensis</i> (Martin)(軟体動物門, 腹足綱)の個体群. 日本ベントス学会誌 57: 34-37. ・ 石島秋彦. 2006. 移入種イスパニアマイマイの駆除と新たな生息地. <i>ちりぼたん</i> 36(4): 119-122. ・ 稲葉亨. 1975. Non-marine mollusks of Chiba prefecture (仮). 12 pp. 自刊. ・ 上島励・岡本正豊・斉藤洋一. 2004. 新たな移入種, イスパニアマイマイ <i>Eobania vermiculata</i>. <i>ちりぼたん</i> 35(3): 71-73. ・ 上島励・長谷川和範・齋藤寛. 2000. 皇居の陸産および淡水産貝類. 国立科学博物館専報 (35): 197-210. ・ 江川和文. 1985. シマメノウフネガイの分布とその伝搬状況. <i>ちりぼたん</i> 16(2): 37-44. ・ 大越健嗣. 2003. サキグロタマツメタの生活史とアサリ資源への影響. 日本ベントス学会誌 58: 98-99. ・ 岡本正豊. 1976. 今度は縞のあるモノアラガイ. <i>ちりぼたん</i> 9(1): 9-10.

分類	文 献
----	-----

- ・ 岡本正豊. 1992. 房州のコハクオナジマイマイ. *ちりぼたん* 23(1): 13-18.
- ・ 岡本正豊. 1993. 千葉県産貝類(納付標本リスト). *In*:平成4年度標本資料収集動物・植物標本目録, pp. 5-12. 千葉県自然資料調査会, 千葉.
- ・ 岡本正豊. 2002. 自宅庭に放した陸貝、とくにキュウシュウナミコギセルの繁殖について. *ひたちおび* (81/82): 17-23.
- ・ 岡本正豊・黒住耐二. 1996. 千葉市の貝類1. - 人工海浜の貝類 -. *In*: 千葉自然環境調査会(編), 千葉市野生動植物生息状況及び生態系調査報告書, pp. 581-622. 千葉市環境衛生部, 千葉.
- ・ 梶原武. 1985. ムラサキガイ - 浅海域における侵略者の雄. *In*: 沖山宗雄・鈴木克美(編), 日本の海洋生物. 侵略と攪乱の生態学, pp. 49-54. 東海大学出版会, 東京.
- ・ 金丸但馬. 1935. 貝類の附隨並に歸化. *Venus* 5(2/3): 145-149.
- ・ 木村昭一. 2002. 熱田神宮の貝類相. *かきつばた* (28): 24-25.
- ・ 倉西良一. 1996. 千葉市の淡水(大型)無脊椎動物. *In*: 千葉自然環境調査会(編), 千葉市の野生動植物の生息状況及び生態系調査報告書, pp. 873-886. 千葉市環境衛生局環境部, 千葉.
- ・ 黒住耐二. 1994. 導入植生への陸産貝類の分散について. *千葉中央博自然誌研究報告*, 特別号(1): 235-244.
- ・ 黒住耐二. 2000. 日本における貝類の保全生態学: 貝塚の時代から将来へ. *月刊海洋*, 号外(20): 42-56.
- ・ 黒住耐二(編). 2003. 多摩川水系の貝類からみた自然環境の現状把握と保全に関する研究. (財)とうきゅう環境浄化財団. 研究助成・学術研究 31(226): 1-242. (財)とうきゅう環境浄化財団, 東京.
- ・ 黒住耐二. 2006. 貝類を中心とした小形動物からみた人工海浜の環境の評価と新たな海浜環境の創出. *In*: 萩野康則・黒住耐二(編), 生物多様性を指標とした人工海浜および護岸の環境影響評価と新たな人工海岸創出の検討(科研費報告書), pp. 39-61. 千葉県立中央博物館, 千葉.
- ・ 黒住耐二・岡本正豊. 1996. 千葉市の貝類2. 湾岸域の貝類相. *In*: 千葉自然環境調査会(編), 千葉市の野生動植物の生息状況及び生態系調査報告書, pp. 623-685. 千葉市環境衛生局環境部, 千葉.
- ・ 黒住耐二・岡本正豊. 2002. 近年、南関東に定着した移入貝類. *Venus* 61(1/2): 111. (要旨)
- ・ 黒住耐二・尾崎煙雄・大木淳一. 2004. 房総丘陵のダム湖における淡水産貝類の種組成と生態分布. *千葉中央博自然誌研究報告*, 特別号(6): 33-42.
- ・ 黒田徳米. 1958. 日本及び隣接地域産陸棲貝類相(4). *Venus* 20(1): 132-158.
- ・ 黒田徳米. 1959. 日本及び隣接地域産陸棲貝類相(5). *Venus* 20(4): 363-380.
- ・ 黒田徳米. 1963. 日本非海産貝類目録. v+71 pp. 日本貝類学会, 東京.
- ・ 酒井敬一. 2000. 万石浦アサリ漁場におけるサキグロタマツメタガイの食害について. *宮城県水産研究開発センター研究報告* (16): 109-111.
- ・ 品川和久. 1978. 淀川河口のカワヒバリガイについて. *いそこじき* (34): 14.
- ・ 品川和久. 1981. ハブタエモノアラガイ(和名新称)について. *かいなかま* 15(3): 13-14.
- ・ 諸喜田茂充. 1984. 帰化動物. *In*: 沖縄の生物編集委員会(編), 沖縄の生物, pp. 377-384. 沖縄生物教育研究会, 沖縄.
- ・ 杉谷安彦. 1968. ミドリイガイの生棲について. *かいなかま* 2(3): 27-29.
- ・ 中井克樹・松田征也. 2000. 日本における淡水貝類の外来種 - 問題点と現状把握の必要性 -. *月刊海洋*, 号外(20): 57-65.
- ・ 成毛光之. 1985. 貝のなかま. *In*: 「房総の生物」編集委員会(編), 房総の生物, pp. 194-203. 河出書房新社, 東京.
- ・ 新島偉行・田中正彦. 2000. 水生無脊椎動物. *In*: 佐倉市自然環境調査団(編), 佐倉市自然環境調査報告書, pp. 347-370. 佐倉市経済環境部環境保全課, 千葉.
- ・ 新島偉行・田中正彦. 2004. 市川市の魚類・甲殻類・貝類調査報告書. *In*: 市川市自然環境実態調査報告書2003, pp. 403-460. 市川市・市川自然環境調査会, 千葉.
- ・ 西村和久. 2003. 東京湾奥のホンビノスガイ(移入種)について. *ひたちおび* (94): 13-17.
- ・ 西村和久. 2005. 東京湾奥アサリ漁場に生息するホンビノスガイ(移入種)について. *ちりぼたん* 36(3): 63-66.
- ・ 入村信博・細川隆. 1993. 千葉県産ジャンボタニシの2型の形態的、電気泳動的比較. *ちりぼたん* 24(1): 6-8.
- ・ 根本隆夫・杉浦仁治・古丸明. 2003. 利根川・霞ヶ浦北浦における外来シジミの分布について. *茨城県内水面水産試験場調査研究報告* (38): 32-41.
- ・ 松田征弥・上西実. 1992. 琵琶湖に侵入したカワヒバリガイ(Mollusca; Mytilidae). *滋賀県立琵琶湖文化館研究紀要* (10): 45.
- ・ 湊宏. 2005. 双島(串本町)の陸産貝類, 特にミジンマイマイ類の分類について. *南紀生物* 47(1): 37-42.
- ・ 波部忠重. 1973. 軟体動物. *In*: 上野益三(編), 川村多實二(原著), 日本淡水生物学, pp. 309-341. 北隆館, 東京.
- ・ 波部忠重. 1980. 新移入二枚貝イガイダマシ(新称). *ちりぼたん* 11(3): 41-42.
- ・ 波部忠重. 1990. 日本産非海産水棲貝類目録(その2). *ひたちおび* (55): 3-9.
- ・ 風呂田利夫. 2001. 東京湾における人為的影響による底生動物の変化. *月刊海洋* 33(6): 437-444.
- ・ 増田修・内山りゅう. 2004. 日本産淡水貝類図鑑. 汽水域を含む全国の淡水貝類. 240 pp. ピーシーズ, 東京.
- ・ 増田修・河野圭典・片山久. 1998. 西日本におけるタイワンシジミ種群とシジミ属の不明種の産出状況. *兵庫陸水生物* (49): 22-35.
- ・ 間瀬欣弥. 1969. 相模でとれたネコゼフネガイ. *ちりぼたん* 5(6): 156-157.

分類	文 献
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 宮崎惇. 1985. ラブラタリンゴガイの呼び名. <i>ちりぼたん</i> 16(1): 28-29. ・ 村山茂樹・倉西良一. 2001. 東京湾埋立地の湿性環境における大型無脊椎動物相 - 幕張海岸埋立地の軟体動物と昆虫 -. <i>東京湾学会誌</i> 1(5): 156-163. ・ 山口昇・波部忠重. 1965. 日本産ナメクジ類の研究(1). <i>Venus</i> 18(4): 234-240. ・ 横川浩二・鍋島靖信. 1998. 瀬戸内海で分布を拡大するミドリイガイ. <i>ちりぼたん</i> 29(1): 7-11. ・ 和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五嶋聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏. 1996. 日本における干潟海岸とそこに生息する底生生物の現状. <i>WWF Japan Science Report</i> 3: 1-182.
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・ Morino, H., H. Kusano and J. R. Holsinger. 2004. Description and distribution of <i>Crangonyx floridanus</i> (Crustacea: Amphipoda: Crangonyctidae) in Japan, an introduced freshwater amphipod from North America. <i>Contr. biol. Lab. Kyoto Univ.</i>, 29: 371-381. ・ Toft, D. J., J. R. Cordell and W. C. Fields. 2002. New records of Crustaceans (Amphipoda, Isopoda) in the Sacramento/San Joaquin Delta, California, and application of criteria for introduced species. <i>J. Crustacean Biology</i> 22: 190-200. ・ 藍沢亨・水久保隆之・伊藤賢治・中野昭雄. 2002. 徳島県のレンコンから分離されたネモグリセンチュウ (<i>Hirschmanniella</i> sp.) の形態と計測値. 第46回応動昆虫大会講演要旨, p. 32. 日本応用動物昆虫学会, 東京. ・ 朝倉彰. 1992. 東京湾の帰化生物: 都市生態系における移入の過程と定着成功の要因に関する考察. <i>千葉県立中央博物館自然誌研究報告</i> 2: 1-14. ・ 岩崎敬二・木村妙子・木下今日子・山口寿之・西川輝昭・西栄二郎・山西良平・林育夫・大越健嗣・小菅文治・鈴木孝男・逸見泰久・風呂田利夫・向井宏. 2004. 日本における海産生物の人為的移入と分散: 日本ベントス学会自然環境保全委員会によるアンケート調査の結果から. <i>日本ベントス学会誌</i> 59: 24-44. ・ 岸洋一. 1988. マツ材線虫病(松くい虫)精説. 292 pp. トーマスカンパニー, 東京. ・ 三平東作. 2002. イマムラネモグリセンチュウの寄生によるレンコン黒皮線虫病(新称)の発生. <i>千葉農業総合研究センター研究報告</i> (1): 121 - 124. 千葉県農業総合研究センター, 千葉. ・ 全国森林病虫獣害防除協会(編). 1997. 松くい虫(マツノザイセンチュウ)沿革と最近の研究. 274pp. 全国森林病虫獣害防除協会, 東京. ・ 布村昇. 1999. ワラジムシ目(等脚目). <i>in</i>: 日本産土壌動物分類のための図解検索, pp 569-625. 東海大学出版会, 東京. ・ 布村昇. 2004a. 育てて、しらべる日本の生き物ずかん(4)ダンゴムシ. 39 pp. 集英社, 東京. ・ 布村昇. 2004b. 千葉県産等脚目甲殻類. <i>富山市科学文化センター研究報告</i> 27: 15-25. ・ 伴浩治. 1980. アメリカザリガニ: 侵略成功の鍵. <i>in</i>: 川合禎次・川那部浩哉・水野信彦(編), 日本の淡水生物: 侵略と攪乱の生態学, pp. 37-43. 東海大学出版会, 神奈川. ・ 風呂田利夫・木下今日子. 2004. 東京湾における移入種イッカクグモとチチュウカイミドリガニの生活史と有機汚濁による季節的貧酸素環境での適応性. <i>日本ベントス学会誌</i> 59: 96-104. ・ リバーフロント整備センター(編). 奥田重俊・柴田敏隆・島谷幸宏・水野信彦・矢島稔・山岸哲(監修). 1996. <i>川の生物</i>. 674 pp. 山海堂, 東京.

カ ウ

桧え 拘穀埵八惚奮杭肱袿况胞蠟惚搜癩溝鵠行巷紅酷伍真匕貢首娛惚簿濠呀晃
貢首拘穀炒况糴俗沸砒拍ク惚広紅紘広紅午梗梗行抗鞭撚惚ヒこ江皇肱広紅紘晃膏
膏豪行抗ぜ惚頼浩疹校合溝午

刷 表膝 啣鳶 拍臙篷 棲 拐珙呀う書珙

刷廬愾斃艙泌 鳶詐策座察憎 變襠 莢珙 書珙

刷た 臨 鴟荔丹珙 臙臙 菟喪珙

刷埵擺查察昨察作彩鴟荔丹珙 臙臙 菟喪珙

刷桧え 腎倬描 丹

衲琢 櫛珙 臙賭絛書珙

琢 慎珙鴟臙莽シ伍炗鴟賭絛書珙

框猫珙挫採書珙

報譜北翠珙嘎書珙

刷桧え 腎倬描 丹雜丹 貢描 丹珙 臙臙 菟喪珙

